

教育と経済・社会を考える
第13回 日本の特殊性と教育
ーイエ、ムラ、おのずから、誠、空気、いじめー

福田光宏

目次

1. 日本の特殊性の源泉	2
2. イエとムラ	3
(1) 集団・組織の種類	3
(2) 内集団システム	5
(3) イエシステム	7
(4) ムラシステム	11
(5) 世間	14
(6) 集団・組織の編成原理	18
3. 神秘的 세계觀	20
(1) 自成的世界觀	20
(2) 事実・価値混同型行動指針と個性否定型人間觀	22
(3) 感情・価値混同型行動指針と個性尊重型人間觀	25
(4) ケガレと互惠性	27
(5) 生き続ける呪術的世界觀	28
4. マコト主義とマゴコロ主義	29
(1) 和合倫理	29
(2) マコト主義	33
(3) マゴコロ主義	36
(4) 努力主義	39
(5) マコト主義と努力主義の弊害	41
(6) マコト主義とマゴコロ主義の相克	46
5. 「空気」の支配	48
(1) 事実・価値混同型行動指針による同調行動	48
(2) しきたりの意外な役割	50
(3) イエシステムの抑圧性	51
(4) 規範・マニュアル嫌い	54
(5) 「空気」の作り方	56
(6) 觀念上の世間の「空気」	60

(7) 他人指向型との関係	6 0
6. 限定的共感システムと共感演技システム	6 2
(1) キャラ化	6 2
(2) 限定的共感システム	6 5
(3) 共感演技システム	6 6
7. 解体する学級	6 9
(1) 学級を擬似イエシステム化しようとする動き	6 9
(2) 仲間集団の分立	7 1
8. いじめ	7 3
(1) 日本におけるいじめの特殊性	7 3
(2) イエシステムが誘発するいじめ	7 3
(3) 共感演技システムにおけるいじめ	7 7
(4) いじめられても仲間集団を離脱できない理由	7 9
(5) 仲良しごっこを強制することの愚かしさ	8 0
9. 平等への三つの道	8 1
<引用・参考文献>	8 3

1. 日本の特殊性の源泉

様々な日本人論、日本文化論、日本社会論が、イエ社会、ムラ社会、タテ社会、母性社会、世間、「空気」、甘え、集団主義、平等主義、マコト主義、精神論・根性論、穢れ、言霊などの概念を用いて展開されてきた。私は、これらの日本の特殊性は、①日本では、血縁関係のない者の間に血縁者同然の関係（心情的一体感等）を作り出すことによって集団・組織の結集力を保つ「イエシステム」が主流であること、②日本人は、「すべてがおのずからになりゆくところの世界」（丸山眞男著「歴史意識の「古層」」P.338）という「自成的世界観」をもっていること、③日本人は、「誠」、「真心」というような「純粋な心」を追求する傾向があること、④日本人は、「権威への依存」よりも「多数派への同調」を好むこと、から生じていると考えている。なお、本稿では、日本人という言葉、日本で主流の文化に染まっている人という意味で使っている。

端的に言うと、欧米では、狩猟採取時代に起源を有する原始的な組織と原始的な心を変革することによって、農業化と工業化に成功したのに対して、日本では、原始的な組織と原始的な心を持ち続けながら、それらを微修正するだけで、農業化と工業化に成功したという点において、特殊なのである。

つまり、日本は、欧米的な意味での近代化を達成したことによって、工業化に成功したのではないのである。日本は、未だに近代化していないどころか、未だに原始的である。このことが分かっていない人たちは、日本の特殊性を封建遺制と見て、いずれ消え去るだろうと考えたり、日本の特殊性を意識の外に追いやって、「ないこと」にしてしまったり

している。特に、近代化後の欧米社会という特殊な社会を、普遍的な社会のあり方であると誤解している社会学者と教育関係者には、その傾向が強い。

しかし、「ないこと」にしても、「ある」ものは「ある」のだから、「ないこと」にすれば逆にあらゆる歯どめがなくなり、そのため傍若無人に猛威を振り出し(山本七平著『「空気」の研究』P.58) てしまう。その典型例が、「イエシステム」に支配された集団・組織では、あらゆる面で同調行動をとることを要求されることによって、皆で一緒に動かない限り、身動きがとれないという状態に陥って、自由を失ってしまい、集団・組織の奴隷に成り果てているのに、この奴隷的關係を「家族的で暖かい人間関係」という綺麗な衣装で覆い隠していることである。

学校にも同様の問題がある。教育関係者は、個性ある者同士が、心を通い合わせ、認め合うことによって、絆を結ぶという共同体を学校に実現することを夢見て、自覚なしに、学校を「共感演技システム」(「6.限定的共感システムと共感演技システム (3)共感演技システム」参照) の支配化に置いてしまっている。学校に、暖かい人間関係を作り出すことを夢見て、現実には、子どもたちに「たまたま同じクラスに配属されただけの者と「親密な友だちとして共同生活」をさせられる強制労働」(内藤朝雄著『いじめの社会理論』P.132) を強いているのである。

2. イエとムラ

(1) 集団・組織の種類

以下に述べる日本の集団・組織の特殊性に関する仮説は、阿部謹也氏の『「世間」とは何か』、「日本に西欧型「社会」は存在するか」(『いま「ヨーロッパ」が崩壊する』所収)、河合隼雄氏の『母性社会日本の病理』、きだみのる氏の『につぼん部落』、公文俊平氏の『情報文明論』、鴻上尚史氏の『「空気」と「世間」』、鳥越皓之氏の『家と村の社会学』、中根千枝氏の『タテ社会の人間関係』、『タテ社会の力学』、『適応の条件』、山岸俊男氏の『日本の「安心」はなぜ、消えたのか』、山本七平氏の『「空気」の研究』、『日本人と組織』等の見解を参考にしているが、それらとは異なる私独自の見解である。

集団・組織が連合体を構成し、集団・組織の連合体が連合体を構成し……という重層的な構造で日本の社会(日本に「社会」があると言えるのかは疑問ではあるが)はできている。

基礎的な集団・組織は、①異質や奴ら＝「外集団」に対して、同質な我ら＝「内集団」を想定することによって本能的に結集する「内集団システム」、②血縁・婚姻関係を中核に「家(イエ)」を構成し、共に働き、共に生活するものを「イエ」の擬似的な一員として加える「原イエシステム」、③閉鎖的な小規模の集団・組織が苦楽を共にすることによって生まれる心情的一体感(家族的一体感)による同調によって秩序を保っている「擬似イエシステム」、④家父長、氏族長、君主、カリスマなどの「人的権威」への依存によって秩序を保っている「人的権威システム」、⑤「贈与」と「返礼」の大枠だけを定め、詳

細は当事者の信頼関係に委ねる「準拠枠設定システム」（「第 12 回 暗黒の情報社会と教育 7.人間と自然の「標準規格化」」）に分類される。

基礎的な集団・組織の連合体は、⑥閉鎖的な連合体が「しきたり」（慣行）による同調と「互恵性」によって秩序を保っている「ムラシステム」、⑦閉鎖的な連合体が運命共同体意識と家族的な組織という理念による儀礼的・形式的な同調によって秩序を保っている「拡大イエシステム」、③「人的権威システム」、④「準拠枠設定システム」に分類される。

また、欧米から輸入されたシステムとして、⑧法、思想などの「記号的権威」への依存によって秩序を保っている「記号的権威システム」、⑨科学的方法、民主主義などの「方法的権威」への依存によって秩序を保っている「方法的権威システム」、⑩「互恵性」から互助的要素や信頼関係形成的要素を取り除き、「贈与」と「返礼」の内容を明確化した「契約」によって秩序を保っている「契約システム」がある（「第 12 回 暗黒の情報社会と教育 7.人間と自然の「標準規格化」、9.互恵性（互酬性）」参照）。

以上に述べたシステムは、共同して生産・消費・学習活動を行う必要性（以下では、「生産共同機能」と呼ぶことにする）から、集団・組織を作るものであるが、精神的な拠り所を得て、不安から逃れる目的（以下では、「精神安定機能」と呼ぶことにする）で集団・組織を作る場合もある。その代表的なものは、⑪神などの「宗教的権威」への依存によって不安を解消する目的で教団などを組織する「宗教的権威システム」である。日本では、昔から、「宗教的権威システム」の影響力が小さく、「内集団システム」、「原イエシステム」、「擬似イエシステム」などが、「生産共同機能」と「精神安定機能」を兼ね備えていたが、近年になって、自分の感情的・直感的判断に忠実に生きようとする「マゴコロ主義」の流行に対応するものとして、「精神安定機能」を主目的とする新たなシステムが生まれた。⑫自分の直感的・感情的判断を支持してくれる者を求めて、限定的あるいは一時的な関係を結ぶ「限定的共感システム」と、⑬各自の直感的・感情的判断を批判しあうことを避けながらも群れるために、「仲良しごっこ」を演じる「共感演技システム」である。なお、特定の思想・イデオロギーを奉ずることによって「精神安定機能」を得ようとする集団・組織もあるが、このような集団・組織は「記号的権威システム」と「宗教的権威システム」の混合体である。このような集団・組織では、思想・イデオロギーが神格化され、「宗教的権威」となっている。

現実の集団及び連合体には純粋なシステムは少なく、これら各システムの混合体である場合が多い。

日本の組織の多くは、欧米の近代的組織の装い、つまり、「準拠枠設定システム」、「記号的権威システム」、「方法的権威システム」、「契約システム」の混合体の体裁を整えているが、実質は、「内-外集団システム」、「擬似イエシステム」、「拡大イエシステム」、「ムラシステム」、「準拠枠設定システム」の混合体である。このような混合体を以後「ムラ・イエ混合組織」と呼ぶ。

(2) 内集団システム

「内集団システム」は原初的なシステムであり、人類が小集団（「バンド」と呼ばれる）で狩猟採取生活を送っていた時代に始まったものである。村田光二氏は、亀田達也・村田光二著『複雑さに挑む社会心理学』「第6章 集団間認知とステレオタイプ」(P.202-204)で、次のように述べている。

私たちが歴史をもつ以前の、進化の途上にあつた長い年月の間……私たちはある特定の「バンド」と呼ばれる狩猟採取集団に所属して生活してきたと考えられます。これこそが<内集団>であり、……内集団成員は日常生活の仲間であり、生存や生殖の点で相互依存関係にあり、共通運命のもとにあつたと想定されます。……他方、この時代の外集団成員は、日常接することは少なかったと考えられます。この時代の集団間関係が……敵対的であつたか、独立していたのか、協調的だつたのか、必ずしも明確ではありません。しかし、バンドといわれる100人規模の集団を超えて、……人々が協力関係を維持する制度は、この時代にはまだできていなかったと思われます。そうすると食糧資源が十分にある地域では独立して、不十分な地域ではそれをめぐって競争的に（場合によっては闘争的に）、関係していたと推測されます。……現生人類の言語には共通の祖先を想定できるそうですが、民族の移動に伴って、それぞれの地域でそれぞれの方言、さらには別の言語を次々と作り出してきたと考えられます。……ダンバーは……他集団から誰かが侵入して、ただ乗り行為をすることを簡単に許さないためにも、言語の違いが重要なシグナルだつたと推測しています。……日常接することも少なくコミュニケーションもむずかしい人を、私たちの祖先はどのように認知したのでしょうか。……まず、「えたいのしれない人」として、……驚きを伴って認知したかもしれません。この驚きはすぐに、「不気味で怖ろしい人」と恐怖に転化して否定的に評価することにつながつたでしょう。これは不幸な出会いです。考古学や人類学の発見の中には、この可能性を示唆する証拠が多数あります。

また、ジュディス・リッチ・ハリスは『子育ての大誤解 子どもの性格を決定するのは何か』(P.177-179)で次のように述べている。

何百万年もの間……霊長類は集団で生活してきた。最後のわずかな期間を除き、個人が生き残れるか否かは集団の存続次第で、その集団は親しい親戚一同で構成されていた。……今日ではもはや集団が親戚同士だけで構成されることはなくなったが、集団行動を駆り立てる欲求はそれに気づいていないようだ。……

人間は親族を……熟知性で見分ける。きょうだいは自分がともに育つた人である。自分のきょうだいと結婚しないのは、それが法に反するからではなく、結婚したいと思わないからだ。男子も女子も一緒に、まるできょうだいのようにキブツで育てられ

たイスラエル人は同じキブツ出身者とは結婚しない。

人間は……自分に似た人間に惹かれる。……類似性は……友人関係の基本でもある。……自分に似た人に惹かれるのは遠く血縁認識から来ているのではないだろうか。狩猟採取民族であれば、自分と容姿がそっくりで同じ言語を話す人が同じ集団の一員である可能性は、容姿も異なり聞き慣れない言語を話す人よりもはるかに高く、その人は自分の親戚という場合もある。……

見知らぬ者はよからぬことを企んでいるかもしれないと、本能的に彼らに不信感をいだく。……見知らぬ人、もしくは奇妙な行動をとる人に対してまず現れる反応が恐怖心だ。恐怖心をいだきつづけるのは不快であるため、恐怖心は敵対心へと変わる。ポリオに感染したチンパンジーが不自由な体を引きずり、自分の集団に戻ったとき……彼の同僚はまず彼に恐怖心をいだき、次にそれが怒りにかわり、彼を襲撃するにいたった。

「バンド」の結集力の主たる源泉は、子どもの時から一緒に生活してきたという熟知性に基づく血縁認識であり、血縁関係による身体的類似性や、同じ言語を話すというような類似性・同質性と、異質な「外集団」に対する敵意は、集団の結集力を補強するものに過ぎなかったのではないかと思われる。このように血縁認識に基づいて結集する「内集団システム」を「血縁的内集団システム」と呼ぶことにする。文化人類学で、リネージ（出自集団）と呼ばれているものである。

「内集団システム」の規模が大きくなって、集団構成員間の熟知性が低下してくると、神話的な共通の祖先を想定し、崇拝することによって、集団の結集力を保つというシステムがあらわれてくる。このようなシステムを「擬似血縁的内集団システム」と呼ぶことにする。文化人類学で、クランと呼ばれているもので、氏族、部族などがこれにあたる。

他人同士で「内集団」を構成する場合には、集団構成員間の類似性・同質性と「外集団」に対する敵意が、熟知性に代わって、集団の結集力の主たる源泉になる。このような「内集団システム」を「同質的内集団システム」と呼ぶことにする。子どもの仲間集団や少人数の同好の士の集まりに典型的に見られる。集団構成員間の類似性・同質性がどのようなカテゴリーに基づくものであるかに関してはかなりの自由がある。

「同質的内集団システム」は、「人的権威システム」、「ムラシステム」、「イエシステム」などと結合することによって、集団構成員間の類似性・同質性を強化しようとする傾向がある。「人的権威システム」と結合した場合には、類似性・同質性に関するカテゴリー内の能力の優劣関係によって、「人的権威」に高低が生まれ、「人的権威」が低い者が「人的権威」の高い者の行動を模倣することによって、類似性・同質性が強化される。「ムラシステム」や「イエシステム」と結合した場合には、「多数派（を装う者）への同調」によって、類似性・同質性が強化される。

「内集団システム」は「内集団びいき」（内集団＝我らをポジティブに評価し、外集団＝奴らをネガティブに評価することによって、内集団の成員をひいきにし、外集団の成員を差別する）という人間の本能に根ざすものであるため、世界的に見ても、ほとんどの集団・組織は、「内集団システム」を利用したり、その影響を受けたりしている。例えば、日本の「イエシステム」と「ムラシステム」は、結集力を保つために「内集団システム」を積極的に利用している。

他方、欧米では、「契約システム」と「記号的権威システム」を作り出し、「内集団システム」を、血縁の有無や、同質性・異質性による差別であるから、排除すべきであるという理念を掲げている。「外集団」の成員とも契約を結んで協力し、「記号的権威」（取引に関する法令など）の下では、「内集団」の成員も「外集団」の成員も平等である。「契約システム」と「記号的権威システム」を利用した市場経済は、「内集団びいき」を禁じることによりグローバル化できたとと言える。取引において「外集団」の成員を差別していると、「外集団」の成員との取引が困難になり、取引関係が「内集団」内に閉じ込められてしまうからである。日本が、経済のグローバル化にうまく対応できないのは、日本の集団・組織が「内集団システム」を利用しているためではないかと考えられる。

ただし、欧米でも、経済以外の分野では、「内集団システム」を利用したり、その影響を受けたりしている。例えば、16世紀以降、ヨーロッパでは、主権・領土・国民を備えた近代主権国家を単位とする政治秩序である「国民国家システム」（主権国家システム）が徐々に形成されてきたが、この国民国家システムは「内集団システム」を利用している。領土内にたまたま住む人々に、「共通の言語」、「共通の文化」、「共通の歴史」なるものを習得させたり、言語、文化、歴史、人種的特徴などが類似している人々を領土内に囲い込み、そうでない人々を領土外に追放したりして、「私たちは〇〇人である」という nation（民族、国民）の虚構を信じ込ませることによって（「第4回 教育の経済効果（その2）7.国民国家体制の維持」参照）、「擬似血縁的内集団システム」と「同質的内集団システム」を働かせている。国民国家では、国旗・国歌に忠誠を誓ったり、敬意を表したりすることが多いが、これは、神話的な共通の祖先に対する崇拜の儀式の一種であると考えられることができる。

(3) イエシステム

「原イエシステム」は、武士の「イエ」である「武士団」から始まった。「武士団」は一族郎党とも呼ばれ、武士の一族と従者からなる。従者も武士の「イエ」の擬似的な一族とされ、日常的に接触し、ともに戦い、苦楽をともにすることによって、血縁関係を超える心情的な一体感を保っていた。菅野覚明氏は『武士道の逆襲』で、次のように指摘している。

戦いを生活とする武士において、主従の結びつきが、給与による雇傭関係や、忠孝仁

義といった理屈に過ぎないとしたら、それは恐ろしいことだ。命を頼むにたる結びつきとは、この身に備わっている手足のように、切っても切れない一体のことでなければならない。(P.117)

ただ血がつながっているという理由だけで、「水も洩らさぬ団結」ができるわけではない。……「頼もしき家来」は、血縁者であるから頼もしいのではない。本当の理由は……お互いが空気のように感じられるほどの長い時間を、喜び悲しみを分かち合いながら、共に行動してきたということにある。重要なのは、共に過ごす時間である。逆にいえば、苦楽を共にする時間の長ささえあれば、実際に血がつながっているかどうかは問題ではないのである。(P.124)

中世・近世の商家も「原イエシステム」をとっており、子飼いの奉公人を家族の一員同様に扱っていた（ただし、家族内における地位は低い）。「原イエシステム」は、「血縁的内集団システム」と「同質的内集団システム」の混合体と言える。

鳥越皓之氏は『家と村の社会学 増補版』（P.11-12）で、「イエ」には次のような特徴があると指摘している。

- ① 家は家の財産としての家産をもっており、この家産にもとづいて家業を営んでいる一つの経営体である。
- ② 家は家系上の先人である先祖を祀る。
- ③ 家は世代をこえて直系的に存続し、繁栄することを重視する。

「イエ」は、生産や戦闘を共同して行うための組織であり、生活の共同は付随的なものに過ぎない。したがって、サラリーマンの家族のように、生産の共同の必要性がなくなると、「イエ」は最小限の規模まで縮小し、核家族化する。

明治時代以降に欧米式の個人参加の組織が導入されて、「原イエシステム」から血縁・婚姻関係が次第に消えていき、「擬似イエシステム」に変わっていった。「原イエシステム」から「擬似イエシステム」に変化したことによって、生産・生活共同体であった「原イエ」は、生産共同体である「擬似イエ」と生活共同体である家族に分離したが、この分離は、「擬似イエ」と家族の対立という問題を生じさせた。「イエ」は、その成員に一体感を求めるため、複数の「イエ」に所属することは、「イエ」への裏切りと感じられる。「擬似イエ」と家族の両方に属する個人に対して、おまえはどちらの「イエ」と一体なのだと選択を迫るのである。会社は家族を顧みずに働くことを要求し、家族は家庭的であることを要求するというような状況である。

現在では、「擬似イエシステム」は、小・中・高等学校の学級、中小企業などの小組織、あるいは、大企業などの大組織の部署（課の単位程度）に見られる。「擬似イエシステム」は、家族が持つような心情的一体感によって、組織を維持している。

血縁・婚姻関係にない赤の他人同士に「つうと言えばかあ」というような心情的一体感を持たせるためには、できる限り若い時から、長年にわたる直接的・全面的な交流を行うことによって、集団構成員間の熟知性を高める必要がある。そうすれば、兄弟に近い関係になれる。「擬似イエシステム」は、「同質的内集団システム」の結集力を熟知性による擬似血縁認識で強化したもののなのである。

日本人が、仏教に由来する「多生の縁」という考えをもっていることも、「擬似イエシステム」の結集力を高める働きをしているのかもしれない。「擬似イエシステム」をとる集団・組織の構成員は、前世での縁によって結びつけられた仲間である、ひょっとしたら前世では血縁関係にあったかもしれないと考えるのである。

所属が頻繁に変わる大組織の部署では、本物の心情的一体感は育ちにくい。そのため、大組織の部署では、心情的一体感を高める（心情的一体感がある振りをすると行った方が正確かもしれない）ための儀式が必要となる。仕事が終わった後、みんなで飲みに行ったり、つき合い残業をしたりするのは、同調行動を増やして心情的一体感を高めるための儀式である。

闘争的で個人の能力の差が明瞭な集団・組織（スポーツ関係の組織など）では、「擬似イエシステム」に「人的権威システム」が混入している。いわゆる「親分子分関係」は「擬似イエシステム」に「人的権威システム」が混入した集団・組織、あるいは、「擬似イエシステム」に「準拋枠設定システム」が混入し「互惠性」が強い派閥にみられるが、前者と後者では、「親分」のあり方が違う。「擬似イエシステム」に「人的権威システム」が混入した集団・組織の「親分」はカリスマ（あるいは、その後継者）的存在であり、「互惠性」が強い派閥の「親分」は利益獲得能力が高く、その利益を気前よく子分に分配するという「御恩」を施すことによって、子分から祭り上げられるという「奉公」を受けている者である。なお、「互惠性」（互酬性）とは、「第12回暗黒の情報社会と教育 9. 互惠性（互酬性）」で説明したように、相手との関係が持続する状況において、相手から受けた利益に対して、自分も同じような利益を返すという規範、要するに、ギブ・アンド・テイクであり、人類に普遍的に見られる規範（本能と言った方が良いかもしれない）である。

「擬似イエシステム」の維持には日常的な接触による心情的一体感が必要なため、少人数の集団・組織でしか機能しないが、結束力が強い。そのため、大規模な組織は、「擬似イエシステム」の連合体である「ムラシステム」になってしまい、各部署が半独立的に行動して、組織全体としての統一的な意思決定を迅速に行うことが困難になる傾向がある。このような傾向を抑えるために、大組織全体を一つの「イエ」とみなそうとする「拡大イエシステム」が用いられている。

「拡大イエシステム」の原型は、江戸時代の大家（藩）である。江戸時代以前、「武士団」は、棟梁を頂点に、「御恩と奉公」という「準拋枠設定システム」による連合体を形成していた（「第12回 暗黒の情報社会と教育 9. 互惠性（互酬性）」参照）。これが封建制度である。「御恩と奉公」とは、連合体の棟梁が各「武士団」に対して「領地支配を保

証したり、新たな領地を与えたりするから、おれの言うことをきいて働け（戦え）」（正確に言うと、本領安堵・新恩給与に伴う軍役）という関係である。この棟梁と武士団の関係は不安定であり、何人もの棟梁の下を渡り歩く「武士団」も多かった。しかし、天下が統一され、領地拡大の余地がなくなると、他の連合体に移る余地がなくなり、生まれついた連合体の中で生きる以外に道がなくなる。「武士団」の連合体が運命共同体化し、大名家という「拡大イエ」に変化し、封建制度が崩れてきたのである。明治維新後、この「拡大イエシステム」は、大企業などの大組織で用いられている。森谷正規氏は『文明の技術史観』（P.96-97）で次のように指摘している。

江戸時代の藩という組織はまったくの運命共同体である。幕府の命でお取りつぶしにあうとすべての藩士が路頭に迷う。他の藩に入るのはほとんど不可能で、浪人となり、その生活は悲惨である。……藩に一生を託すしかないのである。その運命共同体の意識がそっくりそのまま、ごく最近まで日本企業に残っていた。それは……終身雇用制のもたらすもので、ゆえに中途採用は長らくほとんど行われなかったのだが、他の企業に移るチャンスがなかったのだから、忠誠心がどうのこうのというより、一生を会社に託すしかないのだ。

日本の企業、特に大企業は、終身雇用で転職が困難という状況にあるので（現在崩れつつあるが）、就職した企業の盛衰と運命をともにすることになる。この結果、生まれる運命共同体意識が心情的一体感の代用品となって、企業は一つの「イエ」のようなものであるという意識が生み出し、同調行動を促す。ただし、運命共同体意識だけでは弱いので、同調行動を好む人（一般には、「協調性の高い人」と呼ばれている）を採用し、社内旅行、社内運動会、社員食堂、社宅、保養施設等を使って（現在なくなりつつあるが）、心情的一体感に近いものを作り出そうとする。さらに、同調行動という「奉公」をして企業に対する忠誠心を示せば、昇進という「御恩」を受けられるという「準拋枠設定システム」を用いて、同調行動を促している。「拡大イエシステム」の構成員の中には、同調したくて同調しているのではなく、同調性があるふりをする方が得だから同調しているという人も多い。これらにより、社員全体にある程度の儀礼的・形式的な同調が生まれる。

運命共同体意識は、外部にライバルを想定して、危機感を煽った方が高まるので、「拡大イエシステム」には、どこかにライバルを求めて、激しい競争を行う傾向がある。

「拡大イエシステム」は結集力が弱いので、新卒一括採用、企業内教育、企業文化、制服、異質な者に対するいじめなどで人工的に同質性を作り出し、「同質的内集団システム」を利用して、結集力を高めようとすることが多い。しかし、人工的な同質性は、本物の同質性には勝てない。そのため、「拡大イエシステム」内に、本物の同質性に基づく「同質的内集団システム」である派閥が生じることがある。同じ大学出身という同質性に基づく学閥、同じような仕事をしてきたという同質性に基づく技術畑、営業畑などである。なお、

技術畑、営業畑などの「〇〇畑」は、同じような仕事をすることで直接的な交流が多くなるので、「擬似イエシステム」的な要素も帯びている。

「拡大イエシステム」は日本という国家の統一にも用いられている。

なお、以下では、「原イエシステム」、「擬似イエシステム」、「拡大イエシステム」を総称して、「イエシステム」と呼ぶことにする。

(4) ムラシステム

一般的な「ムラ社会」のイメージは、閉鎖的・排他的、横並び、伝統墨守、事なかれ主義、陰湿、義理、人情、上下関係、相互監視的・干渉的、「同質的で多様性・異質性を排除」と言ったことであろう。しかし、人情、上下関係、相互監視的・干渉的、「同質的で多様性・異質性を排除」というのは「イエシステム」の特徴であり、純粋な「ムラ社会」である「ムラシステム」の特徴ではない。例えば、「ムラシステム」では、「しきたり」に反しない限り、多様な行動が許され、他人から干渉されることはない。「しきたり」は生産や生活における協働と祭祀に必要な領域に限定されている。「ムラシステム」は、それほど抑圧的なものではない。生産や生活における協働に不必要な領域まで無制限に同調することを要求し、個人の自由を抑圧しているのは「イエシステム」であり、家族的で暖かい人間関係という綺麗な衣装をまとふことによって、そのことを覆い隠している（「4.「空気」の支配 (2)「空気」の支配領域の拡大」参照）。日本の集団・組織では、「ムラシステム」に「イエシステム」が入り込んで複合化していることが多いため、このような混同と誤解が生じたのであろう。なお、閉鎖的・排他的というのは「内集団システム」の特徴である。

以下に述べる「ムラシステム」に関する仮説は、「イエシステム」の影響を排除した純粋な「ムラ社会」に関するものであり、「イエシステム」の特徴も「ムラ社会」の特徴であると誤解している他の論考とは異なっている。また、西南日本に多い講組結合の村落をモデルにしており、東北日本に多い同族結合の村落のことは無視している。講組結合と同族結合というのは、福武直氏の分類であり、ほぼ同等の「イエ」間の連携が講組結合であり、地主である本家と小作である血縁・非血縁の分家間の主従的な結合が同族結合である。

なお、私は、同族結合（同族団）は、「準拋棄設定システム」と「擬似血縁的内集団システム」が結びついたものであると考えている。分家は本家から土地や暖簾という財産を分与されたから本家に従うという「御恩と奉公」の主従関係を、本家と分家は同一の祖先から枝分かれしたという擬制によって強化し、半永続化したものである。

「ムラシステム」の原型は部落である。部落は、日本の伝統的な農村地域で地縁によって「イエ」が集まった自律的な連合体のことであり、行政区画上の村とは異なる。部落は差別用語として使われることもあるので、以下では、村落と呼ぶことにする。また、「ムラシステム」に支配された連合体一般のことを「ムラ」と呼ぶことにする。

きだみのる氏は『につぼん部落』で、戦前から戦後にかけて住んでいた東京都の(旧)恩

方村（現）八王子市）にある村落（きだみのる氏は「部落」と呼んでいる）やそれ以外の村落の生活についていろいろなことを指摘しているが、それらをまとめると、次のようになる。なお、これらの全てを純粋な「ムラシステム」の特徴と考えてはならない。戦前から戦後の話であるから、他のシステムの特徴も混在している。

- ① 部落の住人間には平等感が強いが、「世話役」（あるいは賃仕事の雇い主）である「親方」と世話される「平^{ひら}」の区別と、結婚や養子の仲人仲介をする親代わりの「親分」と仲人仲介をしてもらった「子分」（この関係は一生続く）の区別はある。「親方」と「親分」は同じ人になる場合が多いが、異なる人になる場合もある。部落の住人の頼み事を厭な顔もせず聞いてやると、自然に住人の信頼が集まり、その人の言うことなら聞くようになり、「世話役」（親方）に祭り上げられる。「世話役」は「平」に命令的な表現は使わない。頼むときは一種の希望法的動詞「……してくれめえか」「……してもらえめえか」を追加する。頼みごとの内容が部落の伝統、慣行にそったものであれば、それだけで平はしたがう（世話役にしたがっているというよりは、伝統にしたがっている）。伝統にしたがっていない場合には、説得が必要であり、「平」がしたがうのは、「世話役」からふだん受けている世話に対する恩返しである。「聞く義理があるからその人のいうことを聞く」（P.167）ということではあるが、当人たちはそのような理屈以前の感情雰囲氣的なものだと思っている。ここから感情雰囲氣的な要素がなくなると、服従は買うべきもの売るべきものという「インスタント義理」になり、選挙での買収や饗応につながる。
- ② 一人の世話役が世話してまとめてゆける家の軒数は 10～15 軒で、その規模の部落が多い。
- ③ 部落議会（部落の意思決定の場）では、各家から世帯主が 1 名ずつ参加して、決議には全会一致を要する。全会一致になる見込みがなければ決はとらない。部落で一番嫌われる悪は部落を割ることなので、7 割が賛成なら、残り 3 割の人はつき合いのために自分の主張をあきらめて賛成するのが「昔からの仕切り」である。どうしても少数派が折れない時には、決をとらずに、少数派の説得を続け、説得に成功してから決をとる。多数決は、恨みを残し部落の円滑な運営を妨げる原因になるので採用されない。
- ④ 部落の住人の行動には二つの型がある。一つは伝統あるいは「集団反射」（集団起源の反射運動）に支えられたもの、もう一つは個人の損得に支えられたものである。例えば、食糧不足のときに、きだみのる氏が、子どもが熱を出して、卵でならご飯を食べるといっているので、卵を分けて欲しいと頼むと、困ったときはお互い様、お金はいらないと言っていた人が、オムレツでも作ろうと思っているので卵を分けて欲しいと頼むと、突然欲張りに変わって、最高の闇値（闇市での値段）を要求してくる。物の売り買いは売るときには天井値近くで売ろうとし、買うときには底値近くで買

おうとし、これに成功すると相手を弱らせるので、気分の良いことであり、自慢のたねになる。なお、贈り物には必ず同額のお返しを同様の機会にしなければならない。

- ⑤ 部落に住むには、殺傷するな、他人の家を燃やすな、^{ぬすつと}盗人するな（他家に押し入ってお金や貴重品を盗むようなことを指し、他家の田畑の作物を盗み食いする程度では盗人にならない）、部落の恥を外にさらすな（警察に密告するなどということ）という掟を守らなければならない。これらを破ると部落八分（村八分のこと）になるのが原則であるが、部落八分を出すことは部落の不名誉なので、できる限り避けようとして、警察沙汰にせず、私刑的なものが行われることがある。部落の住民にとって、国の法は外国の掟のように遠くかすんで感じられ、切実ではない。他人から損害を受けたときにいちいち警察の駐在所に届けずに自分で報復することを好む。「政府も部落のことにつべこべ口出ししねえでもらいてえな」「駐在の世話になるときにゃあ、こっちから出かけるから、それまじやあ放つといてくれたらいいのよ」（P.179）「国っておれら下々から銭を取り立てる仕組みだんべえ」「政府は部落のために何もやっちゃあくれねえや」「おれらはいつも上っ方たちに利用されてるんだわ」（P.180-181）ということである。
- ⑥ 部落の住人の心情は「狭い土地に縛りつけられ、どこにも行けずに代々この土地で暮らして、お互いに他人をひんむき他人を凌ごうと油断なくやって来たんだ。他人の不仕合わせには赤飯を炊き、他人の仕合わせは呪いながらな」（P.98）という言葉に良く表れている。他の家の悪い点を指摘すると、その家の人に恨まれるという恐怖から、部落の住人の口は重い。世話役は平に落ち度があれば、指摘し、助言するのが役目だが、恨まれるのを厭がってこの役目を他人に押しつけようとする。
- ⑦ 部落の住人の公平感は強い。例えば、山の木を切って薪にし、分配する時には、同量の束を作ろうと努力するが、それでも多少の不公平があるので、最後はくじで決める。この公平感は、部落の住人は、機会があれば、人目を盗めたら、遠慮なく、自分の取り分を増やそうとする性格が強く、互いに牽制しあい、戦い合い、他人の取り分を監視し合った結果生まれたものであると思われる。
- (8) 部落と部落の関係は、部落内の家と家の関係に似た競争と敵視の関係にある。他部落に負けたり、笑われたりするのを好まない。部落の住人になるためには、世話役に話を通し、全ての家に手みやげを持ってあいさつに行き、その部落の産土社（氏神）にお詣りしなければならない。嫁や婿にくる場合も同様である。部落の住人にはよそ者の頼みを聞く習慣はない。部落外の人が部落内の人であることを聞いてもらいたかったら、世話役を通す必要があり、いうことを聞かせる相手に日当を払うとなお良い。

また、中根千枝氏は『タテ社会の力学』（P.36）で次のように指摘している。

村落はその村落に住む個々人によって構成されているのではなく、家々によって構成されている、というのが日本人の考え方である。……村の寄合いには、一戸から一人が出席するのが原則である、この一戸一人という方法は、あらゆる村の運営にあらわれている。……各家から一人というのは、個々人は「家」という集団の単位をとおして村落集団に参加しているという、社会学的思考をよくあらわしているのである。

「ムラ」の秩序を保たせているものは、「ムラ」の「掟」（規範）と「しきたり」（伝統、慣行）による同調行動と、「ムラ」の他の住人の恨みを買ひ、報復されるという恐れ（最後には村八分になり、生きていけなくなるという恐れ）による自己抑制である。

「ムラ」の「掟」はどのようにしてできたのであろうか、また、どのような場合に他の住人の恨みを買うのであろうか。

おそらく、「掟」の起源は、人間の本能にあるのであろう。共同体の内部の者に対して「殺傷するな」、「他人の家を燃やすな」（殺傷の面）という掟（共同体の外部の者に対しては適用されない）は基本的には人間の本能に由来するものである（本能が人殺しを許容する場合もある）が、話が複雑になるので、説明は省略する。

「他人の家を燃やすな」（物の破壊の面）、「盗人するな」、「困ったときはお互い様、お金はいらない」、「聞く義理があるからその人のいうことを聞く」というのは、「互惠性」「贈与交換」に基づいている。「第12回 暗黒の情報社会と教育 9.互惠性（互酬性）」で説明したように、「互惠性」とは、相手から受けた利益に対して、自分も同じような利益を返すという規範、要するに、ギブ・アンド・テイク（give-and-take）であり、人類に普遍的に見られる。「贈与交換」は「互惠性」の一種であり、慣行・慣習に基づいて、贈与と返礼を相互に繰り返すことである。近代化以前の血縁、地縁による共同体内において盛んに行われていたが、市場経済の浸透に伴い、「贈与交換」は等価交換に変化しつつある。例えば、「贈り物には必ず同額のお返しを同様の機会にしなければならない」というように「同額」になったのは市場経済の浸透の結果である。同額の返礼をしておけば、文句のつけようがなく、報復合戦にはならないだろうということである。「インスタント義理」も市場経済の浸透の結果、生まれたものである。

「部落の恥を外にさらすな」という「掟」と「政府も部落のことにつべこべ口出ししねえでもらいてえな」というような「ムラ」の自律志向については、「(6) 世間」で説明する。

「ムラ」の構成単位（ムラにおける家、大企業における課、派閥など）同士は平等でなければならない、許されるのは「世話役」と「平」の関係までである。

(5) 世間

中根千枝氏は『適応の条件』（P.111-126）で、次のように指摘している。

日本の場合には、……社会生活において最も重要な意味を持つ人々は、……一定の場を共有する……集団としての形をとりやすい。……その集団は……ソトに向かって排他性を持ち……人々は、この自己にとって第一義的な所属集団を“ウチ”とよんでいる。……これを第一カテゴリーとよぶ。この第一カテゴリーの集団を構成する人々は、自己にとって最も重要な意味をもつ仕事をとおして形成される仲間である。この人々はほとんど毎日のように顔を合わせるのがつねである。……この第一カテゴリーに入る人々というのは、たとえば、農村の場合であれば、昔からまとまりをもっていた部落の成員に相当する……都会であったら、同じ職場で働く人々である（大きな会社などであったら一つの課を構成する人々であり、商店であれば、同業の仲間、または同じ町内の人々である）。……

この第一カテゴリーをとりまいて、第二カテゴリーが設定されている。……農村の場合ならば、自分の……部落と関係の深い隣接地域の村々を包む範囲である。……仕事やムラの行事をとおして密接な関係をもつ人々……などである。大企業の場合ならば、その会社の全員といったような範囲と、同窓の関係、親類などが含まれる。……

日本人にとっては、この第二カテゴリーまでが自分と関係をもつ人々で、それ以外は他人（ヨソのヒト）である。……ここでは……第三カテゴリーとよぶ。……

日本人の仕事ならびに社会生活は、基本的にはすべて第一、第二カテゴリーの中で営まれ、第三カテゴリーの人とは、その時々ビジネスでつながっているだけである。……

第三カテゴリーの人々に対して積極的に働きかけ、本格的な人間関係を結ぼうとしない……

第一カテゴリーの人間関係は「われわれはみな同じなのだ」「すべてお互いにわかっている」ということを前提としている。ここに日本人の「つき合い」の基本的パターンが形成されている。……

社会というものは、A・B・C・D……のいくつかのグループからなりたっていて、自分のグループはたまたま B である。それぞれのグループは種類、役割は異なっている、同様のウェイトともって存在し、社会生活がなりたっていくためには、お互いのグループ間の協力が当然必要である、という認識方法である。……

日本的意識では、自分のグループと同じようなグループが他にあって、それと相互に協力するものだという見方はない。協力者は第二カテゴリーの中にその都度求められるのである。第二カテゴリーは、自分のグループ（第一カテゴリー）と決して同じウェイトではなく、補足的である、ということである。

「第一カテゴリー」は自分が属する「イエ」や「ムラ」であり、それに「第二カテゴリー」を加えたものが「世間」である。「世間」は、協力して何かをする必要に迫られた

「イエ」や「ムラ」同士の連携であり、その連携方法は、原則として、「ムラシステム」の原理、つまり、「しきたり」による同調と「互惠性」にしたがっているが、連携を強める必要がある場合には、「拡大イエシステム」の原理が用いられる。

また、「第一カテゴリー」と「第二カテゴリー」に属する人だけを「ウチの者」（＝内集団）と考え、「第三カテゴリー」に属する人は「ヨソ者」（＝外集団）と考えるという「内集団システム」の原理も働いている。中根千枝氏は『タテ社会の人間関係』で、次のように指摘している。

「ウチの者」「ヨソ者」の差別意識が……打ち出されてくる。……まるで「ウチ」の者以外は人間ではなくなってしまうと思われるほどの極端な人間関係のコントラストが、……みられる……知らない人だったら、つきとばして席を獲得したその同じ人が、親しい知人（特に職場で自分より上の）に対しては、自分がどんなに疲れていても席を譲るといった滑稽な姿がみられる……日本人は仲間といっしょにグループでいるとき、他の人々に対して実に冷たい態度をとる。（P.46-47）

日本人による「ウチ」の認識概念は、「ヨソ者」なしに「ウチの者」だけで何でもやっつけていける、というきわめて自己中心的な、自己完結的な見方にたっている。（P.49）

集団構成員の生活圏がせまく、その集団内に限定される傾向が強い……自分たちの世界以外のことをあまり知らない……学者や知識人はグループをつねに構成し、その中で独特な発想法や用語を使用して、第三者や他のグループとは同じ分野の専門でありながら、さっぱり意志が疎通せず、ディスカッションが不可能だったりする。（P.53）

「独特な……用語を使用」というのは、狩猟採取時代のバンドが言語の違いを内集団構成員と外集団構成員の区別のシグナルとして用いていたことの残滓であると考えられる。

日本という国は、「イエ」「ムラ」「内集団」の連携、その連携体同士の連携、その「連携体の連携体」同士の連携……という繰り返しの連鎖によってできているが、自分が属する「世間」がどの範囲まで及ぶと考えるかは、その人が属する「イエ」「ムラ」「内集団」の性質、その人の「イエ」「ムラ」「内集団」内での立場、その時の状況などによって異なる。普通の人は、普段は、日常的な接触や直接的利害関係のある狭い範囲しか、自分の属する「世間」とは考えず、日本全体を「世間」であるとは考えない。その結果、政府（ここでは、立法・司法・行政・地方自治のための組織という意味で使っている）は「第三カテゴリー」となり、自分の属する「世間」の外の「イエ」「ムラ」「外集団」であり、自分たちとは無関係な存在（よそ者）であるにもかかわらず、自分の属する「イエ」「ムラ」「内集団」にあれこれ余計な口出しをしてきて、勝手に税金を取り立て、仕事を押し付けてくる邪魔者であると感じている。「政府も部落のことにつべこべ口出ししねえでもらいてえな」、「政府は部落のために何もやっちゃくれねえや」、「国っておれら下々から銭を取り立てる仕

組みだんべえ」、「おれらはいつも上っ方たちに利用されてるんだわ」ということであり、江戸時代までの「国」「政府」（幕府、大名等）はまさにそういう存在であった。

日本人は、欧米人のように、人々が契約（社会契約）によって社会や国家を作り、自分たちが作った法にしたがう（市民社会観、市民国家観）とは考えず、自分たちは既に存在する「イエ」「ムラ」「内集団」「世間」の中に置かれ、既に存在する「しきたり」や「空気」にしたがうと考える。日本には欧米流の「社会」は存在しないのである。日本人にとって、政府とは、自分たちが作り、運営するもの（国民主権）ではなく、自分たちとは無関係に勝手に存在するものなのである。

日本人は、法は政府が自分たちに都合の良いように勝手に作ったものだと思っている。「法の支配」を受け入れるということは、自分の属する「イエ」「ムラ」「内集団」が「政府ムラ」（政府イエ）の支配を受け入れることになり、「内集団」の自律という「内集団システム」の原理と「イエ」「ムラ」同士の平等という「ムラシステム」の原理に反すると考える。

「イエ」「ムラ」「内集団」の自律性を守るために、「イエ」「ムラ」「内集団」の構成員は、「政府ムラ」が定めた「法」にしたがわずに、「イエ」「ムラ」「内集団」の「しきたり」や「空気」にしたがい、「部落の恥を外にさらすな」（イエの場合は、「イエの恥を外にさらすな」ということになる）という「掟」を守るのである。「部落の恥を外にさらすな」という「掟」は、「政府ムラ」などの他の「イエ」「ムラ」「外集団」の介入を許さずに、自分たちが属する「イエ」「ムラ」「内集団」の自律性を守るための「掟」なのである。そもそも、「法」を作って「法」を執行しているはずの組織である政治家や官僚の組織が、「組織の恥を外にさらすな」という「イエ」「ムラ」「内集団」の「掟」を守って、自分たちが作り執行しているはずの「法」を破っているのであるから、お話にならない。

なお、日本には「世間を騒がせた」と言って謝罪する「しきたり」があるが、これは、自分の属する「イエ」「ムラ」の「しきたり」や「空気」に反したことはしていないので恥ずべきことはないと思っているが、他の「イエ」「ムラ」の「しきたり」や「空気」に反したことをしてしまったために、自分の「イエ」「ムラ」が他の「イエ」「ムラ」からの攻撃を受ける羽目に陥ってしまい、自分の「イエ」「ムラ」の構成員に迷惑をかけることになったので、自分の「イエ」「ムラ」の構成員に謝るという趣旨であり、他の「イエ」「ムラ」の構成員に謝ったり、他の「イエ」「ムラ」の「しきたり」や「空気」を受け入れたりするということではない。

多くの人にとって、「政府ムラ」は「第三カテゴリー」に属するので、「政府ムラ」に言うことを聞かそうとしたり、「政府ムラ」の言うことを聞いたりする場合には、服従は買うべきもの売るべきものという「インスタント義理」を用いて、「互惠性」を実現しようとする。要するに、贈賄と利益誘導である。

このような状況を脱して、日本という国家の統一を維持し、政府の支配力を強めるためには、日本全体を「世間」化して、そこに「イエシステム」の原理を貫徹させるという方

法がある。明治政府は、日本は皇室を宗家（本家のこと）とする一大家族であり、天皇は宗家の家長であり、臣民は宗家の分家である、あるいは、天皇は家長であり、臣民は天皇の赤子であるという「家族国家観」を唱え、戦前まで、学校で教育された。この「家族国家観」を支えるために、江戸時代に作られた「忠孝一致」というイデオロギーが利用された。儒教において、「忠」とは誠実であることであり、もっぱら君臣間の関係を律するものであり、「孝」は親にしたがうことである。したがって、本来別物であるが、「忠孝一致」のイデオロギーは、親は子どもの栄達を望むものであるから、主君に「忠」を尽くして栄達することは、親に「孝」を尽くすことになることと主張し、家族を変えることができないように、主君を変えてはならず、親にしたがうように、無条件に主君にしたがうことを要求した（水戸学での説明に拠っている）。

「家族国家観」がどの程度の効果をあげたかは疑問である。nation（民族、国民）という虚構を信じ込ませることによって国民国家体制を形成・維持するという欧米の方式（「第4回 教育の経済効果（その2） 7.国民国家体制の維持」参照）の導入（日本語という共通語の整備・普及、神話化された日本人の歴史の編纂（捏造）、国旗・国歌という国民的統合のシンボルの作成など）や対外戦争が運命共同体意識を作り出し、また、画一的な学校教育による日本人の同質化や、マスコミによる擬似的な共通体験の提供（同じテレビ番組を見ている、同じ新聞を読んでいるなど）により、「内集団システム」が働いて、観念的に、日本という国家を「世間」に近いものとみなすようになったのではないだろうか。これは、欧米において、国家が「観念上の市民社会」とみなされることによって、国家的統一が維持されていることに類似したものである。

日本人は、自分と直接的な接触や利害関係のある人々で構成される「現実上の世間」と、自分と間接的な利害関係があったり、興味があったりする「観念上の世間」の二つの「世間」を生きている。大災害などの大事件が起こった時や、オリンピックなどの国際的な大行事があった時に、「観念上の世間」が日本全体に拡大して、日本全体を包みこむ「空気」が生まれることがある。例えば、普段は政府を邪魔者扱いにして、政府のやることに無関心なのに、大事件が起こった時だけ、政府は何をしていたんだとみんなで文句を言ったり、普段は寄付などしたことない人でも、大災害の時だけは募金に応じたり、普段は無関心で、支援をしようとする気など全くない競技種目でも、オリンピックの時だけは、みんなで応援したりする。

(6) 集団・組織の編成原理

ここで、集団・組織の編成原理に関して、今までに述べたことと「第12回 暗黒の情報社会と教育 7.人間と自然の「標準規格化」、9.互惠性（互酬性）」で述べたことをまとめておくと、次のようになる。

①すべての集団・組織は、「血縁・婚姻関係」（あるいは、その代用物としての熟知性、

同質性)、「模倣」(依存と同調)、「互惠性」(互酬性)のいずれか、あるいは、その混合によって維持されている。

- ②あるものを「模倣」することは、そのものに支配され、服従することでもある。
- ③「模倣」には「権威への依存」と「多数派(を装うもの)への同調」の2種類がある。
「模倣」がどちらに向かうかは、集団・組織を取り巻く社会・文化・自然環境によって決まる。
- ④「互惠性」には「贈与交換」、「準拋枠の設定」、「契約」の3種類の形式がある。どのタイプになるかは、「互惠性」の内容を明確化する必要性と可能性の兼ね合いによって決まる。
- ⑤「権威への依存」には「人的権威への依存」、「記号的権威への依存」、「方法的権威への依存」の3種類がある。どのタイプになるかは、模倣技術の水準と人間の心情との兼ね合いによって決まる。
- ⑥これらの組み合わせ方によって、集団・組織の性質が決まる。
- ⑦日本には「多数派(を装うもの)への同調」へ向かう傾向があり、欧米には「権威への依存」へ向かう傾向があることから、日本と欧米の集団・組織の性質の違いが生まれている。
- ⑧「人的権威への依存」と「互惠性」の積み重ねが「慣習」であり、「多数派(を装うもの)への同調」と「互惠性」の積み重ねが「慣行(しきたり)」である。
- ⑨欧米と日本の集団・組織は次の各システムのいずれか、あるいは、その混合によって維持されている。

「内集団システム」: 異質や奴ら=「外集団」に対して、同質な我ら=「内集団」を想定することによって本能的に結集する。「内集団システム」は、血縁認識に基づく「血縁的内集団システム」、擬似的な血縁認識に基づく「擬似血縁的内集団システム」、同質性に基づく「同質的内集団システム」に分類できる。

「原イエシステム」: 血縁・婚姻関係を中核に「イエ」を構成し、共に働き、共に生活するものを「イエ」の擬似的な一員として加える

「擬似イエシステム」: 閉鎖的な小規模の集団・組織が、構成相互の熟知性、苦楽を共にすることによって生まれる心情の一体感による同調、集団・組織への貢献に対する報酬という「互惠性」によって結集

「拡大イエシステム」: 集団・組織の連合体が、運命共同体意識、同じようなことをしているという同質性、一体感を高めるための行事による儀礼的・形式的な同調、連合体への貢献に対する報酬という「互惠性」によって結集

「ムラシステム」: 集団・組織の連携体が、同じようなことをしているという同質性、「しきたり」(慣行)による同調、協同労働等における「互惠性」によって結集

「人的権威システム」: 家父長、氏族長、君主、カリスマなどの「人的権威」(過去のカリスマ、つまり、偉大な家父長、氏族長、君主などの言行を伝承した「慣習」

- も含む) への依存と、「人的権威」の世襲である身分によって秩序を維持
- 「記号的権威システム」：法、思想などの「記号的権威」への依存
- 「方法的権威システム」：科学的方法、民主主義などの「方法的権威」への依存
- 「準拠枠設定システム」：「贈与」と「返礼」の大枠だけを定め、詳細は当事者の信頼関係に委ねる
- 「契約システム」：「互惠性」から互助的要素や信頼関係形成的要素を取り除き、「贈与」と「返礼」の内容を明確化した「契約」によって秩序を維持
- 「宗教的権威システム」：神などの「宗教的権威」への依存によって不安を解消する目的で教団などを組織する
- 「限定的共感システム」：自分の直感的・感情的判断を支持してくれる者を求めて、限定的あるいは一時的な関係を結ぶ
- 「共感演技システム」：各自の直感的・感情的判断を否定しあうことを避けながらも群れるために、「仲良しごっこ」を演じる
- ⑩日本の組織の多くは、「内集団システム」、「擬似イエシステム」、「拡大イエシステム」、「ムラシステム」、「準拠枠設定システム」の混合体である。このような混合体を「ムラ・イエ混合組織」と呼ぶ。

3. 神秘的 세계觀

(1) 自成的世界觀

神道には教典のような明文化された教義がないので、はっきりしない面があるが、神道は次に述べるような「日本古来の宗教的世界觀」に基づいて形作られているのではないかと、私は考える。なお、ここでは、「おのずから」という言葉を、「その態様、その動きについて、……他の力によることなく、その存在に内在する力によってなること」（相良亨著『日本人の心』P.221）、「どこまでもおのずからなる、という自然的生成の觀念」（丸山眞男著「歴史意識の「古層」」P.338）という意味で使っている。

「この世」（「現世（ウツヨ）」、俗なる領域）の全ての「モノ」（人間、動物、物質、集団、組織等）は、それぞれの「魂（タマシイ）」を持ち、その「タマシイ」のエネルギーによって「おのずから」生きることによって、「この世」は調和を保ち、「清らか（キヨラカ）」である（形を保っている）。「タマシイ」は「モノ」に宿り、その「モノ」にエネルギーを与え、その「モノ」の形を保つ存在である。「タマシイ」がエネルギーを失ったり、「モノ」から「タマシイ」が離れたりすると、「モノ」が「ケガレ」て、形が崩れたり（死ぬ、病気になる、壊れる、潰れる、傷つく、乱れるなど）、形が変わったりする（より良き形に変化する場合もある）。時々、異世界（「常世（トコヨ）」、聖なる領域）から「神（カミ）」が「この世」を訪れ、何らかの方法でその訪れを「モノ」に知らせる（本来の意味での「タタリ」）。「カミ」には、「モノ」を「ケガレ」させ、「こ

の世」の調和を乱す（災いとなる場合が多いが、「この世」がより良き方向に変化する場合もある）「荒御魂（アラミタマ）」と、「タマシイ」にエネルギーを与え、この世の調和を保つ「和御魂（ニキミタマ）」の両面性がある。そこで、「カミ」の「アラミタマ」の面を鎮め、「ニキミタマ」となるように「カミ」を祭る（もてなす）。なお、「呪術的世界観」では、「アラミタマ」は「崇り神（タタリガミ）」や「オンリョウ」となる。

この「日本古来の宗教的世界観」の根底には、「すべてがおのずからになりゆくところの世界」（丸山眞男著「歴史意識の「古層」」P.338）という世界観があり、この世界観は、日本人が狩猟採取生活を送っていた時代に形成されたと思われる。この世界観を「自成的世界観」と呼ぶことにする。「4.マコト主義とマゴコロ主義（1）和合倫理」で説明するように、狩猟採取生活においては、人々が心の赴くままに生きていけば、人々が属する集団（バンド）内での調和が保たれる。この経験が、「おのずから」生きることによって、「この世」は調和を保っているという考えを生み出したのであろう。

あらゆる「モノ」（人間、生物、物質、集団、組織など）に「タマシイ」が宿っているというのはアニミズムの発想である。アニミズムは、「意識的汎用知能」の「社会的知能」からの分離と「言語の汎用化・抽象化」が不完全な「声の文化」に特有のものである（「第8回 能力の個人差 7.知能検査で測られる「知能」の正体（1）認知的流動性」参照）。人間以外の生物や物質の世界を人間の社会関係になぞらえて把握してしまうのである。

「日本古来の宗教的世界観」は、アニミズムの一種であるとともに、世界は、生物が、自然環境の中で、捕食被食、共生、寄生などの関係を結びつつ、生まれ、成長し、死ぬ生態系のようなものであり、四季の移ろいのように循環的に変化するという「生態的世界観」（「第8回 能力の個人差 7.知能検査で測られる「知能」の正体（4）分析的シミュレーションと包括的シミュレーション」参照）の一種でもある。ただし、日本人は、生態系の循環は同じことの繰り返しではなく、「つぎつぎになりゆくいきほひ」によって変化し続けるものであると考えるという、線型的な「生態的世界観」を持っている。丸山眞男氏は「歴史意識の「古層」」（丸山眞男著『忠誠と反逆』所収）で、次のように指摘している。なお、「記紀」とは、古事記と日本書紀のことである。

記紀の宇宙……は、永遠不変なるものが「在」る世界でもなければ、「無」へと運命づけられた世界でもなく、まさに不断に「成り成」る世界にはかならぬ。こうした「なる」の優位の原イメージとなったのは、おそらく……「葦牙」が「萌え騰る」景觀であろう。……有機物のおのずからなる発芽・生長・増殖のイメージとしての「なる」が「なりゆく」として歴史意識をも規定している（P.309）

「葦牙の萌え騰る」生命のエネルギーから大地・泥・砂・男女身体の具体的部分が、つぎつぎとなりゆく過程の発想である。……それはまた、天地の運行の「四時忒はざる」（『易経』）循環という円環的法則性の表象よりはむしろ、——究極者の欠如によつ

てまさに無限の遡及性と不可測性を帯びた——「初発」のエネルギーを推進力として「世界」がいくたびも噴射され、一方向的に無限進行してゆく姿である。(P.326)

日本の歴史意識の古層をなし、しかもその後の歴史の展開を通じて執拗な持続低音としてひびきつづけて来た思惟様式……を一つのフレーズにまとめるならば、「つぎつぎになりゆくいきほひ」ということになる。(P.333-334)

「つぎつぎになりゆくいきほひ」の歴史的オプティズムはどこまでも（生成増殖の）^{リアー}線型な継起であって、ここにはおよそ究極目標などというものはない。まさにそれゆえに、この古層は、進歩とではなく生物学をモデルとした無限の適応過程としての——しかも個体の目的意識的行動の産物でない——進化……の表象とは、奇妙にも相性があることになる。(P.342)

「日本古来の宗教的世界観」は「生態的世界観」を極端にして、世界は、無限に生き、変化し続ける、一つの生命体であり、人間などの「モノ」は、その生命体を構成する臓器や細胞のようなものであると考えることによって生まれたものであるとも言える。対馬路人氏、西山茂氏、島藺進氏、白水寛子氏は「新宗教における生命主義的救済観」で、次のように指摘している。

新宗教の思想は民衆の漠然とした宗教意識を、体系化されたかたちで表現していると考えられる……宇宙・世界そのものをけっして衰減することのない豊穡な産出力に満ちあふれた一個の生命体……とみる認識が多く^の教団に共有されている。……宇宙全体が一個の生命体とされることから、その一部として存在している万物は本質的に生命のつながりによって調和的に結びついているという考え方が導かれる……人間も……他の存在と同様、根源的生命によって産み出され、育まれている存在の一つである。……根源的生命が個体化してあらわれたもの、あるいはその生命力が分与された存在と考えられている……人間が神的生命の分与者、あるいはその一部をなすという認識から、人間の本性は神聖、無垢、純粹、完全無欠であり、根源的生命に帰一、合一することが可能であるという思想が導き出される。……根源的生命が人間を生んだのは、その自由な生命発現・開花を願ってのうえのことであった。したがって、そうした生命開花の神意にそうことが人間のつとめ、使命であるという考えも生まれる。……宇宙が活力に満ちあふれていて全体が調和している状態が善ととらえられているのに対し、……宇宙や万物がいきいきとした活力や調和を失い、……根源的生命の発現、湧出、開花が疎外されているような事態が悪としてイメージされる

(2) 事実・価値混同型行動指針と個性否定型人間観

前述したように、丸山眞男氏は「歴史意識の「古層」」（丸山眞男著『忠誠と反逆』所収）で、日本人は世界を「つぎつぎになりゆくいきほひ」と捉えていると指摘している

が、この世界観には、「客観的な「なりゆき」のなかに内在している価値（霊）が自らを顕現させてゆくことへの樂觀、ないしは「安心」が潜んでいる」（P.340）。つまり、日本人は、過去からの物事の「なりゆき」は自然な流れであるという意味において、正しいことであり、現在の「いきおい」は自然な流れであるから、その流れに乗ることは正しいことであると考えるのである。日本人にとって、世界の「つぎつぎになりゆくいきほひ」は絶対的なものであり、それに対して批判を行ったり、逆らったりした者は、「この世」の調和を乱す「ケガレ」た「モノ」として、「世間」から排除される。この結果、世界の「なりゆき」や「いきおい」という単なる事実が絶対的な価値を持ち、人々を強く拘束する力を持つようになる。日本人にとって、「事実は同時に価値」（公文俊平著『情報文明論』P.283）なのである。このことを「事実・価値混同型行動指針」と呼ぶことにする。

日本人にとって、「つぎつぎになりゆくいきほひ」は、キリスト教やイスラム教における「唯一の神」に等しい存在である。「つぎつぎになりゆくいきほひ」という「唯一の神」を冒瀆することは許されないのである。キリスト教やイスラム教における「唯一の神」は、一度言ったことは覆すことがないので、「唯一の神」の言葉は、人々を永続的に拘束する固定的な「規範」となる。これに対して、「つぎつぎになりゆくいきほひ」という「唯一の神」の言うことはころころ変わるので、人々を永続的に拘束する固定的な「規範」は、「つぎつぎになりゆくいきほひにしたがえ」という「規範」と人間の本能に基づく「規範」（互惠性など）以外には、生じようがない。

日本人は、過去からの物事の「なりゆき」のことを「しきたり」や「前例」などと言い、現在の「いきおい」のことを「時勢」、「天下の大勢」、「場の空気」などと言う。「時勢」とか天下の大勢とかの概念には、時間の経過とともに一定の方向への「いきほひ」または「はずみ」＝機がついて、ある段階に達すると、その運動方向を転じさせたり、いわんやそれを逆流させたりすることが、もはやその時点では不可能になる、という認識が必ず含まれている」（丸山眞男著「歴史意識の「古層」」P.331）。

「事実・価値混同型行動指針」は日本人に、過去からの物事の「なりゆき」によって生まれた現体制に順応し、「しきたり」にしたがうという「順応と服従の精神」と、現在の「いきおい」に乗じて、現体制に反抗し、システムを変えようとする「反抗と変革の精神」という相矛盾する二つの精神を併せ持たせる。日本人が、このように相矛盾する二つの精神を併せ持つことが、長い停滞と突然の変革という特徴を生み出す。普段は、我慢に我慢を重ねて、おとなしく体制に従っているが、やがて、堪忍袋の緒が切れる時が来て、体制への怒りが急速に広がって、「時勢」となり（天下の大勢が一変し）、その「いきおい」が変革をもたらすのである。

権力者など、現体制から利益を受けている者にとっては、「反抗と変革の精神」は厄介な存在である。江戸幕府は、身分制秩序を維持するために、中国の名分論に由来すると思われる「分をわきまえる」「おのれの分を尽くす」というイデオロギー（以下では、「本

分思想」と呼ぶことにする)を普及させることによって、「反抗と変革の精神」を抑え込むことに、ある程度成功した。各自が、現体制によって生まれながらに与えられた立場は、それぞれの「本分」(生まれつき備わっている性質・能力)を反映したものであるから、それぞれが置かれた立場に甘んじることが、「この世」の調和をもたらすとして、身分秩序を固定化しようとしたのである。

このことを、「日本古来の宗教的世界観」から見れば、人は、自分の「タマシイ」が持つエネルギーが向かう方向に沿って生きるべきである、言い換えれば、自然体で生きるべきであるという人生観を否定し、人は、努力して、自分の「タマシイ」が持つエネルギーが向かう方向をコントロールして、身分相応の方向に固定すべきである、言い換えれば、「分をわきまえて」生きるべきであるという人生観を強要したことになる。「この世」の調和は「おのずから」生ずるものではなく、人々が「分をわきまえ、おのれの分を尽くす」という作為をなすことによって生じると考えるようにさせたのである。「本分思想」の普及によって、「日本古来の宗教的世界観」は、つぎのような「日本近世の宗教的世界観」に変化した。

「この世」の全ての「モノ」は、それぞれの「タマシイ」を持ち、その「本分」を尽くすことによって、「この世」は調和を保ち、「キヨラカ」である。「タマシイ」は「モノ」に宿り、その「モノ」の「本分」を決め、その「モノ」の形を保つ存在である。「タマシイ」がエネルギーを失ったり、「モノ」から「タマシイ」が離れたり、「タマシイ」の「本分」が変わったりすると、「モノ」が「ケガレ」て、形が崩れたり、形が変わったりする。時々、異世界から「カミ」が「この世」を訪れ、何らかの方法でその訪れを「モノ」に知らせる(本来の意味での「タタリ」)。「カミ」には、「モノ」を「ケガレ」させ、「この世」の調和を乱す(災いとなる場合が多いが、「この世」がより良き方向に変化する場合もある)「アラミタマ」と、「タマシイ」にエネルギーを与え、この世の調和を保つ「ニキミタマ」の両面性がある。そこで、「カミ」の「アラミタマ」の面を鎮め、「ニキミタマ」となるように「カミ」を祭る(もてなす)。なお、「呪術的世界観」では、「アラミタマ」は「崇り神(タタリガミ)」や「オンリョウ」となる。

江戸時代においては、各自の「本分」は身分・性別等によって異なるが、同一の身分・性別内では同じと考えられていた。つまり、同一の身分・性別内では、人間の個性を否定していたのである。現体制によって生まれながらに与えられた「本分」にしたがって生きることを求め、各自の個性に応じた生き方をすることを禁じていたのである。

第二次世界大戦後、平等主義の普及によって、建前上は、「本分」は全ての人間に共通であると考えられるようになってきた(ただし、男女の「本分」は違うという考えは根強く残っている)。この結果、日本では、人間の個性を否定するイデオロギーが広まった。この人間の個性を否定するイデオロギーを「個性否定型人間観」と呼ぶことにする。こ

の「個性否定型人間観」は、全ての人の能力は平等であるというイデオロギーである「能力平等観」につながる。

人間の個性を否定しても、集団・組織では、各個人に異なった仕事をさせる必要がある。そのために、生まれながらに与えられた「分」を尽くすべきであるという「本分思想」の代わりに、各自が集団・組織内でその時々と与えられた「分」を尽くすべきである（職分を全うすべきである）、つまり、「得手不得手や好き嫌いは考えず、今自分に与えられた仕事に全力を尽くすべきである」というイデオロギー（以下では、「職分思想」と呼ぶことにする）が広められた。「本分思想」では、「分」は生まれながらに、固定的に与えられるのに対して、「職分思想」では、「分」はその時々、一時的に与えられるという違いはあるが、いずれも、現体制への「順応と服従の精神」を求め、「反抗と変革の精神」を抑えつけるという点では同じである。

なお、「職分思想」に支配されている組織はジェネラリスト志向になり、組織の構成員は誰とでも交換可能な部品となってしまふ。公務員がその典型であり、その結果、専門性なき素人集団になってしまっている。

(3) 感情・価値混同型行動指針と個性尊重型人間観

世界全体を「つぎつぎになりゆくいきほひ」と捉えるのではなく、各個人を「つぎつぎになりゆくいきほひ」と捉える見方もありうる。「おのずからになりゆくところの人間」という見方である。この人間観を「自成的人間観」と呼ぶことにする。この見方によれば、各個人が心の赴くままに生きることが正しい生き方であるということなり、自分の感情や直感が価値を持ち、自分を拘束する力を持つようになる。このことを「感情・価値混同型行動指針」と呼ぶことにする。

「感情・価値混同型行動指針」の下では、体制から押し付けられる画一的な「本分」や「職分」が、自分の「つぎつぎになりゆくいきほひ」に反するものと感じられれば、「本分」や「職分」を否定して、自分の心の赴くままに行動することが正当化される。自分の心の赴くままに行動することを正当化することが、他人が心の赴くままに行動することを正当化することにつながれば、人間の個性を尊重するイデオロギーが生まれる。この人間の個性を尊重するイデオロギーを「個性尊重型人間観」と呼ぶことにする。

「感情・価値混同型行動指針」に由来する「個性尊重型人間観」とは別に、戦国時代の武士の「勝負の構え」から生まれた「個性尊重型人間観」もある。自軍と敵軍の戦力、戦略などを見誤ると、戦に敗れるので、戦に勝つためには、「あるがままのむきだしの自己や他者を見つづける」（菅野覚明著『武士道の逆襲』P.227）ことが必要である。そうすると、「自分と他人は異なっているということの深さは、何によっても埋めがたい」（菅野覚明著『武士道の逆襲』P.226）ということを理解できるようになり、「人は人たり、我は我たり」という「自己の独り立つ存在性とともにも他者の独り立つ存在性に敬意をもって接する精神」（相良亨著『日本人の心』P.70）が生まれる。この精神は、欧米の個人主

義に基づく個性尊重の思想に近いものである。

「人は人たり、我は我たり」という精神には、「他人によらず、たよらず、自らによってのみ立ち、行動する」「他人がいかにかに評価するとしても、自らは自らの生き方を信じて死ぬ。しかし、他者の存在を認める」（相良亨著『日本人の心』P.58・64）という厳しい覚悟が必要である。「感情・価値混同型行動指針」に由来する「個性尊重型人間観」には、このような厳しい覚悟はない。各自が心の赴くままに行動しても、必ず、お互いに分かり合うことができ、調和が生まれると、ナイーブに考えてしまう（「4.マコト主義とマゴコロ主義 (3)マゴコロ主義」参照）。今の日本を支配しているのは、このような甘い「個性尊重型人間観」である。

なお、「感情・価値混同型行動指針」が「個性尊重型人間観」に結びつくとは限らない。「感情・価値混同型行動指針」が「個性否定型人間観」と結びつくこともあり、その場合、ドメスティック・バイオレンス、無理心中などの悲惨な結果を招くことになる。自分の心の赴くままに他人も行動すべきであると身勝手にも考え、自分の感情的・直感的判断を家族や恋人に押し付けるために、ドメスティック・バイオレンスが起こったり、自分が死にたい状況においては、家族も死にたい状況であろうから、家族を残して逝くことはかわいそうだと思身に思い込むことで、無理心中が起こったりするのである。菅野仁氏は『友だち幻想』（P.40）で、次のように指摘している。

親友なら、親子なら、「自分の気持ちをすべてわかってくれるはずだ」「私たち、心は一つだよ」と考えてしまうほうが、下手をすると自分しか見えていない、他者の存在を無視した傲慢な考えである可能性もあるのです。極端な例が、ストーカーですね。彼（あるいは彼女）たちは、相手の他者性（＝他者であるという本質的な性質）を理解せず、自分の気持ちを投影する道具としてしか見えていないわけです。

「個性否定型人間観」が人間以外の「モノ」に及び、人間の身勝手な行動を導くこともある。山本七平氏は『「空気」の研究』（P.38-40）で、次のように述べている。

塚本虎二先生は、「日本人の親切」という……随筆を書いておられる。氏が若いころ下宿しておられた家の老人は、大変に親切な人で、寒中に、あまりに寒かろうと思って、ヒヨコにお湯をのませた、そしてヒヨコを全部殺してしまった。そして、塚本先生は「君、笑ってはいけない、日本人の親切とはこういうものだ」と記されている。私はこれを読んで、だいぶ前の新聞記事を思い出した。それは、若い母親が、保育器の中の自分の赤ん坊に、寒かろうと思って懐炉を入れて、これを殺してしまい、過失致死罪で法廷に立ったという記事である。……両方とも、全くの善意に基づく親切なのである。よく……「善意が通らない社会は悪い」といった発言が新聞の投書などにあるが、こういう善意が通ったら、それこそ命がいくつあっても足りない。……この

現象は……「自分は寒中に冷水をのむはいやだし、寒中に人に冷水をのますような冷たい仕打ちは絶対にしない親切な人間である」がゆえに、自分もしくはその第三者を、ヒヨコに乗り移らせ、その乗り移った自分もしくは第三者にお湯をのませているわけである。そしてこの現象は社会の至る所にある。

(4) ケガレと互惠性

菅野覚明著『神道の逆襲』、西田晃一著「記紀におけるケガレ観念の構造と両義性」などを参考にして考えると、「穢れ（ケガレ）」は、本来、「タマシイ」がエネルギーを失ったり、「モノ」から「タマシイ」が離れたり、「タマシイ」の「本分」が変わったりして、「モノ」の形が崩れたり（死ぬ、病気になる、壊れる、潰れる、傷つく、乱れるなど）、形が変わったりすることを意味するが、やがて、「ケガレ」をもたらす「アラミタマ」も「ケガレ」であると考えようになり、さらに、「アラミタマ」を引きつける、つまり、災いを呼ぶ「モノに取り憑いたもの」があると考えるようになって、その「モノに取り憑いたもの」をも「ケガレ」と呼ぶようになり、「モノに取り憑いたもの」は近くにいる「モノ」に移る、つまり、「ケガレ」は移ると考えるようになって、「呪術的世界観」が生まれたのではないと思われる。おそらく、伝染病などの経験に基づいた発想なのであろう。

「ケガレ」は移ると考えるので、犯罪者の家族も「ケガレ」というような連帯責任の発想が生まれる。野球部の部員の誰かが非行をしたら、甲子園出場を辞退するというのも、この連帯責任の発想である。部員の一人が「ケガレ」たら、「ケガレ」が野球部全体に移るので、「ケガレ」を「禊ぎ祓う（ミソギハラウ）」儀式として、甲子園の出場を辞退することが必要になってくるのである。「ミソギハラエ」は、元々は「カミ」の「アラミタマ」の側面を鎮める（あるいは、取り除く）ための儀式であったものが、「アラミタマ」を引きつける「モノに取り憑いたもの」を取り除くための儀式であると考えられるようになったものと思われる。

「互惠性（互酬性）」（「第12回 暗黒の情報社会と教育 9.互惠性（互酬性）」参照）に「呪術的世界観」が結びつくと、次のような迷信が生まれる。

贈与を受けたことに対して、「しきたり」に基づいた十分な「返礼」ができずに、「義理を果たせない」「借りを返せない」と、返礼すべき相手が「怨念（オンネン）」に取り憑かれ「怨霊（オンリョウ）」となり、「義理」を果たせなかった家を「祟り（タタリ）」、「義理」を果たせなかった家は「ケガレタ」家になる。「ケガレタ」家は、「ムラ」の住人としての扱いを受けなくなり、報復を受けても文句を言えない存在になり、最終的に「ムラ」から追放される。ただし、土下座して謝罪するなどして「けじめを付けて」、
「ケガレ」を「禊祓（ミソギハラエ）」することができる場合もある。

「しきたり」に基づいて十分な「返礼」ができなかったり、家の一員が「ムラ」の「掟」

を破ったりした場合には、その家の構成員は「ケガレ」、その「ケガレ」が「ムラ」全体に移り、「ムラ」が壊れると考えるので、その家を「ムラ」から追放しようとするのである。阿部謹也氏は「日本に西欧型「社会」は存在するか」（阿部謹也ほか著『いま「ヨーロッパ」が崩壊する』所収、P.69-79）で、「ケガレ」とは「「この人は世間に入れない」という烙印を押された人たちにつける共通の名前なんじゃないか」、犯罪者の家族が、世間から白い目で見られ、肩身の狭い思いをするのは「ケガレ」による、そして、「ケガレ」が日本社会の排他的・差別構造を作りだしており、その典型が部落差別であると指摘している。井沢元彦氏は『言霊（ことだま）』（P.166-172）で、部落差別は、牛や豚の死は「ケガレ」であるという呪術的な考えが元凶になっていることを指摘している。

何が「しきたり」に基づいて十分な「返礼」であるかはあいまいなので、返礼をした方はそれで十分だと思っているのに、返礼を受けた方はそれでは不十分だと思って、両者ともに「オンネン」に取り憑かれて、報復合戦を演じ、しこりが残り、絶交する場合もある。

「しきたり」が違う「ムラ」同士では良く起こることである。そのようなことになるのを防ぐには、契約を結べば良いのであるが、日本人は、そのような水臭いことを嫌う。そもそも「互惠性」という「聖なるもの」にしたがわないと「タタリ」があると思っているが、契約という「俗なるもの」にしたがわなくても「タタリ」はないと思っているので、契約を無視しても「ケガレ」ることはないので平気である。ただし、「司法ムラ」という「俗なるもの」が口出ししてきて、自分たちの「ムラ」では抵抗できない力をふるわれると、嫌々ながら契約にしたがう。しかし、しこりが残り、両者は絶交することになる。

日本では、生活保護で暮らしている人が肩身の狭い思いをしたり、生活保護で暮らすことを非難したりする人がいるが、それは、生活保護で暮らしていると「借りを返していない」「ケガレタ」人と思われるからである。「互惠性」と「ケガレ」の結びつきが社会福祉の妨げになっている。社会福祉を円滑に実施するためには、何らかの方法で「互惠性」の形をとる必要がある。なお、キリスト教やイスラム教では、慈善活動や喜捨を善行という形での神に対する贈与と、神からの恩寵（来世での幸せ）を返礼と、それぞれ考えるので、「互惠性」が社会福祉の妨げになることは少ない。

(5) 生き続ける呪術的世界観

日本人は未だに、「オンリョウ」、「タタリ」、「ケガレ」、「コトダマ」（「第1回 はじめに 4.机上の空論とタブーの排除」参照）というような「呪術的世界観」から解放されておらず、支配されている。明治時代以降の近代化によって、日本人は「科学的世界観」を身につけ、「呪術的世界観」を捨て去ったとみんな思っている。確かに、日本人の多くは、呪術を信じているかと問われれば、そんな非科学的なものは信じていないと答えるであろう。しかし、それは表向きの話しに過ぎず、未だに、吉日・凶日を気にしたり、占いを信じてりする人が相当数いる。また、「呪術的世界観」には、昔からの「しきたり」や何気ない言動のなかで生き続けているが、それがどのような呪術に由来するものなのかがほとんど

忘れ去られているものがある。例えば、結婚式・披露宴のスピーチで「別れる」「切れる」「離れる」などの言葉を使ってはいけない、受験生に向かって「落ちる」「滑る」などと言ってはいけないというような「しきたり」は、言葉にすればそれが実現するという「コトダマ」信仰に由来する「忌み言葉」という呪術なのだが、そのことを自覚している人は少なく、単なるマナーだと思われている。

つまり、自分が「呪術的世界観」にしたがっているという自覚がないので、「呪術的世界観」に縛られているのである。目に見えるものの支配には抵抗できるが、目に見えないものの支配には抵抗することができない。先ず、目に見えないものに支配されているということに気づく必要がある。「呪術的世界観」に由来する差別やいじめを無くすためには、「ケガレ」「タタリ」などの「呪術的世界観」が「しきたり」の中で生き続けているのだということ認識し、「呪術的世界観」に由来する「しきたり」を一掃する必要がある。このようにして日本人が「呪術的世界観」から本当に解放された時、部落差別、犯罪者の家族に対する差別、「場の空気を読まない」人間に対するいじめなどはなくなる。

マックス・ウェーバーなどは、欧米人は呪術から解放され、合理化されたと主張しているが、疑問である。欧米人も「呪術的世界観」から完全に解放されているとは言い難い。例えば、国旗・国歌に忠誠を誓ったり、敬意を表したりするのは、「物神」（呪力を持つものとして崇拝される偶像、物、動物）への崇拝（偶像崇拝）である。「情報神」への崇拝と言った方が正確かもしれない。物理的に考えれば、国旗はインクのついた布、国歌は空気の振動という単なる物（あるいは情報）に過ぎない。国旗という布に敬意を表するということは、仏像という金属を拝むことと、本質的には同じである。考えようによっては、学校教育で国旗・国家の指導を行うということは、学校教育で偶像崇拝という信仰を強制しているということであり、信教の自由を侵害しているということになる。

4. マコト主義とマゴコロ主義

(1) 和合倫理

島藺進氏は『救いと徳』（P.41-43）で、次のように述べている。

近代日本人の道德意識は、「和合倫理」という語で概括できると考える。すなわち、「和」「和合」「調和」に最大の価値を置く道德意識である。この道德意識は、他者との利害や思想の対立が基本的には克服できるはずだという楽観を背景にしている。各人が誠意・善意（「誠」）を持つことにより、またそれぞれがその時その場の状況と関係に応じた態度を取ることにより、対立を超えた調和と一致の状態が必ず実現すると考えるのである。調和と一致は何らかの理念や原則に皆が従うことで実現するのではなく、集団とその中の関係の動向に随順することで実現する。しかし、当事者にとってはそれは機会主義的な状況追従とは自覚されず、人間を超えた「自然」の流れへの一体化と感じられている。……

実際に家族や自分の所属する身近な小集団や縁故関係の範囲で調和を実現しえたという経験が積み重なって、和の理想は生活信条や道徳的信念に近づいていく。身近な関係の範囲での和の実現の経験をモデルとして、もっと広い関係にも及ぼしていこうとする。地域共同体も会社などの組織も国家も国際関係も、また文化的な背景の異なる他者との間でも同じやり方で調和を実現できると考えるようになる。そして、この試みが挫折する場合、それは他者の側の和の努力の欠如や誠意の欠如に帰せられることになる。そうした他者や集団は、和を求めている人達なのであるからという理由で、和を求める関係のつながりから排除される結果にもなる。

集団（関係のまとまり）の調和が重んじられるのだから、個人の独自の意志や欲望はある程度、犠牲にされねばならない。しかし、それは自己犠牲と意識されない。集団全体の利益になることが「自然に」自己の利益にもなると感じられるので、集団と個人の対立とは自覚されにくい。したがって集団の規範に対して無自覚で、それを「自然」なものと考えやすい。集団の秩序は超越的な規範や理念に基づく戒律や規則によってではなく、和を求める人々の「誠」の力で「自然に」実現できると考える。集団の和から排除される人達は、この「誠」によるアプローチを最後まで頑なに拒み続ける変人、あるいは、主義主張に凝り固まった特殊な人種と受け取られる。

「日本古来の宗教的世界観」にしたがえば、「世の中」は「自然に」調和するはずあり、「他者との利害や思想の対立が基本的には克服できるはず」である。「すべてがおのずからになりゆくところの世界」（丸山眞男著「歴史意識の「古層」」P.338）という「自成的世界観」を信じると、その世界の構成要素である「おのずからになりゆくところの人間同士の間に、「おのずから」（自然に）調和が実現し、「おのずからになりゆくところの人間」と「おのずからになりゆくところの集団」の利害は一致するはずだという「楽観」が生じ、人間同士や人間と集団との間の利害対立を調整する手段としての「集団の規範に対して無自覚」になってしまう。

しかし、現実には、人々が「おのずから」、つまり、心の赴くままに生きていけば、集団・組織内の人間関係に調和が保たれ、「集団全体の利益になることが「自然に」自己の利益にもなる」というのは、人類が狩猟採取生活を送っていた時代だけである。「第8回能力の個人差 13.才能の差異を増幅する本能」で述べたように、狩猟採取民の集団であるバンドでは、狩猟採取した食料等の分配において「互惠性（互酬性）」を意識することを禁じ、平等に分けることを要求する「規範」を作ることによって、バンド内に、狩猟採取能力の格差による上下関係が生じることを防いでいた。「互惠性」を意識することを禁じると、狩猟採取の上手な人が「自分だけが損をしている。もうやってられない」と手を抜いて、集団の食料獲得能力が低下して、みな飢えてしまうはずである。このことは、共産主義の失敗が証明している。しかし、バンドでは、そのようなことは起こらなかった。それは、「自分の得意なことが好きになり、見返りを期待しないで、その好きなこと

をする本能」による支えがあったからである。人類は、進化の過程で、長い間、バンドを作り、狩猟採集生活を送ってきたが、その過程で、狩猟採取生活に適した役割分担（分業体制）を自然にとれるように、各自の遺伝的な才能の差異とその最適な配分が生まれ、「自分の得意なことが好きになり、見返りを期待しないで、その好きなことをする本能」が生まれたのである。狩猟採取の上手な人は、狩猟採取によって自分の取り分を増やしたり、自分の権威を高めたりするためではなく、ただ単に狩猟採取が楽しいから、狩猟採取をしているのである。「互惠性」に基づいて、他者からの賞賛やお返しがあれば、励みになるが、賞賛やお返しがないからといって、楽しいことを止めるはずがない。だから、賞賛やお返しを禁ずる規範があっても、狩猟に手を抜かず、バンドの食料獲得能力が低下しないのである。狩猟採集時代は、各人が自分の好きなこと（男性には狩猟と戦闘が好きな人が多く、女性には採取と養育が好きな人が多い）を楽しんでしていれば、バンドの成員の生活に必要な食料等を確保できたという、精神的には幸せな時代だったのである。みんなが自分の好きなことをしているので、不満を持つ人も少なく、バンド内の調和は自然に保たれていたのである。ただし、バンド間では紛争が多かったと思われる。

「得意で好きなこと」の分布は、狩猟採取生活に適したものなので、農業社会、工業社会、情報社会には適しない。だから、農業社会、工業社会、情報社会では、自分が「得意で好きなこと」を仕事にできる人が少なくなって、「苦手で嫌いなこと」を仕事にせざるを得ない人が増え、仕事を怠ける人が出てきて、彼・彼女らに仕事を強要するためのシステム（平等分配を止め、多く働いた人が多くを得るようにする、暴力で労働を強制するなど）が必要になり、集団内に格差が生まれ、不満を持つ人が増えて、争いが生じるようになってきた。

そこで、人間関係の調和を妨げる原因が探されるようになった。調和を妨げる原因は、古くは、「ケガレ」にあるとされ、人々が「ケガレ」を清めて、「清き明き心」を持てば、調和が実現すると考えられた。中世になると、調和を妨げる原因は私心私欲にあるとされ、人々が無私無欲になって、「正直せいぢやくの心」を持てば、調和が実現すると考えられた。これは、仏教思想の影響を受けたためではないだろうか。近世に入ると、調和を妨げる原因は、人々が「分をわきまえないこと」にあるとされ、「各々がその分を尽くせ」ば、調和が実現するというイデオロギー（本分思想）が、江戸幕府の手によって広められた。さらに、「本分思想」と「イエシステム」から、「前に置かれた事、前にいる人に対して純粹で精一杯であることを求める」「マコト主義」が生まれた。

「マコト主義」は日本人を勤勉化し、農業生産力を増強し、日本の工業化を推進した。現在でも、日本人の多くは、「マコト主義」を信仰している。

相良亨氏は『日本人の心』（P.73-75）で、次のように指摘している。

日本人が自らに求めた生き方の、もっとも基本的なあり方……は心情の純粹性、無

私性の追究であったといえよう。……人間の生き方についての基本的な自覚は、民族によって異なる……ギリシア人やインド人は宇宙を貫く理法の実現を考え、ヘブライ人は、人格的な神の命令としての律法の実現を考え、中国人は、天の道の地上での実現を考えている。これらはいずれも何らかの客観的な理法・規範の存在を認め、それに従い、それを実現することを人間の生き方の基本とするものである。……これに対して日本人は、歴史のそのはじめから、ひたすら主観的な無私清明な心を追究し、それを十全な人間関係を実現する倫理として捉えてきた。客観的な理法・規範を追究する姿勢は、今日なお、十分な成熟を見ないでいる。……伝統的な純粹、無私の追究は、今日は、おもに「誠実」という言葉で捉えられている。……古くは「清き明き心」として捉えられ、中世においては「正直^{せいちよく}の心」として捉えられていた。そしてそれが近世以降において「誠」さらに「誠実」として捉えられた。(P.73-75)

清き明き心とは……かくすところのない透明な心……聖なる自然と一体の穢のはらわれた心……人間関係においては二心のない心…… (P.77)

正直とは、①根本においてまず私のない心である。だが同時に、②無私なるがゆえに、状況状況における是非善悪をあきらかに捉える心である。……さらにまた正直は、③その捉えた是非善悪に即して行動する心でもある。……中世の人は……無私になればおのずから道理に生きることになるかと理解していた。(P.78-79)

誠を重視する発想は、前に置かれた事、前にいる人に対して純粹で精一杯であることを求めるものである。……誠の姿勢には本来、状況に対する根源的な批判的な姿勢は内包されていない。……日本人は勤勉であるという。……勤勉には、おかれた状況に純粹に精一杯かかわることをよしとする誠実のモラルが働いているのではあるまいか。(P.97-98)

儒教的教養にもとに説きだされた誠に対して、国学者本居宣長によって真心^{まごころ}が説かれた。誠と真心とは、往々誤って同一視されるが、歴史的には異なる内容を持つものであった。真心は、いっさいのさかしらを排した人間の「うまれつきたるままの心」である。……宣長は、誠たるべしということを含めて、すべてかくあるべしということをしごと^{しごと}として排して、……「うまれつきたるままの心」になれという。(P.99-100)

宣長の立場は、後の国学者富士谷御杖……にうけつがれ、……御杖は……欲は卑しいものではなく、むしろ尊いもので、神道とはこの欲を実現する仕方であるという。われわれの欲を押し出すところの内在する根源、それが彼においては神である。……天地のおのずからにあるわれの、そのわれの内面のおのずからに生きるのであるから、欲望の追求は、おのずからに生きることである。(P.238-239)

相良亨氏は、「日本人が自らに求めた生き方の、もっとも基本的なあり方……は心情の純粹性、無私性の追究であったといえよう」と主張しているが、この主張は不正確であると、私は思う。「日本人が自らに求めた生き方の、もっとも基本的なあり方」は、「す

べてがおのずからになりゆくところの世界」(丸山眞男著「歴史意識の「古層」」P.338)において「おのずから」生きるための「心情の純粋性」の追究であり、「正直」と「誠」において、その手段として、「無私性の追究」が用いられたに過ぎない。「正直」においては、私情・私欲を捨てるという意味において「無私」であり、「誠」においては、「おかれた状況に純粋に精一杯かかわる」ために自分の感情を押し殺して力を尽くす、つまり、「分をわきまえ、おのれの分を尽くす」という意味において「無私」である。「清き明き心」においては、「穢」つまり「ケガレ」を清めれば、心は純粋になり、「真心」においては、「われの内面のおのずからに生きる」ために、私欲の追究が肯定されている。

「真心」は、江戸時代の国学者によって唱えられたが、表に出ることはなかった。しかし、近年になって、江戸時代の国学者による「真心」の主張を知らないと思われる若者たちが、「真心」を表に出し始めた。江戸時代の国学者は、「真心」によって、自動的に人間関係に調和が生じると楽観的に考えていたようだが、「マゴゴロ主義」を信仰する現在の若者たちが置かれている状況を見ると、「真心」によって、自動的に人間関係に調和が生じないようである。この問題については、後述する。

(2) マコト主義

金山宣夫氏は『国際感覚と日本人』で、日本人は「マコト主義」を信仰していると指摘し、次のように述べている。

マコトとは……人生や人間関係に対する誠実であり、役割に最善を尽くしてあたるということである。……一つの同じ利益を他人に提供するにしても、それを非互酬的に、つまり返礼を期待せず、また反復的に提供すると信じられるに足る形をとる。それによって、他人から承認、共感、尊敬を得ることができる…… (P.24)

日本の秩序は自己委譲の関係網によって維持されている部分が多い。「頼る」「まかせる」「あやかる」「まねる」といった自己委譲ないし他者依存の願望は、一般に日本人の特質といわれてきた「甘え」というものにきわめて近く、……マコトの重要な内容でもある。……マコトとは、つねに何かを求めている人間が、求めて与えられるためにとる態度である。(P.31)

動機において純粋で疑念を伴わず、いかなる困難や妨害があってもひたすら努力を重ねるという心情である。深い精神的・宗教的な意味が含まれており、それを欠くと心がくもり、神に恥じなければならぬというものである。(P.37)

マコトがあるかぎり、失敗や敗北があっても、いや、そうであるほうがかえって賞賛され崇拝されさえする (P.43)

日本人が「会社への貢献」とか「休日返上で仕事」をうたうのは、それこそマコト主義の作用を示すことである。(P.50)

マコト主義は……いくつかの倫理的要素を含んでいる。その一つは「分」^{ぶん}に関する

るものであり、分とは、得べき所、義務、地位と役割を指す。社会のすべての成員がそれぞれにもち、それによって相互に依存しているというものだ。「分をはたす」「分をつくす」ということが肝要である。(P.63)

マコト主義における基本的かつ最大の罪は、マコトにもとることである。……「誠意ある態度」が認められなければ、いっさいが不利に、そしてしばしば悪意をもって扱われてしまう。……選挙において、「誠意ある態度」は決定的意味をもつ。だから、候補者は声がかれていなくてもわざとカスレ声で演説し、寒風吹きすさぶなかでもコートを着ずに街頭に立って頭をさげつづけるのである。……選挙は民主主義の実践としての政治手続きというよりも、マコト主義者の一大祭礼というべき性格が強い。(P.67)

マコトは曇りのない心を指すべき倫理的な概念である。それと同時に、……なんらかの形で外在化され、その局面においては倫理からへだたり、あるいはそれに反しさえすることがある。……日本においてマコトの外在化手段として、名刺とか「名刺がわりにちょっとおいていくもの」、さらには「相当のお礼」といったものがある。「ちょっとご挨拶だけ」といって顔出しするとか、「どうせ通りがかりで」と「お百度参り」をすとかのパフォーマンス……が、実質的意味を付与されている。……外国人には過剰と見えるらしい包装も、マコト主義のパフォーマンスである。……外国人のあいだには、日本の工業製品について「過剰品質」だという向きがある。……過剰品質もマコト主義の儀礼と見るべき余地がある。(P.75-91)

「本分思想」にしたがって「分をわきまえ、おのれの分を尽くす」者は、この世の調和を保つという貢献をしているのだから、贈与交換の原理に従えば、その貢献に対する返礼があつてしかるべきであるということになる。菅野覚明氏は『神道の逆襲』(P.91-112)で、柳田国男氏の研究に依拠して、日本の昔話(「はなたれ小僧さま」「花咲かじいさん」など)には、奇異なものに姿を変えた神のごとき存在を無分別にもてなし、奇異なもの奇妙な要求に馬鹿正直に答えた者に福がもたらされるという「正直の頭に神やどる」パターンがあることを指摘し、この無分別、馬鹿正直こそが中世において神をもてなすための「正直の心」であつたと指摘している。神からの「贈与」の要求に対して「正直の心」をもって応えれば、神から「福」という「返礼」がくるのである。これは母性的な神と人間が甘え合い、同調し、一体化する関係であるとも言える。

このような神との贈与交換が、「擬似イエシステム」「拡大イエシステム」(「1.イエとムラ(3)イエシステム」参照)の確立にともない、人間との贈与交換に変化し、「正直の心」が「誠」に変化したのではないかと思われる。「マコト主義」を信仰する者は、自分が相手に対して「誠」を尽くすという「贈与」すれば、相手も自分に対して「誠」を尽くしてくれるという「返礼」をしてくれると期待するから、「誠」を尽くすのである。その意味では、「マコトとは、つねに何かを求めている人間が、求めて与えられるためにとる態

度」でもある。そこには、自分の「誠」を相手が理解してくれ、自分の期待通りの「誠」を相手が返してくれるだろうという「甘え」がある。この「甘え」の背景には、相手は自分と同質の存在だから、同じような状況において同じように感じて、同じように考えることによって、相手が自分に同調してくれるはずだという信念と、同調により心情的一体感を得て、信頼関係を築こうとするねらいがある。

ニコラス・ハンフリー（Nicholas Humphrey）は『内なる目』で、人類は、自分の心を他者の心のモデルとして使って、他者が何を感じ、何を考えているのかを推測していると指摘しているが（「第 8 回 能力の個人差 7.知能検査で測られる「知能」の正体（1）認知的流動性」参照）、「マコト主義」信仰者は、この推測を「純粹に」（単純に）信じることによって、人間の個性を否定する「個性否定型人間観」に陥ってしまっているのである。「マコト主義」信仰者が追究する「心情の純粹性」は、“pure”でなく、“naïve”あるいは“innocent”である。「マコト主義」信仰者のナイーブさは、吉田松陰の行動に典型的にあらわれている。相良亨氏は『日本人の心』（P.92）で、次のように述べている。

門人の一人は彼に「死」の一字を贈った。白州（奉行所）において幕吏と刺しちがえて死ぬ覚悟を松蔭に求めたものである。しかし、松蔭は、「死」の一字をしりぞけて「誠」の一字をとった。彼は、己の抱負を誠心誠意幕吏にうたえることによって、幕吏を動かすことのみ考え、それに賭けようとした。……まさにこれが、誠に生きる生き方である。だが、周知のように、幕吏に彼の至誠は通じなかった。彼は刑場に消えた。

「個性否定型人間観」を信じる日本人には、余計なお世話を善意や愛情だと勘違いして、個人の自立を疎外したり、自己満足的な一国平和主義に陥ったりする傾向がある。諏訪哲二氏は『プロ教師の見た教育改革』（P.87）で、次のように指摘している。

私たちの文化はこちらとあちらとの距離が設定できない。あちらはこちらと同質のものだと思いがちである。こちらにあちらを害する気がなければ、あちらは決して攻撃してこないと信じている（一国平和主義）。親の子に対する距離、教師の生徒に対する距離は余計そうである。まかせると言うにおいて、気に入らないと平気で介入する。相手のために介入する（愛情）と思いついでいる。こちらとあちらが通じ合わないものとまず思い切ることが、相互の自立にとって大切である。

「マコト主義」信仰者の「甘え」合う関係は、母子関係を模したものである。「マコト主義」は、「イエシステム」への適応なのである。「マコト主義」においては、感情移入し合い、共感することによって、心情的に一体化して、同じものを見て同じように感じ、同じ状況において同じように行動することを理想とするのである。日本人は、このよう

な状態は、「我を殺す」ことによって生じると考える傾向がある。河合隼雄氏は『母性社会日本の病理』（P.240-241）で、次のように指摘している。

われわれ日本人の自我は西洋人に比べてはるかに他人に対して開かれている。上司と部下が相談するなどといっても、時にそれは以心伝心のうちに、言語を用いずに同意に達するときもある。それはつまり、ひとつの自立した自我と、他の自立した自我が言語的に交信し、一方が他方の志向に従うというパターンではなく、両者がひとつの方向を共有するのである。このような点を日本人が高く評価するとき、それは「無心」とか「無我」ということが強調されることにつながってくる。たとえば、邦楽の演奏などの場合、演奏者たちは誰が主導者ということなく、「無我」の境地で演奏するが、それは始めも終わりも——時に相当な即興性をもちつつも——ぴたりと合うことが賞賛される。これは西洋の音楽の場合、指揮者というひとりの人格によって統制されるとの好対照をなしている。つまり、われわれは常に「我を殺し」、無我の状態にあるとき、それは極端に他に開かれたものとして、自分が勝手に演奏しているかのごとく見えつつ、それは他と調和することになっているのである。

私は、「日本人の自我は西洋人に比べてはるかに他人に対して開かれている」というのは、誤った認識であると考える。現代の日本人の自我は西洋人の自我と同じようなものであるが、「イエシステム」に支配された集団・組織の中で生き延びるために、「我を殺す」振りをしているだけなのである。邦楽の演奏などの場合に、「始めも終わりも……ぴたりと合う」のは、邦楽のグループの中で力のある者の演奏に、力のない者があわせるからである。「下位にたつ者が上位にたつ者に対して譲歩するのが当然という権力構造の助けを借りることによって、相互のアジャストメントをスムーズに行わせ」（中根千枝著『適応の条件』P.140）ているだけである。ただし、「上位にたつ者」も「下位にたつ者」の信望を得るために、「下位にたつ者」の意向をくみ取って行動する必要があるので、自分の思い通りにできるわけではない。

「我を殺す」振りをするという人間性の抑圧を、「無我」の境地や「家族的で暖かい人間関係」というような一見美しい言葉で覆い隠しているのが、「マコト主義」と「イエシステム」である。

(3) マゴコロ主義

前述したように、「マゴコロ主義」は、江戸時代の国学者の主張に始まる。菅野覚明氏は『神道の逆襲』（P.205-211）で、次のように述べている。なお、「真淵」とは、賀茂真淵のことである。

真淵は、「いにしへの歌は、よろづの人の真心なり」……という。ここでいわれる真

心は、……他人とは分かち合うことのできないこの私の心の動き、すなわち私情としての悲しみ・喜び・怒り等々を指すものである。真淵は、人間の本性を、儒学者がいう「性の善」のような人々に共通な一般概念の水準には求めない。彼は……人それぞれに特殊で共約不可能な「私」性に、人間の生の本質的な領域を見ている。「同じきに似て異なる心」「人の心は、私ある物にて」……この私がありのままに表現され、しかもそれが「真心」として肯定されることが、真淵が『万葉集』を通して夢見た生の理想だったのである。……

しかしながら、もし、真淵がいうように人々が自由に内心の私の直接的な表出に走ったとしたら、世の中は各々の私のぶつかり合いとなり……ついには、欲望の無秩序な争い・混沌に陥ってしまうほかはないであろう。……秩序を守るのはやはり道理・道徳以外ないのではないか。……

こうした疑念に対して、真淵は、道徳の教えによって世の中が治まると考えるのは、全くの錯覚であると主張する。……道理によって説得されるのは心のほんの表面的な部分にすぎない……（「うわべは聞きしやうにて、心にはきかぬことしるべし」と真淵はいう……各人のどろどろとした私にこそ、生の根本的欲求が隠されている。そうした心のありようを、人間の知恵で考えた道理によって説得し、一律に統制しようとする試みは、単に無効であるだけでなく、むしろ害悪を増すものですらある（「いやしくも狭き人の心もて急ぐは、かへりて乱れとなれり」）。……

道徳的教えは人性に反しているがゆえに無益有害であるとするこの議論は、「漢意」批判とよばれ、国学思想の一つの特徴を示すものである。……

真淵は……古代の人々は……めいめいの内心の要求のありのままに生きていたという。そして、そのように心直きままに振舞っているときには、難しい教えはなくとも、おのずから世は安定し、道が実現するのだという。

賀茂真淵の思想は、「日本古来の宗教的世界観」の原初的な形に忠実なものであり、日本人が狩猟採取生活を送っていた時代のイデオロギーを復活させたものと言える。「(1)和合倫理」で述べたように、狩猟採集時代には、「自分の得意なことが好きになり、見返りを期待しないで、その好きなことをする本能」にしたがって、各人が自分の好きなことを楽しんでしていれば、集団（バンド）の成員の生活に必要な食料等を確保できたという、精神的には幸せな時代だった。「めいめいの内心の要求のありのままに生きて」いけば、「おのずから世は安定」していたのである（ただし、バンド内での安定に過ぎず、バンド間には争いが生じていた）。しかし、「得意で好きなこと」の分布は、狩猟採取生活に適したものなので、農業社会、工業社会、情報社会には適しない。だから、農業社会、工業社会、情報社会では、自分が「得意で好きなこと」を仕事にできる人が少なくなると、仕事を苦行に感じる人が多くなり、「人間の知恵で考えた道理によって説得し、一律に統制しようとする試み」をしない限り、世の中は安定しなくなってくる。この「統

制」は、多くの人びとにとって「自分の得意なことが好きになり、見返りを期待しないで、その好きなことをする本能」に対する抑圧となるので、「道理によって説得されるのは心のほんの表面的な部分にすぎない」。理性では理解できても、本能が許さないのである。このような本能の抑圧に対する不満が「マゴコロ主義」を生み出すのである。

日本人は、本音では「マゴコロ主義」を信仰しながら、建前では「マコト主義」を信仰している振りをして生きてきたのではないだろうか。「マゴコロ主義」を貫けば、「イエシステム」の支配下にある集団・組織から爪弾きにされてしまうので、やむを得ず、「マコト主義」を信仰している振りをする。その結果、「マコト主義」は、その実質を失い、儀礼化してしまっている。

自分の本能から生じる欲求に対する抑圧は、個性の抑圧と感じられるので、個性尊重の思想と「マゴコロ主義」は容易に結びつく。そのため、個性化教育は、「マゴコロ主義」の隆盛をもたらした。土井隆義氏は『友だち地獄』で、次のように指摘している。

個性化教育は、……すでに存在する素質の開花を手助けする「支援」という発想に近い。したがって、……生まれもった自分の本質へのこだわりというかたちで、生得的な属性を過剰に重視するような態度の形成にもつながっていく。こうして新しい教育理念の下で、子どもたちにはいわゆる「自分さがし」と、それに基づいた自己表現が期待されるようになった。(P.39-40)

現在の若者にとっての純粹さとは、社会の不純さと向き合うことで対抗的に研ぎ澄まされていくような相対的なものではなく、むしろ身体のように生まれながらに与えられた絶対的なものである。(P.110)

純粹なるものが生まれもった実体だとすれば、その本質は言葉によって語られたり、言葉を通して実感されたりするものであってはならない。……言葉以前の生理的な衝動、あるいは身体的な感覚こそが、彼らの感じる純粹さの本質となる。現代の若者たちが、ものごとの価値判断を行う場合に、ともかく自分はどう感じるのか、その直感のようなものに根拠を置こうとする傾向を強めているのはそのためだろう。「私が本当に感じているものは何なのか」、それこそが、自らの態度を決めるさいのもっとも重要な判断基準なのである。……学校の廊下を走っている生徒に教師が注意をすると、「いけない理由は何ですか、こんなに広くて気持ちのよい場所なのに」と、まったくもって率直な反応が返ってくるとことが近年は増えているという(『毎日新聞』朝刊、2000年5月13日)。(P.114-115)

近年のこのようなメンタリティの変化は……R・ベラーの言葉を借りて、「善いこと」(being good)から「いい感じ」(feeling good)への評価基準の変転といってもよい(……『心の習慣』……)。自分の感情や行為が妥当なものであるか否かは、……かつては社会的な基準に照らして決まる度合がそれなりに高かった。しかし、いまや自分の生理的な感覚や内発的な衝動に照らして決まる度合のほうがはるかに高まっている。

(P.117-118)

「マゴコロ主義」の根底には「感情・価値混同型行動指針」がある。「感情・価値混同型行動指針」は、文化の影響を受けていない人間の自然な行動指針である。思想、宗教などが提示する価値観というものは、もとを正せば、人間の本能的感情（互恵性が守られなかった時に生じる怒りなど）や、他人の心の状態を推測して共感する能力（殴られたら痛いだろうなと感じるなど）（「第8回 能力の個人差 7.知能検査で測られる「知能」の正体 (1)認知的流動性」参照）に由来するものであり（坂井克之著『心の脳科学』P.168-177参照）、「感情・価値混同型行動指針」との違いは、他人の感情との折り合いを付けることを優先するか、自分の感情を貫き通すことを優先するかの違いに過ぎない。宗教、思想などが提示する価値観は、他人の感情との折り合いを付け、異なった感情を持つ人間同士が共存していくために、「記号的権威への依存」によって感情を押し殺すという、人類が経験から生み出した知恵の一つと言える。もう一つの知恵が、日本人が好む「多数派への同調」によって感情を押し殺すという方法である。

「記号的権威への依存」や「多数派への同調」は、人間の自然な感情の発露を抑圧し、個性を否定するものである。「記号的権威への依存」や「多数派への同調」を抑圧的なものと感じさせないためには、超越的・絶対的な権威である「唯一の神」や「民主主義」を信仰させたり、「個性否定型人間観」を信じさせたりする必要がある。キリスト教、イスラム教などを信仰する人々は前者の道を取り、日本人は後者の道をとることによって、人々の不満を抑えた。

欧米では、宗教、思想などに定めがないことに関しては、心の赴くままに生きることを許すという方法で、個性を相当程度、尊重している。宗教、思想などに支配されていない領域では、「真心」にしたがって行動することが許されているのである。

日本の「ムラシステム」では、「しきたり」を定めることができる領域を制限することによって「多数派への同調」に制約をかけ、「真心」にしたがって行動することができる領域を確保していた。ところが、日本で「イエシステム」の力が強くなってくると、「しきたり」が個人の自由な領域を守っていた働きが失われ、ほぼ無制限に「多数派への同調」が要求されるようになり、「真心」にしたがって行動することがほとんどできなくなって、個性が抑圧されるようになった。ただし、宴会などでは、酔っぱらいの戯れ言という体裁を取ることによって、本音、つまり、「真心」を吐露することが許されている。宴会は、「イエシステム」において心情的一体感を醸成するための手段であると同時に、不満のガス抜きのある場でもある。

(4) 努力主義

「第8回 能力の個人差 2.能力平等観と努力主義」で述べたように、日本人が、「能力平等観」と「努力主義」を抱くのは、能力の個人差を目立たせないようにして、集団の

構成員は平等であるという理念を維持するためであると思われるが、稲作農耕の歴史が、この理念を裏付け、強化してきたのではないだろうか。中谷彪氏は『教育風土学』(P.22-23)で、次のように指摘している。

日本の農民は、熱帯性の稲を最適地ではない温帯に定着させようと、限られた狭い土地からできるだけ多くの収穫をあげようと、努力を重ねてきた。狭い土地で多数の人間が暮らしていくためには、大量の食物を収穫することが至上目標であったからである。……その結果、日本の……米の生産量は、土地当たり世界最高の水準にまで到達した。このように……世界最高の米づくりが達成されたのは、日本が稲栽培に最適地ではなかったけれども……全くの不適地でもなく、努力さえすればできるという条件のところだったからである。……狭い土地からできるだけ大量の米を収穫するという至上目標の実現は、その手段(努力)をも善と考える結果を招来する。……農民の永年の生活体験の中で肯定された努力という生活態度と生活思想が、日本社会の隅々まで浸透していき、日本の社会文化を特色づけてきたのである。

努力して働けば狭い土地から大量の米を収穫できると言っても、どうしてもなく鈍臭い人もいる。鈍臭い人の収穫量が少なくても、その人の責任だから仕方がないと済ませることができるが、結(田植え、稲刈りなどの時に助け合うこと)、畦作り、灌漑などの村落の共同作業で足を引っ張られると、他の人が迷惑を被る。鈍臭い人を長時間働かせるという方法もあるが、下手なことをされるよりは、何もしてもらわない方がありがたいということもある。このような時に、仕事の「成果」で「互惠性」を測ると、「互惠性」を満たしていないことになってしまい、農作業の能力の高い人の地位が高くなり、農作業の能力の低い人の地位が低くなって、村落の構成員の平等が崩れてしまう。そこで、仕事をしているという「努力」、さらには、「努力をしているふり」で「互惠性」を測り(仕事の質を問題にせずに、同一時間働いたというようなこと)、「互惠性」を満たしているとするということが行われる。努力しているという過程を見て、同程度の寄与をしていると判断することにすれば、不公平だという不満を抑え、村落の和と平等性を保つことができるというわけである。

「中央公論」編集部編『論争・中流崩壊』(P.72)によると、「1995年のSSM調査では、所得の分配について次のような質問を行っている。<どのような人が高い地位や経済的豊かさを得るのがよいですか> それに対して、「実績をあげた人」「努力した人」「必要としている人が必要なだけ」「誰でも同じくらい」の4項目に分けて質問したところ、「努力した人ほど多く得るのが望ましい」と答えた人たちが全体の57.1%でトップ、次が「実績をあげた人ほど望ましい」の22.9%だった。<日本社会の現実はどうなっていると思いますか>という質問には、「実績をあげた人ほど多く得ている」と答えた人が52.6%、「努力した人ほど」が18.8%。現実に対する認識では「努力」と「実績」が逆転している」との

ことである。努力した人が高い地位や経済的豊かさを得るべきなのに、日本の現状はそうになっていないので、けしからんということである。日本人にとっては、「実績」は「贈与」でなく、「努力」こそが「贈与」なのである。「努力した人ほど多く得るのが望ましい」というのが「互恵性」を満たすことであり、「実績をあげた人ほど多く得ている」というのは「互恵性」に反していると考えるのである。

日本人には過程重視の「互恵性」を好む傾向があり、欧米人には結果重視の「互恵性」を好む傾向があるようである。自分たちを滅ぼそうとする強力な外敵のいない閉鎖的な社会では、仲間内で助け合い和を保つために過程（努力）を重視するが、自分たちを滅ぼそうとする強力な外敵に脅かされている開放的な社会では結果（実績）を出せないと敵に滅ぼされてしまうということであろう。強力な外敵のいない閉鎖的な社会は能力の低い人にも「がんばれば何とかなる」という希望を持たせることで和を保ち、強力な外敵に脅かされている開放的な社会は生き残りのために能力の低い人を切り捨てるのである。切り捨てられた人々は宗教に救いを求める（「第12回暗黒の情報社会と教育 12.暗黒の文化革命、復古革命、宗教戦争」参照）。

過程重視の「互恵性」は、形式重視の「互恵性」に墮する危険性と隣り合わせである。「努力主義」が形骸化して、努力しているふりをするだけの人が多くなり、集団・組織の生産力が低下してしまうのである。「マコト主義」が、過程重視の「互恵性」が、形式重視の「互恵性」に墮する危険を防いでいる。「誠」を尽くして本物の努力をしなければ、「神に恥じなければならぬ」、「誠意ある態度」が認められなければ、いっさいが不利に、そしてしばしば悪意をもって扱われてしまうのである。しかし、「マコト主義」から宗教性が失われると、「マコト主義」も形骸化して、「誠」を尽くすふりをするだけの人が横行し、集団・組織の生産性が低下してしまう。

(5) マコト主義と努力主義の弊害

「マコト主義」と「努力主義」にはデメリットとメリットがある。

デメリットの一つ目は、形骸化した「マコト主義」と「努力主義」の下で、「誠」を尽くして、努力しているという姿勢を評価することによって、無駄な努力を重ねる無能な人間を高く評価し、有能なため努力しなくてもできる人間を不誠実な人間として排斥することである。例えば、無能なために時間内に仕事が終わらず長時間の残業をする者が「誠実」「働き者」「かわいい奴」で、有能なために時間内に仕事を終えて残業しない者は「不誠実」「怠け者」「かわいくない奴」と評価されるというようなことが起こる。

この弊害は学校教育にも現れている。小・中学校においては、観点別学習状況の評価が行われている（一部の高校でも行われている）。観点別学習状況の評価とは、各教科の成績を「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」などの観点から絶対評価するものである。戸田忠雄氏は福井秀夫・戸田忠雄・浅見泰司編著『教育の失敗』「第2章 教育官僚制からの脱却を！」(P.74-76)で次のように指摘している。

近年、内申書の成績分布が相対評価ではなく絶対評価に変わった……学習の到達度による絶対評価とは聞こえが良いが、ようするに教師の恣意的な裁量幅が拡大することを意味する。……教科学力のパフォーマンスだけでなく、態度・意欲・関心など、学習に向かう心的姿勢まで評価の対象となる。一生懸命努力しているが、報われない者を救済するために、テスト結果だけでなく心的姿勢を評価するというのであろう。その趣旨の裏側には次のような陰の問題が生じてくる。かりにテストの成績が良くても、教師から見て「努力しているように見えない」「言うことが生意気で気に入らない」「恭順の意を表さない」、このような生徒たち……は、悪い評定をつけられる可能性を秘めていることを意味する。つまり、テストによる結果より勉強の過程を重視すると、教師の恣意により評定されることがしばしば起こりうる。勉強（努力）している様子を……他者に見せたくないという屈折した思春期心理は、この年頃に共通するものであるが、独立自尊の気風を持つ子どもほど、このような心理状態になりがちだ。自分自身の努力過程を見せないのは、他者へのパフォーマンスましてや強者（教師・親など）への迎合と見られることに内心忸怩たる思いを持つからだ。……

その思想の背後には学校は勉強して学力をつけるだけの所ではなく、学力以外の人間性を涵養する場であり人間形成の場である。……より少ない勉強で、より大きな結果を出す生徒より、一生懸命勉強する努力家を評価する傾向がある。また、スポーツも勝つことよりも努力の過程を評価する。「受験のため」「テストのため」に最も効果的な勉強をすることや勝利への合理的な練習よりも、しばしば「精神を集中して頑張れば勝てる」というような精神論がもてはやされ目的合理主義的な態度を忌み嫌う風潮は、ここから生じてくるのではないかと推測される。……学ぶことの根底には、自ら考え問題意識を持つことが必要である……しかし、教室のセンセイ君主の下では、懐疑よりも服従の精神を身につけ、羊のように大人しく不合理なことにも異を唱えなくなる。

また、太田肇氏は『選別主義を超えて』（P.51-53）で次のように指摘している。

評価要素のなかで、人物や人間性とならんで問題が多いのは、努力、あるいはその背後にある意欲や「やる気」である。小中学校では絶対評価が導入されたいっぽうで、そのなかにテストの点数だけでなく「関心・意欲・態度」という要素が盛り込まれるようになった。……たしかに努力や意欲は個人にとって重要な要素に違はなく、学校で……能力向上のための資料として評価することに意味がないとはいえない。問題は、それが進学のための内申書……といった形で、個人の利害に関わる判定に用いられるところにある。……

努力が評価されるのは、それが最終的に成果につながると考えられるからであり、

努力そのものに客観的な価値があるわけではない。すなわち、努力や意欲は教育的な目的からは評価すべきであっても、個人の利害につながる選別を目的として評価すべきではないのである。それが混同されると、公平さが損なわれるばかりか、ほかにもさまざまな弊害が生じる。とくに問題なのは、評価者の目を意識したファサード（みせかけ）と呼ばれる行動を招くことである。たとえば、学校では内申書を意識して生徒会長に立候補するとか、形だけ運動部に籍をおくようなケースがある。

意欲・関心は心の中にあり、外から見えるものではない。結局、外から見える態度で評価するしか方法がないが、そのことが、子どもたちに意欲・関心があるふりをさせることを強要し、「懐疑よりも服従の精神」を身につけさせ、独創性を圧殺する。独創性のある子どもは反骨精神を持つがゆえに「努力しているように見えない」ようにし、「独立自尊の気風」、懐疑的・批判的精神を持つがゆえに「言うことが生意気で」「恭順の意を表さない」。学校ではまじめに勉強をしているふりをし、職場ではまじめに仕事をしているふりをする。そんな人間ばかり育成しては、日本は没落に向かう。資本主義経済は、結果だけが問われる世界である。結果を伴わない努力、ましてや努力しているふりには何の経済的価値もない。

結果を伴う努力は、結果を評価することで評価できる。意味のある「関心・意欲・態度」は、「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」の中に現れる。「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」の中に現れない「関心・意欲・態度」には何の価値もない。したがって、内申書には、「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」の成績だけを記載すれば良く、「関心・意欲・態度」を記載する必要などない。「関心・意欲・態度」は学校の内部資料としてだけ使えば良い。

デメリットの二つ目は、過剰な努力を強いることである。「利益を他人に提供するにしても、それを非互酬的に、つまり返礼を期待せず、また反復的に提供すると信じられるに足る形をとる」、つまり、「贈与」を大きく見せる必要があるから、サービス残業が横行する。自分が「誠実」であることを示すために、忙しいふりをしたり、無駄に仕事を作り出したりする。付き合い残業は、職場の「空気」に誠実であることを示すための儀式である。儀式に参加しない者は、「誠」の心を持たない「人でなし」として、村八分にされる。

デメリットの三つ目は、ともかく「誠」を尽くして「努力」しさえすれば良いのであるから、どのような方法で努力すれば良い結果がでるのか、効率的なのかという方法論の検討がおろそかになることである。「誠の姿勢には本来、状況に対する根源的な批判的な姿勢は内包されていない」（相良亨著『日本人の心』P.97）。

その結果、精神論、根性論が横行して、「死に物狂いでがんばれ」と無駄な努力を重ねることになる。中谷彪氏は『教育風土学』（P.39）で、次のように指摘している。

「ガンバレ」教育論は生産性や能率を考えない努力主義に陥り易い……日本の集約農法では、農民は労働の生産性を犠牲にして、土地の生産性を向上することをひたすら心掛けてきた。……効率や合理性の追求が疎かにされ、ひたすら努力することが善と考えられてきたのである。したがって、「ガンバレ」論は、長時間の学習こそがより一層の成長と発達を達成するものと考え、学習の効果や能率を考慮に入れないという問題がある。

経済の世界では、コスト度外視の過剰・迷惑セールス、過剰・迷惑サービス、過剰品質になり、労働生産性が低下して、競争力（特に国際競争力）を失ってしまい、過労で倒れる者が続出する。競争力を失った原因を分析し、改善することなく、競争力を失ったのは「誠」と努力が足りなかったからだ、更に「誠」を尽くして努力すれば、いつか救われると誤解し、過剰・迷惑セールス、過剰・迷惑サービス、過剰品質を強化して、ますます競争力を失う。「個性否定型人間観」に囚われ、他人は自分と同じように考え、感じ、行動すると誤解して、独りよがりの「誠」を押し売りしているのである。「他者に対する心情が純粹であればよいのであって、他者とはそもそも何かという客観的な問いは、日本的な「誠実」からは出てこない」（相良亨著『日本人の心』P.102）のである。自分が「贈与」だと考えるものは相手も「贈与」だと考えるはずだと「甘え」て、自分と相手とは価値観が違うのだということに気づかず、相手の価値観を理解しようとしないのである。

政治の世界では、政治家が、自分が「誠」の塊であることを示して選挙で当選するために、政策そっちのけで、名前を連呼し、握手し続け、頭を下げ続け、最後には涙し、土下座までする。選挙民が、政策について知的判断ができるかどうかを基準にして投票しているのではなく、自分たちに「誠」を尽くしてくれそうな（要するに、利益誘導してくれそうな）人間であるかどうかを基準にして投票しているから、そうなるのである。この結果、利益誘導型の政治が横行する。

「マコト主義」と「努力主義」のメリットは、人々のやる気を引き出し、勤勉にさせることであるが、そのメリットを発揮できたのは、高度成長期までである。高度成長期には欧米というお手本があり、そのまねをしていけば、つまり、「情報の複製」をしていけば、成長できた。周りに同調し、「誠」を尽くして正確に「情報の複製」（丁寧な作りで、故障の少ない製品を製造する）をしていけば、周りに同調せず、自分勝手に不正確な「情報の複製」（雑な作りで、故障の多い製品を製造する）しかできない国に勝てたのである。マニュアル化されていない単純で定型の仕事が多く、努力が成果に直結することが多かった。太田肇氏が『選別主義を超えて』（P.52）で指摘するように、「単純で定型の仕事では努力が成果に直結するのに対し、複雑で非定型の仕事では努力と成果との関連が弱くなる。とくに知的な活動になるほど能力の占める比重が大きくなる」のである。つまり、高度成長期は、能力よりも努力が重要な時代であった。政策そっちの

けでも、欧米のまねをしていれば、政治も何とかあった。

しかし、欧米に追いつき、高度成長期が終わるとそうはいかなくなった。まねをしているだけでは、欧米に勝つことはできない。欧米にはない新たな情報を創造しなければならない。マニュアル化によって誰でも正確な「情報の複製」ができるようになり、グローバル化によって「情報の複製過程」を低賃金の国に移転できるようになった。「情報の創造」は閃きであり、努力してできるものではない。「情報の創造」には、それまで無関係と思われていた知識同士を結びつけてみたり、既存の知識の結び付き方を変えてみたり、ある知識体系のパターンを別の知識体系に類推して適用してみたりすることが必要であり、そのためには、才能と幅広い知識・経験が必要である。狭い「ムラ・イエ混合組織」の中で仕事をし、仕事仲間・関係者としか付き合わず、仕事関係の知識しかない人間が、「誠」を尽くして努力しても、「情報の創造」はできない。「ムラ・イエ混合組織」の外の世界を渡り歩き、外の世界の人間と付き合い、仕事以外の幅広い知識を持っていて、しかも才能のある人間、つまり、「ムラ・イエ混合組織」では傍流とされ、下手をすると村八分にされかねない人間が、周りからは遊び半分で仕事をしているように見える、つまり、「誠」を尽くしていないように見える仕方仕事をししないと、「情報の創造」はできない。

無駄な努力を続けるだけで、新たな情報も創造できないようでは、「暗黒の情報社会」（「第12回 暗黒の情報社会と教育」参照）を生き残ることはできない。しかし、高度成長期に「マコト主義」で成功した経験のある人々、その人々によって「マコト主義」信仰を認められ引き立てられた人々には、そのことが分からず、「マコト主義」信仰を強化すれば、情報の創造ができて、情報社会化とグローバル化に対応できると誤解し、近頃の若者はだらだら生きている、「マコト主義」信仰が足らん、根性がない、だから日本はダメになったのだと文句を言っている。日本をダメにしたのは、だらだら生きている若者ではなく、「ムラ・イエ混合組織」の中に閉じこもり、協調性（実際には、組織の中だけの同調性であり、組織の外とは協調性がない）が最も重要だと信じ、根性論を振りかざして、無駄な努力を強要し、労働生産性を低下させている「マコト主義」信仰者である。

「マコト主義」信仰者は「多数派（を装うもの）への同調」をする者であるから、自分が属する場が変われば、簡単に信念を変える。このことは、デメリットにもメリットにもなりうる。相良亨氏は『日本人の心』（P.101-102）で次のように指摘している。

アメリカの文化人類学者ベネディクトが『菊と刀』に、日本人捕虜の誠実なるものをあげている。それは西洋人には驚くべきことであるという。捕虜になった日本人はまず殺せという。国際法上、殺せないというと、やがて、その捕虜が、日本への爆撃機に乗って、爆撃の急所を教えることになったという。これが事実であるか否かは別として、日本人の誠実は、拡大すれば、外国人にはこのようにうけとられる構造をも

つものであることは確かであろう。それは日本人の誠実が、理に対する誠実ではなく、状況に対する誠実であるからである。前におかれた人、前におかれた事、現におかれている状況への誠実であるからである。状況が変われば、具体的な生き方は一変する可能性があるのである。この意味で誠実には方向性がない。誠実に方向性がないのは、ただひたすら自己の心情の無私性・純粋性を追求するところにある。人間や世界の本質を客観的に追究し、それに則って生きる姿勢が基本的に欠落していることによる。

(6) マコト主義とマゴコロ主義の相克

阿部好策氏は、柴田義松編『新・教育原理』第4章「なぜ学習指導の転換が必要か」(P.79)で、次のように指摘している。

教育的関係論には……検討事項がある。それはドラマや「まなざし」で強調される、教師と子どもの情熱的な呼応関係である。指導技術も大切だが、これまでの教育はそれ以上に、教師の使命感、愛、真心が子どもの信頼感や向上意欲を呼び出すと考える「愛と信頼の関係」を基調とした。このため、多くの教師が「熱心がんばれば、いつか子どもはわかってくれる」と教育的情熱を燃やしてきた。しかし、子どもはいま、体罰教師はもとより、わかる授業に熱心でもシツコイ教師やツカレル教師にはソッポを向く。自作プリントで良い授業をしようとしても「プリントが2枚足りない！」というだけで授業崩壊が起きたケースさえある。

「愛と信頼の関係」は一種の「マコト主義」である。教師が「使命感、愛、真心」という「誠」を尽くせば、子どもたちが「信頼感や向上意欲」という「誠」を返してくれると信じていたのである。しかし、子どもたちは、「マコト主義」から、自分の感情に素直に生きるという「マゴコロ主義」へと、その信仰を変えつつあり、「誠」を押し売りしてくる「シツコイ教師やツカレル教師」に「ソッポを向」き始めている。「マゴコロ主義」に従えば、自分に不快感を与えてくる「シツコイ教師やツカレル教師」を相手にする必要はないのである。

「熱心がんばれば、いつか子どもはわかってくれる」という信念は、「能力平等観」と「努力主義」が生み出したものである。子どもたちの先天的な学習能力には差がないのだから、教師が熱心な授業という努力をすれば、子どもたちが熱心に学ぶという努力を返してくれ、授業が分かるようになると、考えるのである。しかし、「第8回 能力の個人差」で述べたように、人間の学習能力には、遺伝と環境の影響による個人差があり、みんなが分かるような授業をすることは不可能である。習熟度別指導をすれば、授業が分かるようになる子どもの数が増えるが、それでも、授業が分からない子どもをなくすことはできない。

子どもたちが「マコト主義」を信仰し続けているとどうなるかという、授業を分か

らない子どもが「学ぶふり」をするだけである。広田照幸氏は『教育には何ができないか』(P.243)で、次のように指摘している。

昔もクラスに何人かは「お客さん」のような存在がいたが、彼らは授業中じっとしていた。学んでなくても学ぶふりをしていただけである。「昔は学級崩壊のような現象がなかった」という議論はあやしいと思われるが、もし、今のほうが立ち歩きとかおしゃべりが多くなっているとしたら、「学ぶふりをさせる」ためのイデオロギーや権力が弱くなってきているためなのではないだろうか。「学びからの逃走」ではなく、「学ぶふりからの逃走」である。

「「学ぶふりをさせる」ためのイデオロギー」は、形骸化した「マコト主義」である。教師の授業という「誠」に、「学ぶふり」という形だけの「誠」を返しているのである。

人間の学習能力には個人差がある以上、一生懸命に授業を聴いて、勉強しても、分からないものは分からない。実生活と学校教育の内容に乖離が生じている以上、勉強したことには役に立つものもあれば、役に立たないものもある。これが現実である。どうしても分からないものや、役に立たないものを勉強するのは時間の無駄であると考え、「学ぶふりから逃走」するのは合理的行動である。「第1回 はじめに 2.教育界のムラ社会性」で述べたように、内田樹氏は『下流志向』で、教育をサービスとしてとらえ、経済的な等価交換の原理を身につけてしまったことが、子どもたちの「学びからの逃走」の原因であるという趣旨の主張をしているが、これは、子どもたちが「マコト主義」と「努力主義」（過程重視の「互恵性」）を脱し、経済的な等価交換の原理という合理的精神（結果重視の「互恵性」）を身につけつつあるということである。ただし、学んだり、学ぶふりをしたりすることを苦痛と感じるから、その苦痛から逃げるという「感情・価値混同型行動指針」と「マゴコロ主義」に基づいて、「学びからの逃走」や「学ぶふりからの逃走」を行っている子どもの方が多いであろう。

従来は「マコト主義」と「努力主義」が教室に見せかけだけの秩序を与えていたために、どのような授業をすれば分かるようになるのかという方法論の検討や、何が役に立って、何が役に立たないのかという内容論の検討がおろそかになっていた。子どもたちが「マコト主義」と「努力主義」が脱し始め、「学ぶふりから逃走」し、「授業崩壊」「学級崩壊」してくれたから、問題点が見えるようになり、解決策を考えるようになり、前へ進むことができるようになったのである。

「マコト主義」は生活指導（生徒指導）にも影響を与えている。浅野誠氏は、柴田義松編『新・教育原理』「第5章 生活指導を変える」(P.104-105)で、次のように指摘している。

人格感化的生活指導は、教師の人格的な子どもへのかかわりを重視するものと考え

られたので、管理主義に反発する多くの良心的な教師たちの心をもとらえた。その結果、立派な生活指導を行いうる教師は、立派な人格者でなければならないとする発想が定着していった。そしてそれが良心的に教育実践を展開すれば、いつかは子どもに通じるという考え方を生み出したのだが、実践が行き詰まると、逆に子ども不信を生み、かつ教師自身の自己不信を生み出しがちであった。……こうしたことの弊害は、人格の善し悪し、ガンバリの度合いにとらわれ、自己の実践を冷静に分析して、豊かな指導方針を想像していくことをなおざりにしてしまうことに表れる。

「人格感化的生活指導」は一種の「マコト主義」である。教師が「立派な人格」という「誠」を示せば、子どもたちが「立派な人格」という「誠」を返してくれると信じていたのである。しかし、現実には、人格的に感化されるというようなことはほとんどない。ジュディス・リッチ・ハリスは『子育ての大誤解 子どもの性格を決定するものは何か』で、子どもは仲間集団の行動を模倣することによって、他人の前でどう振る舞うべきかを学び、性格を形成するのであって、大人の行動を模倣することによって学習するのではないと指摘している（「第 8 回 能力の個人差 14. 集団社会化」参照）。ただし、教師は仲間集団に影響を与えることによって、間接的に子どもの性格形成に影響を与えることができる場合もある。

5. 「空気」の支配

(1) 事実・価値混同型行動指針による同調行動

「3. 神秘的 세계観 (2) 事実・価値混同型行動指針と個性否定型人間観」で述べたように、日本人は、過去からの物事の「なりゆき」は自然な流れであるという意味において、正しいことであり、現在の「いきおい」は自然な流れであるから、その流れに乗ることは正しいことであると考えため、世界の「なりゆき」や「いきおい」という単なる事実が絶対的な価値を持ち、人々を強く拘束する力を持つようになる（事実・価値混同型行動指針）。言い換えると、多数の人々がそうしてきたという事実や、今そうしているという事実が価値を持ち、人々を拘束する力、つまり「規範」と同様の力を持つようになる。

また、人間の個性を否定し、人間の「本分」は全ての人間に共通であると考えれば（個性否定型人間観）、人間の「本分」は多数派の行動に反映されているということになるので、多数派の行動に同調することが、「本分」を尽くしていることになる。

多数の人々がそうしてきたという事実は「しきたり」や「前例」であり、多数の人々が今そうしているという事実は「時勢」や「空気」である。「事実・価値混同型行動指針」と「個性否定型人間観」を持っている人間は、「しきたり」を尊重し、場の「空気」を読んで、同調行動を行う。

「しきたり」は、「昔からしてきたこと」であり、過去の行動事例を集めた「前例集」に過ぎず、「規範」ではない。ここでは、「規範」を「……すべきである」「……してはな

らない」というような価値観の表明の形式で記述された行動の基準という意味で使っている。「事実・価値混同型行動指針」を持っている人々は、過去からの「なりゆき」にしたがって生きるために、「しきたり」を参考にし、尊重しているだけである。そのため、現在の「いきおい」が過去からの「なりゆき」を上回り、人々が現在の「いきおい」にしたがうことの方が正しいと考えるようになると、「しきたり」は直ぐに無視されてしまう。

「しきたり」には、宗教的権威が定めた「規範」のような永続性はない。

明治維新以後、日本が急速に工業化できたのは、工業化が世界の「大勢」であるから、日本もその「いきおい」に乗るべきであるという「空気」が支配的になり、「しきたり」が簡単にならなくなってしまったからである。工業化の障害になる「規範」によって強固に支配されている社会では、「規範」の改変が困難であり、容易には工業化できない。「しきたり」という粘土製の檻」はみんなが動けば、自由に形が変わるが、「規範という鉄の檻」は、容易には形は変わらないのである。

「しきたり」に反することは、「規範」に反するという罪ではなく、過去からの「なりゆき」を知らないという恥である。「世間知らず」で、「世間様に顔向けできない」ということである。

「事実・価値混同型行動指針」と「個性否定型人間観」にしたがうと、多数派が、ある場面では人間は「おのずから」そうすると考えているとおりに行動しない者は、「すべてがおのずからになりゆくところの世界」(丸山眞男著「歴史意識の「古層」」P.338)の調和を乱す存在であり、「ケガレ」たもの、あるいは、人ではないもの(=人でなし)だということになってしまう。その結果、「世間」の多数派の行動様式に疑問を持つ人や、別の「世間」に属する人が、多数派が「おのずから」そうすると考えていることをしないと、差別やいじめの対象になってしまう。「ケガレ」たもの、「人でなし」だから、何をしても良いということになってしまうのである。また、差別やいじめの対象にされることを恐れて、必死になって、「世間体を気にし」、「場の空気を読んで」、多数派が「おのずから」そうすると考えていることをしようと、主体性と自由を失うのである。

「規範」に支配されている社会でも、別の「規範」を信じる者、例えば異教徒や「異常者」と見なされる者に対する差別やいじめはあるが、社会の有り様によって価値観が異なりうるということが理解でき、価値観を相対化できれば(もちろん、それは困難なことであるが)、克服できる可能性がある。しかし、「個性否定型人間観」に支配されている「世間」では、別の価値観もありうるのだということは、容易には理解されず、自分とは違う価値観を持つ者は「人でなし」であると思いついてしまい、差別やいじめが根強く残る。鴻上尚史氏は『「空気」と「世間」』(P.132-134)で次のような事例を紹介している。

この前、ニュースを見ていたら、神奈川県内の屋内禁煙条例に関して、公聴会で分煙派と禁煙派の討論が映されていました。分煙を主張する旅館の経営者が、「旅館の自分の部屋の中では、泊まり客は吸えるようにしてほしい」と壇上で語った瞬間、客席から、

女性の「人殺し！」という声が飛びました。……ここには、議論しようという姿勢はありません。相手を完全につぶす、という思いだけです。そして、最も怖いなあと思ったのは、「人殺し！」と会場から声が出て、他の参加者はなんの反応もしなかったことです。……そこには、何の相対化もありません。自分の感情に対しても、相手を説得しようとする理論に対してもです。……「空気」の支配は、議論を拒否するのです。

(2) しきたりの意外な役割

「ムラシステム」では、「しきたり」が作られる領域を制限することによって、「ムラ」の構成単位（イエなど）の行動の全てが「しきたり」に支配され、自由を失うことを防いでいる。「部落の住人の行動には二つの型がある。一つは伝統あるいは「集団反射」（集団起源の反射運動）に支えられたもの、もう一つは個人の損得に支えられたものである」（きだみのる著『につぼん部落』）ということである。「伝統あるいは「集団反射」（集団起源の反射運動）に支えられたもの」が「しきたり」に支配される領域で、「個人の損得に支えられたもの」が「しきたり」の支配が及ばない領域である。「しきたり」の支配が及ばない領域だから、「物の売り買いは売るときには天井値近くで売ろうとし、買うときには底値近くで買おうとし、これに成功すると相手を弱らせるので、気分の良いことであり、自慢のたねになる」（きだみのる著『につぼん部落』）というような個人主義的な行動をとることができるのである。おそらく、「ムラ」の存続にとって最低限必要な領域が「しきたり」の支配の及ぶ領域であり、余剰の部分が「しきたり」の支配が及ばない領域であろう。子どもが病気の時に卵をただであげるのは、それが「ムラ」の存続にとって最低限必要だからで、オムレツにして食べたいと言った時に、高値をふっかけるのは、それが「ムラ」の存続に無関係な余剰だからである。

山岸俊男氏は『日本の「安心」はなぜ、消えたのか』（P.77-98）等で実験結果に基づいて、日本人の多数は、自分は個人主義者なのだが、周りの人たちは集団主義者なので、個人主義的に行動したら周りの人たちに嫌われてしまうと思いこんで、集団主義的に行動しているだけであると指摘している。「しきたり」の支配が及ばない領域では、個人主義的に行動しても周りの人たちに嫌われてしまう心配がないので、隠していた本性があらわれてしまう。「部落の住人は、機会があれば、人目を盗めたら、遠慮なく、自分の取り分を増やそうとする性格が強く、互いに牽制しあい、戦い合い、他人の取り分を監視し合った」「お互いに他人をひんむき他人を凌ごうと油断なくやって来たんだ。他人の不仕合わせには赤飯を炊き、他人の仕合わせは呪いながらな」（きだみのる著『につぼん部落』 P.98）という個人主義というよりは利己主義が日本人の本性である。

ただし、日本人が昔から個人主義者であったかは疑問である。昔の日本人は集団主義者であったために、集団主義的な「しきたり」が生まれ、日本人が「個家主義者」、さらに個人主義者になった後も、その「しきたり」が残り、日本人を縛り続け、利己主義の暴走を防いでいる可能性がある。相良亨氏は『日本人の心』（P.41-71）で、武士には、「勝

負の構え」から、「独り立つ」「人は人たり、我は我たり」というような独立の精神が生まれたと指摘しているが、この武士の精神が個人主義の始まりではないかと思われる。

「ムラ」の住民は、「ムラ」の存続に無関係な領域については、深いつき合いを避けることによって、そこに「空気」が生まれ、その「空気」が「しきたり」化することを防ごうとし、また、「ムラ」の存続に必要なため「しきたり」に支配された領域では、儀礼的に行動するよう心掛けることによって、その場に「空気」が生まれることを防いでいるのではないかと思われる。つまり、「ムラシステム」は、「空気」の支配をできるだけ排除することによって、「ムラシステム」の構成単位の独立と自由をできるだけ確保しようとしているのである。中根千枝氏は『タテ社会の力学』(P.32-33)で次のように指摘している。

山奥の孤立した村など、ソトから見るとたいへんその凝集性が強いようであるが、その村人たちのあいだのつきあいをつぶさにみると、お互いに家族の延長のような人間関係をもっているのではない。……お互いに家庭の事情も性格もたいへんよく知ったあいだながらであるにもかかわらず、家の者とそうでない者とのあいだの行動様式には顕著な違いがみられるのである。……家のソトの人々に対しては、それが隣人であろうと、親類であろうと、飲み友だちであろうと、礼儀正しさと用心深さをともなっている。……「家」……の枠はかたく閉ざされているのである。

このようなよそよそしい「ムラ」のあり方は意外なものかもしれないが、それは、現在の「ムラ」では、「イエシステム」の影響を受けたことによって、深いつき合いをするようになり、「空気」の支配領域が拡大しているからである。

(3) イエシステムの抑圧性

「擬似イエシステム」では、家族的な一体感を求めて、同調行動が集団・組織の存続に無関係な領域まで拡大して、つまり、「空気」の支配領域が拡大して、その集団・組織の誰か(親分的な人が言い出す場合が多い)がラーメンを食べようと言い出したら、みんなでラーメンを食べ、ゴルフをしたいと言い出したら、みんなでゴルフをするというような事態が生じてしまい、公私混同が起こる。内藤朝雄氏は『いじめの社会理論』(P.266)で、次のように指摘している。

仕事や勉強をすること(公)と「なかよく」すること(私)を峻別する社会システムのなかで、はじめて個の人格権が保障される。「なかよく」しなければ仕事や勉強にならない社会では、生きていくために「へつらう」、つまり上位者や有力なグループに自分の生のスタイルを引き渡さざるをえない。

また、「擬似イエシステム」では、心情的な一体感を求めて、行動の同調だけではなく、

心の同調までもが要求されるようになってくる。「僕たちは同じように考えているし、同じ価値観を共有して、同じことで泣いたり笑ったりする、結びつきの強い全体だよ」という「フィーリング共有関係」（菅野仁著『友だち幻想』P.81）を求めるようになってくるのである。「フィーリング共有関係」は、愛情・友情関係を模したものであり、日本における愛情・友情関係は母子関係を模したものである。菅野仁氏は『友だち幻想』で、次のように指摘している。

価値観が百パーセント共有できるのだとしたら、それはもはや他者ではありません。自分そのものか、自分の＜分身＞か何かです。……「百パーセント自分を受け入れてくれる誰かがいるはずだ」という幻想は、恋愛関係において……抱きがちになる……女の子なら、それは「王子様願望」のような形で現れますよね。自分をすべて受け入れてくれて、どんなわがままでもニコニコ聞いてくれる王子様。……男の子だったら……優しい母親のような存在でしょうか。……やさしく何でも受け入れてくれて、自分のことを第一に配慮してくれる存在……「自分がこうしたい」と思うことは、いつも先回りして準備してくれる。（P.128-130）

「同じように考え……同じ価値観を共有して、同じことで泣いたり笑ったり」してくれる他人など存在するはずがない。遺伝子と家庭環境を同じくする一卵性双生児でも、そうはならない。「同じように考え……同じ価値観を共有して」いるという幻想（「個性否定型人間観」の一種である）を持たせる「空気」を二人で醸成して、その「空気」に浸ることによって、心情的一体感という喜びを感じているというのが、日本における愛情・友情関係の本質である。愛情・友情とは、お互いを束縛し、自由を奪い合っていることに喜びを感じる事なのである。この母子一体的な愛情・友情関係を集団・組織全体に拡大しようとしたのが「擬似イエシステム」である。気に入った人との間では、お互いを束縛し、自由を奪い合っていることに喜びを感じられるが、気に入らない人との間では、お互いを束縛し、自由を奪い合っていることは苦痛以外の何ものでもない。このような苦痛を感じている人に対して、「擬似イエシステム」は、「相手のいいところを見てこっちから仲良くする努力をすれば、きっと仲良くなれるよ」（菅野仁著『友だち幻想』P.71）という妄言を吹き込み、追い打ちをかける。この妄言にだまされた人は、「みんなとうまくやっていけるように自分の性格を変えなければ」と思い、自分の「こころを直そう」（内藤朝雄著『いじめの社会理論』P.134-135）と努力する。しかし、気に入らない人と仲良くできるように、自分の心を直すことは不可能に近い。好き嫌いは、本能的な感情や過去の経験に基づく部分が大きく、努力して変えられる部分は少ない。

その結果、「協調性のない自分ではだめだ」（内藤朝雄著『いじめの社会理論』P.136）と自分を責め続けて、心が壊れてしまうか、「仲良しごっこ」を演じ続けて、ストレスをため込んでしまい、そのストレスを発散するために、他人をいじめるか、してしまう。

苦しみから逃れるために、「擬似イエシステム」に支配された集団・組織から脱出しようとしても、日本の集団・組織の多くは「擬似イエシステム」に支配されているので、今いる集団・組織から脱出して別の集団・組織に移っても同じことが繰り返され、結局、全ての集団・組織から逃れるために、ひきこもるしかないという状況に追い込まれる場合もある。ひきこもりの究極が自殺である。

「拡大イエシステム」では、同調行動によって組織への忠誠心を示すという「マコト主義」に基づく競争の結果、過剰な同調が起これ、「空気」の支配領域が拡大する。

同調行動が集団・組織の存続に無関係な領域にまで拡大すると、比較的固定的な「しきたり」にしたがって行動するだけでは足りず、常にその場の「空気」を読んで行動することを要求されるようになる。「しきたりという粘土製の檻」が「空気という粘土製の繭」に変化して、個人の生活の全てを包み込もうとしている。わずかに、私生活の一部が残されているだけである。人々は、「空気という粘土製の繭」に包み込まれてしまっ、皆と一緒に動かない限り、身動きがとれないという状態に陥り、自由を失い、集団・組織の「空気」の奴隷に成り果てたのである。

「イエシステム」では、この奴隷的關係を「家族的で暖かい人間関係」という一見きれいな衣装で覆い隠している。このような「多数派への無制限な同調」は、「権威への全面的な依存」である「全体主義」に似た状況を作り出す。内藤朝雄氏は『いじめの社会理論』（P.20-21）で、次のように指摘している。

現代の日本社会では、多くの人々が（機能集団ではなく）共同体への人格的献身として学校や会社への参加を強いられ、人格的自由あるいはトータルな人間存在を収奪され、きわめて酷いしかたで隷属させられるといった事態が生じた。このような事態はあきらかに全体主義のコアにあてはまっている……国家全体主義は、全体主義の「全体」に国家を代入したものだ、戦後日本社会に行き渡った全体主義はこの「全体」に学校共同体と会社共同体を代入したものと考えることができる。……この全体主義の価値的基本テーゼは次のようになる。「個人は共同体の側から自己が何者であるかを知らされるような仕方で生かされ、共同体に献身する限りにおいて個人の生は生きるに値するものになる。当然、このような善い生き方は個人に強制すべきである。個人の自由と共同体の共通善が対立する場合は共同体の共通善を、個人の権利と共同体のきずなが対立する場合は共同体のきずなを優先すべきである。」……各人の人間存在が共同体を強いる集団や組織に全面的に埋め込まれざるをえない強制傾向が、ある制度・政策的環境条件のもとで構造的に社会に繁茂している場合に、その社会を中間集団全体主義社会という。

「全体主義」では、自分たちの自由を奪っている者がはっきりと目に見え、その者を打ち倒せば、自由を回復できる。しかし、「多数派への無制限な同調」では、はっきりとは目に見えない「空気」が自由を奪っているために、自分たちの自由を奪っているものが何

なのかが分かりにくい。しかも、「多数派への無制限な同調」は、「家族的で暖かい人間関係」という一見きれいな衣装で飾り立てられて、それが良いことであるかのように思い込まされている。自由を回復するためには、「家族的で暖かい人間関係」が自由を奪うものであることを理解し、「イエシステム」を打ち倒さなければならず、そのためには、「イエシステム」を支えている日本文化を変革し、「契約システム」や「記号的権威システム」という「他人行儀で冷たい人間関係」の中で生きる覚悟を決めなければならない。日本文化を変革せずに、特定の「ムラ・イエ混合組織」を破壊しても、「家族的で暖かい人間関係」を懐かしみ、その中で生きることを求める人々が、新たな「ムラ・イエ混合組織」を作り出し、自由を奪い始めるだけである。

(4) 規範・マニュアル嫌い

「イエシステム」に支配された集団・組織では、「規範」や儀礼を「他人行儀で冷たい人間関係」（水臭い関係）として嫌い、心情的一体感さえあれば、「規範」や儀礼など不要であると考えられる傾向がある。「集団の秩序は超越的な規範や理念に基づく戒律や規則によってではなく、和を求める人々の「誠」の力で「自然に」実現できると考える」（島菌進著『救いと徳』P.43）のである。しかし、「規範」や儀礼がない集団・組織では、行動の基準が移ろい易い「空気」に左右されるため、集団・組織の成員には、常に「空気」を読み続け、その場その場で行動を変えるという苦役が強いられる。また、集団・組織の「空気」の醸成に強い影響力を持っている人（集団・組織内の序列が高い人など）の横暴な振る舞いを「規範」によって抑えることができずに、甘受することを強いられ、パワーハラスメントやセクシャルハラスメントの横行を招いてしまう。

「規範」や儀礼には自由を奪う側面があるが、自由を守る側面もある。「規範」には、「規範」に定められていないことならば、何をしても自由であるということによって、言動の自由を守る機能がある。「記号的権威システム」によって「規範という鉄の檻」に閉じこめられていても、檻の中では自由に動き回れるのである。また、「規範」には、力の強い人が力の弱い人を支配することを防ぐことによって、力の弱い人の自由を守る機能もある。儀礼には、嫌なことをする時には、儀礼どおり機械的に最小限の行動をとることによって、心までは売り渡していないぞという姿勢を示すことができ、心の自由を守る機能がある。たとえ、最小限であろうと、儀礼にしたがってさえいけば、誰も文句を言えない。つまり、「他人行儀で冷たい人間関係」は、個人の自由を守るための関係なのである。

「ムラシステム」に支配された集団・組織では、「規範」を定めるためには、全員一致が必要であり（「2.イエとムラ (5)ムラシステム」参照）、無理に多数決で「規範」を定めようとする、集団・組織内に争いが起こってしまう。多数決で「規範」を定めるということは、集団・組織内の少数派が何の見返りもなしに多数派にしたがうことになるので、「互惠性」に反することになる。少数派は多数派にしたがうという「贈与」を強制されるのに、その「返礼」が何もないのである。少数派は多数派を「ケガレ」たものであるとみ

なし、「オンネン」を抱いて、集団・組織は分裂することになる。

欧米で多数決を用いても、集団・組織内に争いが起こることが少ないのは、多数決を正当化するイデオロギーの支配を受けているからである。「第12回 暗黒の情報社会と教育 8.権威への依存」で述べた「「理性を正しく導く方法」を身につけた人間の多数派の意見を採用する「民主主義」にしたがって「法」を定め、「神の言葉」に代わって「法」に人間をしたがわせる」という「法治主義」のイデオロギーである。多数決で定めた法にしたがうという契約をして社会を作ったのだというイデオロギー（社会契約論）と言った方が良いのかもしれない。

「ムラシステム」に支配された集団・組織では、集団・組織の平和を乱すおそれのある「規範」を定めることをできる限り避け、その場限りの決定で問題を処理しようとする。「ムラシステム」では、その場限りの決定であっても全員一致が必要なのだが、その場限りの決定なので、その場の「空気」にしたがって決めることに対する抵抗感が薄れる。「規範」であれば、持続的に拘束されてしまうが、その場限りの決定は、建前上は、その場限りの拘束力しかないからである。ところが、時が経つと、その場限りの決定であったはずのものが、前例、「しきたり」として尊重され、人々を事実上拘束する力を持つようになってしまう。

集団・組織内の「空気」は「おのずから」生まれてくるものではなく、優勢な「構成単位」（ムラにおける家、大企業における課、派閥など）が劣勢な「構成単位」に圧力をかけて、人工的に作り出すものである（「空気」の作り方にはついては後述する）。しかし、「空気」は「おのずから」生まれてくるのだという虚構を信じれば、優勢な「構成単位」は、劣勢な「構成単位」に圧力をかけたのだという負い目から免れることができ、劣勢な「構成単位」は、自分たちは「空気」にしたがっただけであり、優勢な「構成単位」に屈服したわけではないと、自分をごまかすことができる。「空気」は「おのずから」生まれてくるという虚構が、優勢な「構成単位」による劣勢な「構成単位」の支配という現実を覆い隠し、「ムラシステム」の構成単位の平等性という建前を維持しているのである。

「ムラシステム」に支配された集団・組織は、「しきたり」を抽象化・体系化・明文化して、規則にすることを嫌う。「しきたり」を抽象化・体系化・明文化すると、抽象化・体系化・明文化した「構成単位」が勝手に作った規則であると、他の「構成単位」に思われてしまい、その規則にしたがうことをいやがる。「おのずから」生まれたと思いついでいる「しきたり」だから、皆が尊重するのである。

なお、山本七平氏は『日本人と組織』（P.40-41）で、日本の会社の「社規・社則」は「空文」に等しいと指摘しているが、「空文」と分かっているにもかかわらず「社規・社則」を作るのは、会社という「ムラ・イエ混合組織」の外にあり、強い力を持った「政府ムラ」が作った「法」がそれを要求しており、また、「ムラ・イエ混合組織」の「しきたり」や「空気」を尊重しようとしないう「人でなし」が、「司法ムラ」に訴えた場合に備えてである。

日本の企業は、業務の「マニュアル化」に消極的だが、その理由は、「ムラシステム」

が規則の制定に消極的な理由と同様である。業務方法が明文化されていないと、「しきたり」の一種として、皆が尊重するが、抽象化・体系化・明文化されて「マニュアル」になると、抽象化・体系化・明文化した「構成単位」にしたがわされているという思いが生まれ、反発・反抗が生じる。そのため、「マニュアル化」は主として、企業という「ムラ」の正式メンバーではない非正規雇用者の業務を対象に行われることになる。

ただし、成功事例集的な「マニュアル」であれば、皆がそれを参考にして行動する可能性が高い。例えば、「ハンバーガーはこのように調理しなければならない」というような規範的な「マニュアル」では反発・反抗が生じるが、「ハンバーガーをこうして調理したらおいしくなりました」というような成功事例集的な「マニュアル」であれば皆が喜んで学習する。客観的に見れば、成功事例を模倣することによって、成功事例を作った者に服従していることになるのだが、主観的に見れば、主体的に学習しているという幻想を持つことができるのである。ただし、「情報の複製の容易化・高速化・正確化」（第12回 暗黒の情報社会と教育 参照）という観点から見れば、成功事例集的な「マニュアル」は規範的な「マニュアル」に劣る。

「しきたり」の明文化を嫌い、その場の「空気」にしたがうという性向は、「ムラ・イエ混合組織」の排他性につながる。部外者は「ムラ・イエ混合組織」の「しきたり」を知らず、「空気」が読めないのが、嫌われ、排除されるのである。そして、「ムラ・イエ混合組織」の「しきたり」を知り尽くし、「空気」を読み切るには、その「ムラ・イエ混合組織」内で長年働く（生活する）必要があることが、年功序列の一因となっている。「ムラ・イエ混合組織」を開放的なものにするためには、成功事例集的な「マニュアル」を作る必要がある。

「マニュアル化」を嫌う日本人の性向は、当然、「情報社会化」の障害となる。これが、近年の日本経済が振るわない一因である。日本は「暗黒の情報社会化」（第12回 暗黒の情報社会と教育 参照）に最後まで抵抗する国となるだろう。

(5) 「空気」の作り方

「ムラシステム」に支配された集団・組織が、今までになかった問題に直面して、対応策を決めなければならない時には、対応策を正当化する「空気」が、次のような方法（根回し）で作られることが多い。

まず、「世間」において、相手に利益を与えたり、相手から利益を奪ったりする力の強い「構成単位」、例えば、財力があつたり、格が高い「構成単位」が（原則として、その「世間」への加入が古い者が格の高い構成単位になる、つまり、年功序列）、自分たちに有利な対応策をとろうとし、自分の利益を守る力の弱い「構成単位」、例えば、財力がなかったり、格が低い「構成単位」に無言の圧力をかける。力の弱い「構成単位」は、力の強い「構成単位」から利益を与えられることを期待したり、利益を奪われたりすることをおそれて、無言の圧力に屈することが多い。「長いものには巻かれよ」ということである。

力の弱い「構成単位」が無言の圧力に屈しない場合には、説得という形で、与えたり、奪ったりする利益の内容をほのめかし、黙らせる。

ある程度の力のある「構成単位」が反対に回った場合は厄介である。簡単には圧力に屈しないからである。自分たちに有利な対応策を何らかの方法で正当化する必要が出てくる。そのために、自分たちの集団・組織が置かれている状況を自分たちに有利なように解釈して、自分たちに有利な対応策をとるように勧めてくれる前例、「世界の大勢」、集団・組織の外の権威、などを利用して、「もっともらしい理屈」を立てようとする。例えば、こういう前例があって、その時はうまくいったのだから、今回もこうすべきだとか、欧米では、こうやって成功している、それが「世界の大勢」だから、したがうべきだとか、欧米の権威ある理論によれば、こうなるから、こうすべきだとか。

それに対して、この決定が自分たちに不利なものであると考える「構成単位」は、前例と今回とでは状況が違うとか、欧米の場合とは状況が違うとか、別の理論ではこうなるとか、それは違法行為だとかいって「水を差す」。

「水を差される」と、純粋な「ムラシステム」では、利益を与える約束（譲歩の見返りに利益を与えるという「互惠性」の約束）をしたり、利益を奪う脅しをかけたりして、黙らせようとする。「ムラ・イエ混合組織」では、そんな「水臭い」ことは言わずに、みんな「同じ釜の飯を食う仲間」じゃないかとか言って、飲み連れて行き、心情的一体感を強調し、仲間はずれにすることをほのめかして、黙らせようとする。反対派を分断し、孤立させる方法もよく使われる。それでも、反対派が黙らない場合は、何回か会合を開いて、反対派に言いたいことを言わせて（いわゆる「ガス抜き」）、反対派に賛同する者が少ないこと、つまり、反対派の意見は「空気を読んでいない」ものであり、このまま反対を続けると仲間はずれにされるということを思い知らせて、反対派を引き下がらせる。ただし、強引な方法をとると、特に利益を奪うと脅すと、反対派が根に持ち、やがては集団・組織の分裂を招くので、できる限り、避けた方が良い。利益誘導が無難なので乱発される。

このようにして、「空気」の支配による「全員一致」が実現する。反対派が仲間はずれになることをおそれて、最後には、「空気」にしたがうのは、集団・組織から出て行くと生きていけないと考えるからである。

そして、反対派は自分たちが、力の強い「構成単位」に敗北したのだという事実を認めたくないために、自分たちは自然に生まれてきた「空気」にしたがっただけだと思ひこむことで、自分をごまかそうとする。力の強い「構成単位」に屈服したという屈辱感を和らげるためには、力の強い「構成単位」に有利な対応策が自分たちにとっても良いものであると、無理にでも思い込む必要がある（精神分析の理論で説明すると、防衛機制として合理化をするということ）。また、力の強い「構成単位」は、力の弱い「構成単位」に圧力をかけたのだという負い目から免れるために、自分たちに有利な対応策は力の弱い「構成単位」にとっても良いものであると、無理にでも思い込む必要がある。この思いこみのために、「もっともらしい理屈」が利用される。

「もっともらしい理屈」は、そう思いたいと願っている人間に、そう思い込ませるための理屈に過ぎないから、もっともらしい夢を語る理想論が望ましい。「浮遊する多様な世論を集約する方法は、＜美しい言葉＞で括ることである。誰もが反対しにくい言葉は、何よりも美しくなければならない」（矢野眞和著『教育社会の設計』P.7）のである（「第1回 はじめに 4.机上の空論とタブーの排除」参照）。問題の実態を分析して示すと、力の強い「構成単位」に有利で、力の弱い「構成単位」に不利な案であるという事実が暴露されたり、理想論に過ぎないという事実が露呈してしまったりするおそれがあるので、実態の把握は避けた方が良くということになる。その結果、「××のこれからのあるべき姿」とか、「望ましい××像」などというテーマが出され、ジャーナリズムにおける議論、さまざまなシンポジウム、政府への答申にいたるまで、多くの人々のエネルギーと時間がさかれるのだが、その結果は、山のように積まれた印刷物・書類が残り、一方、実態は旧態依然といったことが、くり返しくり返し行なわれる」（中根千枝著『タテ社会の力学』P.143）ということになる。「旧態依然」という「既得権益の維持」が、力の強い「構成単位」に有利になる場合が多いからである。

このように、「空気」を人工的に作り出すには大変な労力、時間、利益供与等が必要である。根回しが、「ムラシステム」の影響下にある日本企業の生産性を低下させているのである。また、「空気」を無理に作ろうとすると、集団・組織の分裂を招く危険性もある。その結果、昔からある「しきたり」にしたがって、同じことを繰り返す方が無難だ（前例主義）ということになってくる。新しい問題に直面しても、昔からある問題と同じ問題であると無理矢理に解釈して、現実を直視することを避け、見当外れな対応を繰り返して、失敗を続けるようになってくる。「ムラシステム」に支配された集団・組織は、硬直化し、環境の変化に対処できなくなって、自滅する傾向がある。ただし、明治維新の時のように、環境の変化にうまく対処できるシステムが自分たちの集団・組織の外の権威にあることが運良く分かって、それが流行して、一気に「空気」が変わり、救われることもある。「3. 神秘的な世界観 (2) 事実・価値混同型行動指針と個性否定型人間観」で述べたように、長い停滞と突然の変革が日本の特徴である。

力の強い「構成単位」は、「空気」を作り出す力を発揮するためには、仲間を集め、強力な派閥などのグループを作る必要があるが、そのためには、仲間に譲歩せざるを得ず、自分の利益だけを追求することはできない。そして、自分たちのグループが力を発揮するためには、仲間になるグループを集める必要があり、そのためには他のグループに譲歩せざるを得ず、自分たちのグループの利益だけを追求することができない。このような譲歩の結果生まれた「空気」には、力の強い「構成単位」もしたがわなければならない。

つまり、「ムラシステム」に支配された集団・組織においては、直接的に他人をしたがわせる権力を発揮することは困難であるが、自分たちに都合の良い「空気」を作り出すことができれば、それによって間接的に他人をしたがわせることができるのであるが、自分に都合の良い「空気」を作り出そうとすると、多数派を作り出すための譲歩の結果、思い

通りの「空気」にはならず、自分もその「空気」に支配されてしまうということである。ただし、力の強い「構成単位」は、自分がしたがう「空気」の形成に大きな力を発揮し、相当程度「空気」を自分に有利なものにできたという点において、「空気」の形成にあまり力を発揮できない力の弱い「構成単位」とは異なる。

ある「権威」を利用しようとして、「権威」が権威であることを宣伝すると、その「権威」に自分も縛られてしまい、その「権威」を否定できなくなってしまうということもある。本心から「権威」を信じているわけではないのに、「権威」を信じているふりをしなければならなくなってしまうのである。

自分が唱えた「もっともらしい理屈」にしばられてしまい、その「もっともらしい理屈」が不都合な状態になっていることが分かっているにもかかわらず、「もっともらしい理屈」を撤回できず、自滅したのが、第二次世界大戦における日本軍である。「神国日本」が「鬼畜米英」に負けるはずがないと言ってきたので、「最高戦争指導会議のおエラ方……は、みな内心では、だれかが「降伏しよう」と言い出してくれないかと、それだけを心待ちにしていた。いわば「陸軍が始めたのだから陸軍が言い出すべきだ、今日言うか、この次に言うか」と一方が梅津参謀総長に期待すれば、御当人は「軍人は最後までそれが口にできないのだから、だれかが言ってくれないとこまる。外務大臣は言わないのだろうか。今日言うか？ 明日言うか？」期待し合っていた」（山本七平著『「空気」の研究』P.104）ということになってしまった。

「権威」は、自分たちの集団・組織の外にあるものでなければならない。「ムラシステム」の「構成単位」の間には能力平等観が強く、「ムラシステム」内に「権威」を認めることに抵抗を感じるからである。外にいる存在だから、別格の能力を持つものと認められ、「権威」になるのである。そのため、外部「有識者」（有識者と称される者）を集めた審議会を作って検討させたり、外部の調査研究機関に調査研究を依頼したりして、自分たちに有利な案を正当化しようとする（昔は宗教家や儒学者を利用していた）。当然、自分たちに有利な案を正当化してくれる外部「有識者」だけを集め、そのような調査研究機関だけに依頼する。しかし、日本が一つの「世間」であると認識されるようになってくると、国内の「有識者」や調査研究機関では「権威」としては弱くなっていく。「世間」から遠い外国の学問や宗教の方が「権威」としての力が強いので、それらを利用するようになる（ただし、外国の学問や宗教でも利用価値がないとみなされるものは軽蔑の対象になる）。

昔からそうであるが、日本の学者、宗教家は、自分独自の理論によっては「権威」とは認められ難い（ただし、外国から権威と認められた場合は別である）。外国の理論の紹介者、解釈者、端的に言えば「聖なる教典」の解釈者という立場によって、外来の「権威」のおこぼれを頂戴するだけである。「虎の威を借る狐」である。その結果、日本では、訓話学（古典の字句の解釈、注釈をする学問）が栄え、自分が独創的であると主張する学問や宗教は排斥されることになる。ただし、外来の理論の解釈（独創的な解釈であっても、その独創性を強調してはならない）という体裁を整えれば、排斥されず、力の強い「構成単位」

の主張の正当化や、力の弱い「構成単位」の抵抗の正当化にとって都合が良ければ、利用され、借り物の権威を帯びることはある。外来の理論の日本化とでも言うべき手法である。「専門学者は浄土宗は仏教ではなく、浄土宗のような思想は仏教にはないという。……徳川時代に日本は儒教の影響を徹底的にうけたそうだが、しかし、科擧の制度は取り入れていない。いわば骨組みはどこかで骨抜きにされ、肉の部分は何となく溶解吸収され、結局は、儒教体制という形にならずに消えてしまったという経過をたどっている」(山本七平著『「空気」の研究』P.94)。これが日本的な独創性のあり方であろう。

(6) 観念上の世間の「空気」

「観念上の世間」(「2.イエとムラ (5)世間」参照)の「空気」の形成には、マスコミが大きな働きをしている。個人が直接目にすることができる範囲は限られており、「日本全体での多数派は何を考え、何をしているのか」ということは分からない。そこで、マスコミが提供する「日本全体での多数派はこう考え、こうしている」という虚構を日本全体の「空気」であると信じ、行動するのである。

マスコミは世の中のすべての情報を流すことはできない。そこには必ず取捨選択がある。取捨選択の過程では、マスコミが、話題性が高いと考えるものが選ばれ、話題性が低いと考えるものは捨てられる(メディアの議題設定機能)。また、話題性が高いと考えるものでも、そのものに関する事実のすべてを伝えることはできず、重要と考える事実だけが伝えられる。これらの取捨選択の過程にマスコミの価値観が反映される。その結果、マスコミに偏向報道をする意図はなくても、マスコミが伝える内容は偏ったものになってしまう。

世論調査の結果であれば虚構ではないとの指摘もあると思うが、世論調査などの社会調査には調査方法(質問項目、質問文、回答方法など)によって結果が左右される面がある。調査方法の設定にマスコミの価値観が反映される。

インターネットには、「観念上の世間」を細分化し、日本全体を包み込む「空気」の形成を阻害する機能がある。インターネットには膨大な量の情報が流れており、そのごく一部しか読むことができない。そのため、インターネット利用者は自分が関心を持つ分野の情報しか読んだり、書き込んだりしなくなり、インターネット空間は、細分化した「観念上の世間」に分かれる。そして、「ムラ」への参加は限定的なもので、「ムラ」内に心情的な一体感や運命共同体意識が生まれることはあまりないので、「イエシステム」が混入していない純粋な「ムラシステム」になる傾向がある。その結果、日本全体を騒がすような大事件がない限り、インターネット空間では、各「ムラ」ごとに異なる、しかも、限定的な領域での「空気」の支配しか生まれない。

(7) 他人指向型との関係

デイヴィッド・リースマンは『孤独な群衆』で、集団の中での同調性の様式には、伝統指向型、内部指向型、他人指向型の3つのタイプがあるとしている。伝統指向型の社

会では、

個人の同調性は、特定の年齢集団、氏族、カーストなどの固定した集団の一員としての同調性というかたちをとる。かれは、過去何世紀にもわたってせいぜいほんの少ししか修正をうけずにつづいてきた行動様式を理解し、それに満足することを学びとる。そこでは生活の中での重要な関係は……厳格なエチケットで統制されており、……子ども時代に、そのエチケットは教えこまれる。……さまざまな儀礼や、日常的慣習や、宗教をも用意している。……個人の活動が伝統に対する服従という方向に性格学的に決定されている (P.9)

内部指向型の社会では、

個人の方向づけの起動力になるものが“内的”だ……幼少期に年長者によってその機動力がうえつけられ、そのむけられる目標は、一般化された目標であり、かつ同時に、宿命的にのがれることのできない目標である……心理的ジャイロスコープ（羅針盤）……は……両親や権威によって個人の中に据えつけられ、その……個人を「針路上」にのせておく役割を果たす。(P.12-13)

他人指向型の社会では、

個人の方向づけを決定するのが同時代人である……この同時代人は、かれの直接の知りあいであることもあろうし、また友人やマス・メディアをつうじて間接的に知っている人物であってもかまわない。……他人指向型の人間がめざす目標は、同時代人のみちびくがままにかわる。……行動面での同調性がうまれる。……それは、他人の行動や願望にたいしてのおどろくべき感受性によって知らず知らずのうちに身につけてゆくのである。……他の人びと……の承認と指導をもとめるということは特徴的なことだ。(P.17-18)

他人指向型の社会は一見すると、「多数派への同調」を原理とし、「空気」に支配された日本社会と同じもののように見え、犬飼裕一氏が「にせユダヤ人が語る「日本」の物語」で主張しているように、「空気」の支配は、「日本人」だけではなくて、むしろ近代化を早くから達成した多くの社会に通有の現象である」という見解が正しいと思えてくるであろう。

しかし、私は、他人指向型の社会は、「記号的権威システム」や「人的権威システム」が支配している社会において、権威が流動化した結果が生まれたものであり、「多数派への同調」を原理とする日本社会とは異なると考える。社会の変化が激しくなり、昔から

の権威が存在しない新領域が増えてきた（例えば、旧来のイデオロギーでは答えのない問題が増えてきた）ために、人びとが依存すべき権威を「同時代人」から探し求めて右往左往し、その時々々の暫定的な権威であるオピニオンリーダーにしたがうようになったというのが、他人指向型の社会の実体である。この現象は、消費生活における流行やイノベーションの採用に典型的に見られる。

E・M・ロジャーズ (Everett M. Rogers) は『イノベーション普及学』で、イノベーションは、革新的採用者 (Innovators、冒険的な人々) → 初期少数採用者 (Early Adopters、尊敬される人々) → 前期多数採用者 (Early Majority、慎重な人々) → 後期多数採用者 (Late Majority、疑い深い人々) → 採用遅滞者 (Laggards、伝統的な人々) の順番に採用が進んでいくが、この過程において、オピニオンリーダーとしての初期少数採用者の態度が鍵になると指摘している。暫定的な権威であるオピニオンリーダーの行動への同調が、「同時代人」への「行動面での同調性」と見える現象を生みだしているのである。

6. 限定的共感システムと共感演技システム

(1) キャラ化

菅野仁氏は『友だち幻想』(P.55-57) で、次のように指摘している。

今私たちが目の当たりにしている同調圧力は、現代における新たな共同性への圧力（これをネオ共同性と呼んでみましょう）なのではないかと私は考えています。……かつてのムラ的な伝統的共同性の根拠は、生命維持の相互性でした。貧しい生産力を基盤とした昔の庶民の生活においては、お互い支えあって共同的なあり方をしていなければ生活が成り立たなかったのです。……同調圧力が強い半面、お互いに生活を支えあい助け合うという相互扶助の側面も大きかったのです。しかし現代におけるネオ共同性に根拠のあるのは、「不安」の相互性です。多くの情報や多様な社会的価値観の前で、お互い自分自身の思考、価値観を立てることはできず、不安が増大している。その結果、とにかく「群れる」ことでなんとかそうした不安から逃れよう、といった無意識的な行動が新たな同調圧力を生んでいるのではないかと考えられるのです。……リースマンの言う「伝統指向型」「他人指向型」は、……それぞれ「ムラ的共同性」「ネオ共同性」に対応する

私は、「多くの情報や多様な社会的価値観の前で、お互い自分自身の思考、価値観を立てることはできず、不安が増大している」のは、「記号的権威」や「人的権威」が流動化して、依存すべき権威がなかなか見つからないという不安であり、デイヴィッド・リースマンが『孤独な群衆』で指摘した「他人指向型」という欧米タイプの「ネオ共同性」が生じる原因であり、日本において「ネオ共同性」が生じる原因とは異なると考える。

日本において「ネオ共同性」が生じる原因は、「個性尊重型人間観」と「感情・価値混同型行動指針」を持ち、「マゴコロ主義」を信仰することにある。

土井隆義氏は『友だち地獄』(P.120-122)で、次のように指摘している。

言葉によって作り上げられた思想や信条が、時間をこえて安定的に持続しうるのに対して、自らの生理的な感覚や内発的な衝動は、いまのこの一瞬にしか成立しえず、まったく刹那的なものである。……直感に根拠づけられた純粋な自分は、一貫性を保ち続けることが難しくなる。その時々のおもひに依じて、自分の根拠も揺れ動くからである。だから、彼らは、その不安定さを少しでも解消し、不確かで脆弱な自己の基盤を補強するために、身近な人びとからの絶えざる承認を必要とするようになる。……かつての若者たちが……孤独にも強く、むしろ孤高にふるまうことすら可能だったのは、自分の判断に客観的な色彩を与えてくれる社会的な根拠を自己の内面に取り込んでいたからである。その根拠が、つねに一定方向を示しつづける羅針盤の役割を果たして、彼らの自律性を支えてくれたからである。だから、たとえ周囲の人びとから自分だけが浮いてしまおうとも、「我が道を突き進んでいく」と宣言することができた。いわば一般的・抽象的な他者による承認を感じとることができていたので、具体的な他者からの承認を現在ほどには強く必要としなかったのである。

「個性尊重型人間観」と「感情・価値混同型行動指針」を持ち、「マゴコロ主義」を信仰する人は、外部から明示的に価値観を押し付けてくる宗教、思想、「規範」、「しきたり」などを「真心」(＝本当の自分)を抑圧するものとして否定しながら、外部から暗黙的に価値観を押し付けてくることによって「真心」を抑圧するものである「空気」を、自分の直感的・感情的判断を承認してくれるものとして必要とするという矛盾した心を持っている。宗教などの「宗教的権威」や思想、「規範」などの「記号的権威」による支え、あるいは、「しきたり」による「多数派への同調」の保証がないために、自分の直感的・感情的判断に自信を持つことができず、「空気」による承認を望むのである。理念としては、「空気」による支配を否定しておきながら、現実には、「空気」による承認を求めることによって、「空気」に支配されてしまっているのである。

フェスティンガー (L. Festinger) が提唱した「社会的比較理論」によれば、人間は、客観的な手段を用いて自分の意見が正しいかどうかを知ることができない場合には、自分の意見と類似した他者の意見と自分の意見とを比較することによって、自分の意見が正しいという確信を持つようになる。私は、このような現象が起こるのは、自分と似た意見を持つ人間だけを見て、自分と異なる意見を持つ人間の存在を無視する(人ではない存在と見なす)ことによって、自分の意見に賛成してくれる人間だけで構成された「仮想の内集団」を一時的に作り出し、自分の意見はその「仮想の内集団」の仲間から承認されていると思い込もうとするためであると考えられる。そして、日本の若者たちは、この

「仮想の内集団」を現実の内集団にしようとして悪戦苦闘している。

神などの「宗教的権威」、思想などの「記号的権威」は、同じ神を信じる信者たち、同じ思想を信じる同士というような「仮想の内集団」を永続的に作り出し、その「仮想の内集団」内では、皆が同じ意見を持ち、同じように行動していると信じさせることによって、自分はその「仮想の内集団」の仲間から承認されているのだと思い込ませる機能を果たしていると、私は考えている。この「仮想の内集団」の仲間からの支えを信じることができれば、現実の内集団の構成員と対立したり、現実の内集団を離れて孤独に陥ったりしても、耐えることができ、内集団の「空気」の支配を免れ、自分が信じる宗教や思想が許容する範囲内では「我が道を突き進んでいく」ことができるのである。このような人間が、デイヴィッド・リースマンの言う「内部指向型」の人間である（「4.「空気」の支配 (7)他人指向型との関係」参照）。人類は、宗教（神道などの自然宗教を除く）や思想を発明することによって、「内部指向型」の人間を生み出し、狩猟採取時代以来の内集団への依存から脱することができるようになったのであるが、日本人の多くは、宗教や思想を信じ切ることができないために、内集団への依存から脱することができないのである。ただし、宗教や思想を信じ切るということは、その宗教や思想の奴隷になることであって、奴隷という点では、内集団の奴隷と異ならない。

「第12回 暗黒の情報社会と教育 8.権威への依存」で述べたように、人間の圧倒的多数派は、自分を脅かす強大な敵から身を守る（あるいは、安心感を得る）ために、自分で情報を集め、考え、決断し、行動し、その結果に責任を持つという困難で面倒な作業から逃げて、権威に依存する（あるいは、多数派に同調する）ことによって身を守る（あるいは、安心感を得る）という安易な道を選び、自由から逃走し、権威や多数派に縛られるロボットとして生きることを望む生き物なのである。人類は、進化の過程で、そのような行動様式を本能として身につけてしまったのであろう。

心は常に揺れ動くものであるから、「マゴコロ主義」信仰者の言動を予測することは困難である。そのため、相手の心の動きを読み違えて、仲間集団内に感情的な衝突が起きる危険性が高くなる。感情的な衝突を避けるためには、場面、場面で仲間集団内の「空気」を読んで、うまく調子を合わせる必要があるが、細心の注意を払っても、「マゴコロ主義」によって流動化した「空気」を読み切れなくなる。脚本なしに「仲良しごっこ」という劇をアドリブで演じ続けるようなものなのである。

心の揺れ動きによって言動のパターンが変化しないように、特定の事柄に対して常に同じパターンの言動を取るように固定してもらえれば、相手の言動の予測が容易になり、仲間集団内の「空気」が読みやすくなる。さらに、言動のパターン（表面的な性格）を「まじめキャラ」、「天然キャラ」、「へたれキャラ」などのような既存の定型的なパターンに合わせれば、一層、「空気」が読みやすくなる。登場人物の「キャラ」を固定することによって、アドリブでの演技が容易になるのである。

自分の言動のパターンを「キャラ化」して固定すると、固定した「キャラ」と変動す

る「真心」（＝本当の自分）との間に乖離が生じることが多くなっていく。その結果、自分は常に「キャラ」を演じており、その「キャラ」が仲間集団から承認されているだけであり、「本当の自分」は常に隠され、誰からも承認されていないと思えてくる。このような思いを抑えるためには、「本当の自分」を「キャラ化」する必要がある。自分はこういう「キャラ」の人間だ、こういう場面ではこういう直感的・感情的判断をする人間だと思い込むことによって、心の揺れ動きを抑えるのである。「本当の自分」は固定的なもので、変化しないものだと思い込むのである。土井隆義氏は『キャラ化する / される子どもたち』で、このようにして「キャラ化」された内面を「内キャラ」と呼び、外向けに演じられる「キャラ」を「外キャラ」と呼んでいる。

なお、土井隆義氏は、「若い人たちが内キャラにこだわるのは、いかに生きるべきかを指し示す人生の羅針盤がこの社会のどこにも見当たらず、いわば存在論的な不安を抱えているからです。だから、どんな視点からも相対化されることのない不変不動の準拠点として、持ち前のキャラに依存することになるのです」（P.33）と指摘しているが、私は、この指摘は間違っていると考える。「いかに生きるべきかを指し示す人生の羅針盤」を持っているのは、欧米に多い内部指向型の人間だけであり、日本人の多くは、「人生の羅針盤」など持たず、「つぎつぎになりゆくいきほひ」（「3.神秘的な世界観（1）自成的世界観」参照）に追随して生きていただけあり、この追随を保証するために、「キャラ」、「本分」、「職分」を必要としているのである。

（2）限定的共感システム

「外キャラ」を「内キャラ」に一致させることができれば、「外キャラ」に応じた言動が仲間集団から承認されることによって、自分の直感的・感情的判断（＝真心）が仲間集団から承認されていると思いつくことができる。しかし、「内キャラ」に一致させた「外キャラ」、つまり、「内キャラ」に基づく行動を全面的に承認してくれる人は、同じ「内キャラ」、つまり、同じ感性を持っていると思いつく人だけであり、そのような人と出会える可能性は極めて低い。

そのため、限定的な事柄に関して同じ感性を持っている可能性があると思われる者同士が仲間となり、その限定的な事柄に関してだけ、限定的な「外キャラ」を演じ、それ以外の事柄には触れないことによって、「内キャラ」の違いを表面化させないように配慮するということが必要になってくる。このような限定的な関係を複数持つことができれば、「内キャラ」を複数の限定的な「外キャラ」の集合体と一致させることができ、自分の「真心」が仲間集団から承認されていると思いつくことができる。付き合う相手と付き合い方に合わせて、多重人格的に行動することによって、その他者からの承認を得るのである。このような方法を「限定的共感システム」と呼ぶことにする。

限定的な事柄に関してであっても、身近な人から、同じ感性を持つ人を見つけるのは困難である。そこで、ネットワークの力を借りることによって、学級、学校、地域とい

った枠を越えて、限定的な関係を作り出す。原田曜平氏は『近頃の若者はなぜダメなのか』で、次のように述べている。

数年前から東京では、学校や所属がばらばらの若者たち（高校生くらいの年齢）が渋谷などに集まって遊ぶ、といった動きが出てきています。私は彼らを「新・渋谷系の若者たち」と呼んでいます……みんな、可愛いとか、かっこいいとか、お洒落だとか、友達が多いとか、自分のどこかにある程度自信を持っていて、だからこそ、学校内ではなかなか見つからない学外のイケている者を求め、渋谷に集まって夜な夜な遊ぶのです……彼らの出会いは、たとえばある学校の文化祭でたまたま友人に会ったときに、その友人と一緒にいる子とメアド交換をし、メールのやり取りをしているうちにいつの間にか仲良くなったり、クラブに行って友達の友達と仲良くなったりと、……さまざまなところで発生します。そして、最初数人だけだった……集まりにそれぞれが面白い友人を連れて来るうちに、いつの間にか規模が拡大し、グループを形成するようになるのです。……彼らを見ていて面白いと思う点は、彼らの「家庭環境」も「偏差値」も「地域」も、まったくばらばらだということです。(P.201-203)

私が……マーケティング調査を担当したときの話です。その調査は、高校生数人に……ビデオカメラを持たせ、……生活のすべてを撮影してもらい、といったものでした。……ある女子高生の生活に私の目は釘付けになりました。……部活後、彼女は原宿の美容院に行き、美容師さんに髪を切られながら恋愛相談をします。美容院後、……他校の女子と渋谷で会い、小一時間、カフェでおしゃべりをして過ごします。カフェ後、新宿に電車で移動し、また別の学校の女友達と、ウィンドーショッピングやブリクラ撮影をします。新宿後、彼氏と池袋で会い、ファミレスで一緒にご飯を食べます。彼氏と別れた後、電車で地元の駅に戻り、……地元友達（おそらくフリーター）と会い、一緒に漫画喫茶に入ります。……1時間単位でいる街が変わり会う人が変わるという神出鬼没な生活を……彼女は送っているのです。……そのときの気分に合った街に行き、そのときの気分に合った友人と過ごしているのです。(P.209-212)

「新・渋谷系の若者たち」の「家庭環境」も「偏差値」も「地域」も、まったくばらばらだ」というのは、彼・彼女たちは、自信を持っている「自分のどこか」に関して他者からの承認を得るために、「自分のどこか」に関して同質な人と集まっているからではないかと思われる。「自分のどこか」とは無関係な「家庭環境」、「偏差値」、「地域」などは関心外のことであり、また、付き合いにおいて触れてはならないことなのだろう。

(3) 共感演技システム

「限定的共感システム」の中で生きるためには、高いコミュニケーション能力と行動力が必要であり、多重人格的な生き方やコミュニケーションに没頭する生活に疑問を持

たない心が必要である。そのような能力や心を持っていない人は、身近な人と付き合い
ていくか、引きこもるしかない。「居心地の良い地元や自室で似た者同士だけで固まり、
結果、半径5キロメートルの生活に引きこもってしまう若者が逆に増えている」(原田曜
平氏著『近頃の若者はなぜダメなのか』P.220-221)。

身近な人と付き合う場合、できる限り感性を同じくする人と付き合いおうとしても、そ
れには限界がある。そこで、自分の直感的・感情的判断(=真心)を支持してもらうこ
とは無理だとしても、自分の直感的・感情的判断を否定されることだけは避けたいと考
える。土井隆義氏は『友だち地獄』(P.119-120)で、次のように指摘している。

思想や信条といった言語的な観念を通さずに、内発的な衝動や生理的な感覚のみに
依拠した純粋な自分は、自分のふるまいと自分自身とのあいだにクッションを有して
いない。だから、相手とのあいだに生じた軋轢は、……あたかも自分という存在が全
否定されたかのように受けとられやすい。……たとえば、学校の自分は生徒の役割を
演じているだけだと思っていれば、仮に教師から叱られたとしても、それは生徒とし
ての自分が否定されたにすぎず、自分の全人格が否定されたわけではないと思える。
だから、さほど傷つかないでもすむ……しかし、学校での自分も自らの本質をストレ
ートに表したものだという思いが強ければ強いほど、もしそこに非難が加えられると、
それは自分の全人格が否定されたかのような感覚におちいってしまう。だから、昨今
の生徒たちは、教師からの何気ない一言にも大いに傷つきやすくなっているし、逆に
反発も感じやすくなっているのである。……同じことは、……友だち関係にも当て
はまる。むしろ教師よりも親密感が強い分、そこから受けるショックも大きいといえ
る。

思想、「規範」などの「記号的権威」にしたがった行動を他人から批判されても、それ
は、「記号的権威」への批判に過ぎず、自分の人格への批判ではないと考えることができ
る。「規範」や「しきたり」にしたがって生徒の役割を演じないことを教師から批判され
ても、それは、演技を拒否したことに対する批判に過ぎず、自分の人格への批判ではな
いと考えることができる。しかし、「マゴコロ主義」を信仰する者が、自分の「真心」に
基づいた行動を他人から批判された場合、それは、自分という存在そのものが否定され
たことだと感じられる。

各自の「真心」を批判しあうことを避けながら、集団への帰属本能を満たすために、「真
心」を隠して、「仲良しごっこ」を演じる「共感演技システム」が用いられている。「共
感演技システム」に見られる人間関係を、土井隆義氏は『友だち地獄』(P.7-10)で、「優
しい関係」と呼んでいる。

白岩玄の小説『野ブタ。をプロデュース』は、……今日の高校生たちが繰り広げる

人間関係の駆け引きと、その繊細な心理のあやを巧みに描いた作品である……クラスメートたちの多くは、互いの人間関係を円滑にこなしていくため、日々の自己演出に余念がない。たえず場の空気を読みながら、友人とのあいだに争点をつくらないように心がけている。……対立の回避を最優先にする若者たちの人間関係を……「優しい関係」と呼んでおきたい。それは、……大平健が指摘するように、他人と積極的に関わることで相手を傷つけてしまうかもしれないことを危惧する今風の「優しさ」の表われだからである（『やさしさの精神病理』……）。それはまた、他人と積極的に関わることで自分が傷つけられてしまうかもしれないことを危惧する「優しさ」の表われでもある。……現在の若者たちは、……千石保が「マサツ回避の世代」とも呼ぶように、「優しい関係」の維持を最優先にして、極めて注意ぶかく気を遣いあいながら、なるべく衝突をさけようと慎重に人間関係を営んでいる（『マサツ回避の世代』……）……しかし、このような互いの相違点の確認を避ける人間関係は、その場の雰囲気だけが頼りの揺るぎやすい関係でもある。だからそこには、薄氷を踏むような繊細さで相手の反応を察知しながら、自分の出方を決めていかなければならない緊張感がたえず漂っている。……しかし彼らは、その人間関係から撤退する選択肢をもちあわせていない。なぜなら、たとえ息苦しいものだとしても、その人間関係だけが、彼らの自己肯定感を支える唯一の基盤となっているからである。……山本七平がかつて説いたように、私たち日本人にとって「空気」とはまことに大きな絶対権をもった妖怪」でありつづけてきたが（『「空気」の研究』……）、とりわけ今日の若者たちのあいだでは、「優しい関係」を媒介にその絶対権がさらに高まり、急速に先鋭化しつつある。

「薄氷を踏むような繊細さで相手の反応を察知しながら、自分の出方を決めていかなければならない緊張感」を薄めるためには、「キャラ化」が有効である。相手の「外キャラ」が決まっていれば、相手の行動の予測が容易になり、自分の出方を決めやすくなる。さらに、自分の「外キャラ」も決まっていれば、自分の出方は「外キャラ」に応じて概ね決まる。そして、集団の成員全ての「外キャラ」が決まっていれば、それらの「外キャラ」がうまくかみ合っていれば、集団に安定的な秩序が生まれる。これは、個人が「外キャラ」に縛られて自由を失い、集団という機械の歯車になっているという状態、「中間集団全体主義」の状態である。

このような状態でも、「外キャラ」が「内キャラ」に一致していれば、それなりに幸せなのかもしれないが、身近な人と集団を作る場合には、そのようなことは無理である。感性に少しでも違いがあれば、「内キャラ」どおりの「外キャラ」を演じると、感情的な対立が生まれてしまい、集団は分裂する。そのため、「内キャラ」とは乖離した「外キャラ」を演じなければならないのであるが、その乖離の程度には個人差があり、乖離の程度が低い方が満足度が高くなる。そのため、自分の「内キャラ」にできる限り近い「外キャラ」を提示して、仲間に認めさせるといって、「外キャラ」の獲得を巡る戦いが生じる。

この戦いに敗れ、「いじられキャラ」（要するに、いじめられ役）にされてしまうと、悲惨な運命が待っている。

7. 解体する学級

(1) 学級を擬似イエシステム化しようとする動き

柳治男氏は『<学級>の歴史学』（P.21-23）で、次のように指摘している。

学校では、教師と生徒の関係が、単に職務遂行上の限定的関係を超え、日常生活の多様な場面で、多彩な内容を含んで展開する、包括的性格を備えており、……仲間作りや集団作りというように、児童・生徒相互の人間関係が、もっとも重要な課題とされる場合が多い。……清掃活動や給食……誕生会、お楽しみ会、クラス対抗競技など、さまざまな活動が「学級」に抱え込まれる。これらの活動が重層的に組み合わせられて、「学級」を一つの自己完結的な生活の場としている。……日常生活のさまざまな側面に配慮し、教師と生徒の濃密な人間関係を作り上げる「学級」とは、生活の細部にまで親が面倒を見、また親子間の緊密な人間関係が展開する家族共同体とも非常に似通ってくる。……

「学級」が共同体的性格を強く持っているということはさらに、このような性格を強化するための……教育言説が存在するという特徴に連なってくる。それは、……二つの言説に大別することができる。一つには「学級共同体言説」であり、他の一つは「教師・生徒一体性言説」である。

「学級共同体言説」とは、「学級は一つの共同体であるべきだ」という……言説である。……共同体言説は、「支え合い」、「仲間」、「なかよし」、「励まし」、「思い出作り」等の暖かいイメージを……生み出し、児童・生徒の集団への帰属意識を高めようと試みてきた。……教師も生徒も生活を共有し、同じ活動をし、価値観をも共にすべきとする理念が強調されている。……

「学級共同体言説」は、教師と生徒との社会的距離をできるだけ縮めようとする「教師・生徒一体性言説」と共に語られる。……教師と生徒の距離がなくなり、緊密な関係が生まれ、親子関係や兄弟関係にも匹敵するような親密さを実現することが、教師論として展開され、また、そのようなメッセージを伝達する「学園ドラマ」や「教師物」が、テレビや映画で次々と放送される。

また、内藤朝雄氏は『いじめの社会理論』で、次のように指摘している。

学校では、ここるところの交わりによって人間存在が響きあう、集団生活による全人的な教育の共同体がめざされ、それが一人一人にきめ細かく強制される。（P.119）

学校では、これまで何の縁もなかった同年齢の人々を朝から夕方までひとつのクラスに囲い込み、さまざまな「かかわりあい」を強制する。たとえば、集団学習、集団摂食、

班活動、掃除などの不払い労働、雑用割当、学校行事、部活動、各種連帯責任などの強制を通じて、ありとあらゆる生活活動が小集団自治訓練となるように、しむけられる。

(P.122)

柳治男氏と内藤朝雄氏が指摘する学級の特徴は、「擬似イエシステム」の特徴である。「4.「空気」の支配 (3)イエシステムの抑圧性」で述べたように、「擬似イエシステム」に支配された集団・組織は、「家族的で暖かい人間関係」という美名の下に、その成員に無制限な同調行動を要求し、個性の発揮を妨げるが、このことが分かっていない教育関係者が多いようである。

多くの教育関係者は、個性ある者同士が、心を通い合わせ、認め合うことによって、絆を結ぶという共同体（以後、「キズナ共同体」と呼ぶことにする）を学校に実現することを夢見て、自覚なしに、学級を「擬似イエシステム」化しようとしているようである。暖かい人間関係を作り出すことを夢見て、現実には抑圧的な奴隷関係を作り出しているのである。

「キズナ共同体」は、人間の理性に過度の信頼を置き、人間が持つ本能を無視した夢物語に過ぎず、現実には実現不可能であることを歴史が証明している。人類の歴史は、相互不信に陥って、侮蔑し合う者同士が、憎しみ合い、争ってきた歴史である。血のつながった親子・兄弟でも、心を通い合わせ、認め合うことができない場合がある。他人同士ならば、なおさらである。理性を働かせて、感情的に気に食わない人と、「心を通い合わせ、認め合え」と言われも、そんなことは無理である。

「マコト主義」を信仰する人は、誰とでも誠心誠意「話し合えば、分かり合える」とナイーブに信じているのかもしれないが（「4.マコト主義とマゴコロ主義 (2)マコト主義」参照）、「話し合えば、分かり合える」というのは、同じ宗教、思想などを信じている者同士の間だけのことである。世界観、人間観、価値観などの基本的な部分が共通しているので、基本的な部分まで遡ることによって、お互いの言い分を理解することができ、相違点が生じた理由を分かり合えるのである。世界観、人間観、価値観などの基本的な部分が異なっていると、相手が何を言っているのかさえ、理解できない。

子どもの仲間集団内で、異なった役割を果たすという意味で個性を発揮しているように見える場合があるが、それには、二つのタイプがあり、いずれも「キズナ共同体」とは言い難いものである。

一つ目は、「共感演技システム」に支配された集団内で、各自が割り当てられた「外キャラ」を演じている場合である。「5.限定的共感システムと共感演技システム (3)共感演技システム」で述べたように、「外キャラ」は、本物の個性ではなく、見せかけだけの偽物の個性である。「外キャラ」がうまくかみ合っている「共感演技システム」は、表面的には「キズナ共同体」に見えるので、教育関係者は、「共感演技システム」を見て、「キズナ共同体」は実現可能であると誤解しているのかもしれない。

二つ目は、似た者同士が集まって、「多くに順応しつつ、特殊化を図る方法」(ジュディス・リッチ・ハリス著『子育ての大誤解』P.222)であり、このタイプでは、同質性を土台にして、その上で、わずかばかりの個性を発揮しているに過ぎない。デイヴィッド・リースマンの言う「限界特殊化」である。「他人指向型」の人間は「自分たちのそれぞれのパーソナリティに小さな差をつける。……その差はほんのちょっとのものでなければならない。あまりにちがいと具合いが悪い」(デイヴィッド・リースマン著『孤独な群衆』P.38)。

要するに、基本的な部分で同質な者同士の間でなければ、心を通い合わせ、認め合うことによって、絆を結ぶことはできず、そのような共同体である「同質的内集団システム」で発揮される個性は些細なものに過ぎないのである。学級に集められた児童・生徒の間には、基本的な部分での同質性がないので、心を通い合わせ、認め合うことによって、絆を結ぶことなどできない。

結局、理性を働かせて、学級では、嫌いな人とでも連帯し、絆を結んだ振りをしたほうが得であると判断して、「仲良しごっこ」を演じることになり、学級は「共感演技システム」に支配される。

(2) 仲間集団の分立

「擬似イエシステム」の維持には心情的一体感が必要であるが、心情的一体感の醸成には、長期間の濃密な触れ合いが必要である。40人近い子どもたちが、1年間一緒に居ただけでは、心情的一体感は生まれにくい。したがって、学級の「擬似イエシステム」化は、元々、不可能な試みである。学級の「擬似イエシステム」化の試みによって、学級に現実に生まれるのは、「拡大イエシステム」か、仲間集団が分立する場である。

「拡大イエシステム」は、運命共同体意識、同じような仕事をしているという同質性、一体感を高めるための行事による儀礼的・形式的な同調、連合体への貢献に対する報酬という「互恵性」によって、集団・組織が結集するシステムである。学級には、同じことを勉強しているという同質性、清掃活動、給食、誕生会、お楽しみ会、クラス対抗競技などによる儀礼的・形式的な同調、「仲良しごっこ」をしたことに対して高評価を与えるという「互恵性」があるが、最も重要な運命共同体意識がない。学級内の児童・生徒は、成績を巡って競争する者であり、一つの運命を共にする者ではない。

運命共同体意識を欠いた「拡大イエシステム」は解体するはずであるが、かつては、「本分思想」と「マコト主義」が解体を防いでいた。学級のみんなと「仲良しごっこ」をするのが児童・生徒の「本分」であり、自分が「仲良しごっこ」という「誠」を示せば、相手も「仲良しごっこ」という「誠」を返してくれると信じていることができたのである。昔から、本当に仲が良いから学級がまとまっていたのではなく、子どもたちが「誠」を尽くして「仲良しごっこ」を演じてくれていたから、学級がまとまっているように見えていただけなのである。

子どもたちが「マゴコロ主義」を信仰し始めると、「真心」を偽る「仲良しごっこ」をすることを拒否するようになる。「拡大イエシステム」は崩壊し、学級では、強制されて仕方なしに、あるいは、損得尽くで、形式的・儀礼的な同調行動が行われるようになる。学級は、少人数の仲間集団に分かれ、それらが相互に無視・非干渉の立場を貫き、教師から要求されること以外では関わりを持たないことによって、秩序がかりうじて維持されている状態であり、何らかのきっかけがあると、たちまちのうちに、仲間集団同士が争う場になってしまう。この状態は、人類が狩猟採取生活を送っていた時代の集団（バンド）同士の関係と同じようなものであり、人間が本能的に行動した場合、このような状態になるのが自然である。土井隆義氏は『キャラ化する / される子どもたち』（P.9）で、次のように指摘している。

いまの学校では、クラスの一体感がなくなってきているとよくいわれます。最近の中高生たちは、数人程度の小さなグループに分かれ、その閉じられた世界のなかで日常生活を営んでいるからです。グループの内部だけで人間関係が完結してしまっているために、たとえ同じクラスの間であっても、グループが違えば別の世界の人間になってしまうのです。彼らは、「格が違う」とか「身分が違う」などと形容して、グループ相互の上下関係に過剰なほど気をつかいあっています。そして、格や身分が違う人たちのグループとは、……なるべく交友関係を避けようとしています。いわゆるスクール・カーストです。……昨今のクラスは、このカーストによって複数の層に分断されているために、一つのまとまりとして成立しづらくなっているのです。……言葉づかいや立ちふるまい方、はてはファッションに至るまで、グループ間でその流儀を異にしています。そして、グループの違う人たちの真似をすることはほとんどありません。

また、阿部好策氏は、柴田義松編『新・教育原理』「第4章 なぜ学習指導の転換が必要か」（P.83-84）で、次のように指摘している。

100点が当然の超学歴志向の子、他人に無関心な団地族、乱暴な放任家庭の子など、階層や文化のちがいで「住み分ける」学級解体が進む。学級はもはや形だけになった。……「何でも全員参加」に子どもはしらせ、取り組みが進まない。最初から「絶対イヤだ！」と言い張る。……当初「班で協力を競いあえ！」と叫ぶ教師も、やがて、自分の班意識さえはっきりしない子どもたちに気づく。

子どもの仲間集団は「同質的内集団システム」に支配されると安定するが、「同質的内集団システム」を作れるほどの同質性のある仲間を学級内に見つけることは難しいので、子どもたちは、ある程度の同質性で妥協して、「共感演技システム」に支配された仲間集団を作る。「共感演技システム」に支配された仲間集団でも、「真心」を偽り「仲良しご

っこ」を演じなければならないのであるが、学級全体で「仲良しごっこ」を演じるよりも、「真心」を偽る程度が少なく済む（外キャラに内キャラをある程度反映させることができる）。なぜならば、「共感演技システム」に支配された仲間集団には、ある程度と同質性があり、また、相手にしなければならない人数が少ないからである。

8. いじめ

(1) 日本におけるいじめの特殊性

学校などの集団・組織内におけるいじめは、どの国にもあり、日本に特有なものではない。しかし、日本におけるいじめは、欧米諸国におけるいじめと比較して、二つの特殊性がある。

一つ目は、欧米では、加害者が個人である場合が多いのに対して、日本では、加害者が個人ではなく、集団である場合が多いことである。荒井一博氏は『学歴社会の法則』（P.162-163）で、次のように指摘している。

日本のほとんどのいじめが集団対個人（または集団対少数者）の構造をしているのに対して、西欧では個人対個人の構造をしているものがかなり多そうだ……とくに西欧の学校では、腕力の強い生徒が気に入らない者を一人でいじめる場合が少なくないようです。……「力の差」は、日本では集団対個人のように「人数の差」に起因する場合が圧倒的に多い……そのため、いじめには「弱い者」や「弱い立場に立たされた成員」だけではなく、普通の個人ないしはかなり有能で意志の強い個人を標的にするものも含まれています。……それに対して西欧では、権力の差や（とくに学校では）腕力の差に起因するいじめがかなり多い

二つ目は、欧米では弱い者いじめが多いのに対して、日本では、相手かまわずに八つ当たりするタイプのいじめが多いため、いじめのターゲットが次々と替わっていくことである。

このような違いは、欧米におけるいじめは、人的権威システムでの主導権争いに起因する場合が多いのに対して、日本におけるいじめは、後述するように、イエシステムや共感演技システムが誘発することが多いことから生じる。欧米におけるいじめは、サルの群れでのボス争いのようなものなのである。

(2) イエシステムが誘発するいじめ

イエシステムがいじめを誘発するという問題が典型的に現れるのが、学校と大組織である。学校における学級や大組織における部署への所属は、強制されることが多く、選択の自由はない。そのため、嫌な人が所属学級や所属部署にいても、逃げ出すことも、無視することもできず、所属学級や所属部署が変わるまで、「イエシステム」によって要求され

る「仲良しごっこ」を演じ続けなければならない。内藤朝雄氏は『いじめの社会理論』(P.131-132)で、次のように指摘している。

学校に集められた若い人たちは、少なくともそれだけでは赤の他人であるにもかかわらず、深いきずなで結ばれているかのようなふりをしなければならない。……学校では、だれが大切な他者でだれが赤の他人なのかを、……自分の「こころ」で決めることが許されない。……集団生活を通じた「こころ」の教育は学校の業務に含まれており、どういう「こころ」が好ましい「こころ」であるかは、学校が決める。「学校のみんな」になじめない「こころ」は、学校の赤の他人を家族のように感じる「協調性のある集団適応的」な「こころ」へと無理やり教育される。……生徒は学校に強制収容され、グループ活動に強制動員され、いじめや生活指導で脅されながら、「親密なこころ」をこじり出して群れにあげわたす「こころ」の労働を強制される。……生徒は……感情奴隷であるといえる。

嫌な人と「仲良しごっこ」を演じなければならないというのは、自然な感情を強引に抑えつける行動であり、嫌な人に対する怒りを生じさせる。「誰と生々しいつき合いをし、誰と冷淡なつき合いをするかを自己決定できない場合、「いやなやつ」の存在は耐え難い苦痛」(内藤朝雄著『いじめの社会理論』P.131)になり、「いやなやつ」に攻撃を加え、排除しようとする。「お前さえいなければ、こんな嫌な思いをしなくてもすむのに」ということである。

好きでも嫌いでもない人と「仲良しごっこ」を演じるのも、嫌な人と「仲良しごっこ」を演じることに比べれば程度は低いが、自然な感情を抑えつける行動である。この場合に生じる怒りは、自分の怒りを向けるべき相手が分からない怒りである。自分を苦しめているのは、特定の個人ではなく、「イエシステム」というシステム(4.「空気」の支配(3)イエシステムの抑圧性参照)、あるいは、学級や企業を「イエシステム」化しようとしている教育関係者・企業関係者なのだが、そのことが分からないまま、むかつき、いらだち、相手かまわずに八つ当たりしようとする。そして、八つ当たりを正当化するために、八つ当たりする対象に、「いじめられるに値する人間なのだ」というレッテルを貼ろうとする。山脇由貴子氏は『教室の悪魔』で、次のように指摘している。

多くのいじめのパタンで、加害者達は被害者が「いじめられるに値する人間なのだ」という理由を作ろうとする。……因果関係は完全に逆転している。にもかかわらず、加害者達の心の中でいじめが正当化されてしまう。(P.69)

いじめられる側に原因があるからいじめられるのでもない。誰でも被害者になり得るし、誰でも加害者になり得る。……些細なきっかけで、そのターゲットは替わり、次々と移行してゆくのだ。(P.106)

一度、いじめが始まると、そこに存在する全員が参加すること強要される。言葉ではなく、雰囲気を作られるのである。……全員を参加させることで、大人に発覚するのを防ぐ。そして同時に、全員を参加させることで自らの罪悪感を薄め、悪を正義に変える。……参加していないとみなされた人間は、裏切り者の烙印を押され、次の被害者になる。

(P.109-111)

恐ろしいのは、被害者がいじめられる理由は加害者達によって作られたものにもかかわらず、作り出した加害者達が、自分たちが作ったフィクションだということを忘れてしまうということである。最初からあった事実のように思い込んでしまうのだ。……集団ヒステリーの一種である。だから加害者達は本心から言う。「汚い」「キモイ」「うざい」「死ねば?」。何の罪悪感もなく、ただ事実を告げているという感覚で。(P.113)

加害者となってしまう子ども達は確かに怒っている。けれど実は、彼ら自身、何に、誰に怒っているのかわからずにいる。その怒りは今までの人生で、彼らの心の中に蓄積された怒りに過ぎない。対象は一人ではなく、特定の間人でもない。表現できなかった「過去の怒り」である。……加害者側にまわる子ども達は、自分の心の中で破裂寸前まで膨れ上がった怒りの風船に自分自身が脅かされている。常に自分を苛立たせ、落ち着かなくさせるその風船をどうにかしたいのだ。……攻撃しているうちに、自分は以前から被害者に対して怒っているのだ、と錯覚していく。自分をこれだけ怒らせたのだから、攻撃されて当然だと理屈が逆転してしまう。(P.166-167)

「誰でも被害者になり得るし、誰でも加害者になり得る。……ターゲットは替わり、次々と移行してゆく」ということは、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（現在は、「生徒指導・進路指導研究センター」に名称変更されている）が行った『いじめ追跡調査 2004-2006』及び『いじめ追跡調査 2007-2009』でも示されており、「高頻度のいじめ被害・加害を繰り返す特定の子どものごく一部であり、被害者・加害者ともに大きく入れ替わる……いじめというのは、ほとんどすべての子どもが被害を受けたり、加害行為に加わったりという形で巻き込まれていく問題です」(『いじめ追跡調査 2004-2006 いじめ Q&A』P.9)、被害経験・加害経験ともに「小学校 4 年生から中学校 3 年生までの 6 年間の間に、いじめと無関係でいられる児童生徒は 1 割しかいない」(『いじめ追跡調査 2007-2009 いじめ Q&A』P.9) と指摘している。

いじめの正当化は、加害行為に「参加しなければ許さない」という「空気」を醸成することによって、その場の全員が加害行為に参加しているという事実を作り出すことによっても行われる。「事実・価値混同型行動指針」を信じる大人たちに対しては、「空気」にしたがって仕方なく、いじめに加わったのだと思わせ、「感情・価値混同型行動指針」と「マゴコロ主義」を信じる首謀者に対しては、被害者をいじめようという直感的・感情的判断(=真心)をみんなが支持してくれているのだという気持ちを持たせる。被害者をいじめたくないという直感的・感情的判断(=真心)を持っている子どもたちは、

自分の「真心」に反する行動を強要されたのだから、本来であれば、「マゴコロ主義」に反したことをしてしまったことになり、精神的に苦しむはずである。ところが、人間の意識には、自分が現に取っている行動を見ることによって、その行動の原因となりうる感情を自分は持っているのだと考える傾向がある。つまり、元々は怒りの対象ではなかった人でも、その人に対して攻撃を加えていくうちに、自分はその人に怒っているのだと錯覚してしまうのである。この錯覚によって、「マゴコロ主義」に反したことをしたという気持ちは消失する。

「イエシステム」に支配された学級における「仲良しごっこ」は、「仲良しごっこ」を支配する「空気」の決定を巡る過酷なパワーゲームになる。学級には、どのように「仲良しごっこ」をすべきかに関する明確な「しきたり」や「規範」はない。「しきたり」や「規範」は、「他人行儀で冷たい人間関係」を導くものであるとして拒絶される。心を通い合わせるためには、「しきたり」や「規範」は邪魔者であると見なされるのである。その結果、移ろいやすい「空気」にしたがって、「仲良しごっこ」を演じなければならないことになる。「4. 「空気」の支配 (5) 「空気」の作り方」で述べたように、「空気」の醸成には、集団・組織内において力のある者が大きな影響力を持つ。同一メンバーが長期間在籍している集団・組織では、年功序列などの格の違いにより、だれに力があるかは安定的に決まるが、1年ごとに入れ替わる同年代の児童生徒で構成された学級では、そのような格の違いによる安定的な秩序は生まれにくい。そのため、生の力がぶつかり合うパワーゲームになってしまう。

このパワーゲームの手段として有効なのが、集団でのいじめを主導することである。みんなで一緒に、誰かを生け贄にして、いじめるという同調行動を主導するということは、同調行動を促す「空気」を作り出す力を持っているということを誇示することになるとともに、自分たちが属する学級において、どのような行動をとってはならないかを示すことにもなるからである。長谷川裕氏は「いじめ現象はどのように構成されるか」で、次のように指摘している。

いじめの本質的性格は、それが、相互に欲望する対象を模倣し合う（＝「模倣欲望」を抱く）「分身」同士と化した者たちが、互いの間の「相互暴力」の沸騰の危機を回避すべく、「全員一致」である唯一の「スケープゴート」に向かってその暴力を集中させる、「供儀」現象……である……

互いの間で、例えば身分や能力の点での歴然とした差異を認めず、そうした越えがたい差異があるとは見えないゆえにかえって（かといって、お互いを尊重し合う平等な関係性を築き維持しようとするのではなく）、互いに相手よりも上のポジションに位置したいと欲望する「分身」同士の関係性がある時、供儀としてのいじめが発生しやすい。

(3) 共感演技システムにおけるいじめ

「6.解体する学級」で述べたように、学級の「擬似イエシステム」化は失敗し、学級は少人数の仲間集団に分かれ、それらが相互に無視・非干渉の立場を貫くようになってきている。その結果、「昨今のクラスは、かつてのような統一性を失った結果、いじめの演じられる舞台としては、ほとんど機能しなく」（土井隆義著『友だち地獄』P.24）なり、仲間集団内でのいじめが主流になってきている。

山中一英氏は「学級集団と友人関係」をめぐる諸問題への社会心理学的接近で、子どもたちは、学級内で一人孤独にすることをおそれ、新年度開始早々から早く友だちをつくらねばならないと焦って仲間集団を作り、いったん、仲間集団が作られた後は、そのメンバーはほとんど変化しないと指摘している。子どもたちが仲間作りを焦る背景には、教師をはじめとする大人たちが、「みんなと仲良くすべきだ。一人でいるのは良くない。コミュニケーション能力が最も重要だ」という価値観を子どもたちにすり込むことと、人類が持っている「内集団」への依存本能があると思われる。森口朗氏は『いじめの構造』（P.41-59）で、次のように述べている。

スクールカーストとは、クラス内のステイタスを表す言葉として、近年若者たちの間で定着しつつある言葉です。……スクールカーストを決定する最大要因は「コミュニケーション能力」だと考えられている。……子ども達は、中学や高校に入学した際やクラス分けがあった際に、各人のコミュニケーション能力、運動能力、容姿等を測りながら、最初の一〜二ヶ月は自分のクラスでのポジションを探ります。……私は、ここでのコミュニケーション能力とは、「自己主張力」「共感力」「同調力」の三次元マトリクスで決定されると考えています。……クラスのノリ（空気）に同調し、場合によっては空気を作っていく力（同調力）は、クラスを生き抜く上で不可欠な力です。……中でも同調力は特にカースト決定の大きな要因になります。

友だちをうまく作れないということは、「コミュニケーション能力」が低いということであると見なされてしまい、スクールカーストが低くなってしまいうので、仲間作りを焦るのである。

土井隆義氏は『友だち地獄』（P.119-120）で、次のように指摘している。

若者のあいだでは、……場の空気を敏感に読みとり、臨機応変にふるまって人間関係をスムーズに流していけるような能力が強く求められる。それが苦手な人間は、人格的にも否定的な評価を受けやすく、学校のクラス内でも、いわゆるスクール・カーストの底辺に位置づけられてしまう。……このような人物像やコミュニケーションのとり方は、……現代の若者たちが内心で強く求めている純粋な自分や、その憧れから生まれる純粋な関係への期待値の高さと相容れないものである。両者のギャップの大きさは、現実の人間関係にどうしても偽りの感覚をもたらしてしまう。

「同調力」、つまり、「場の空気を敏感に読みとり、臨機応変にふるまって人間関係をスムーズに流していけるような能力」は、「イエシステム」に適応するための能力であり、昔から大人たちが普通に持っていた能力であり、現代の若者たちに特有なものではない。「イエシステム」に適応した大人たちの考え方が、若者たちに伝染しているのである。スクールカースト決定の際に「同調力」が重要視されるということは、「同じように考え……同じ価値観を共有して」いるという幻想を持たせる「空気」を二人で醸成して、その「空気」に浸ることによって、心情的一体感を得る能力を「コミュニケーション能力」だと考えているということの意味している(4.「空気」の支配(3)イエシステムの抑圧性参照)。心情的一体感を得ることをコミュニケーションだと考えることは、両者の個性(考え、価値観など)の差をなくすことによって一体感を得るという点において、「個性否定型人間観」を前提にするものなので、「個性尊重」の思想とは矛盾するものなのだが、若者も大人も、そのことが分かっていないようである。若者は、「個性尊重型人間観」と、「純粋な自分」を求める「マゴコロ主義」を信じながら、「個性否定型人間観」と、「前に置かれた事、前にいる人に対して純粋で精一杯であることを求める」(相良亨著『日本人の心』P.97)「マコト主義」に基づいた行動原理を「暖かい人間関係」という美名の下に大人から押し付けられ、「共感演技システム」の維持のために用いている。この両者の矛盾が若者に大きなストレスを与え、いじめなどの原因になっている。

個性を尊重したコミュニケーションとは、異なった意見を持つ者同士が対峙して、意見を戦わせる場であり、その戦いの果てに、新しい見解が生まれて、理解し合うことができる可能性がわずかばかりあるというようなものである。

会ったばかりで相手のことがよく分からない段階で焦って仲間集団を作ってしまうと、メンバーの中に、好意を抱けない人が存在する可能性が高くなる。「共感演技システム」に支配された仲間集団では、好意を抱けない人も「仲良しごっこ」を演じなければならないので、ストレスがたまり、「イエシステム」の下で、好きでも嫌いでもない人と「仲良しごっこ」を演じる場合と同様に、相手かまわずに八つ当たりしようとする。そして、八つ当たりを正当化するために、八つ当たりする対象に、「いじめられるに値する人間なのだ」というレッテルを貼ったり、「いじられキャラ」という「外キャラ」を設定して、いじめを「ふざけ合い」、「いじり」といった遊びに偽装したりする。

相手かまわずに八つ当たりすると言っても、自分が属する仲間集団外の人に八つ当たりすると、いじめが教師などに見つかる危険性が高くなるので、いじめが露見しないように、仲間集団内でいじめが行われることが多い。長谷川裕氏は「いじめ現象はどのように構成されるか」で、次のように指摘している。

学校に通う子どもたちにとってこの「関係性の世界」とは、何よりも、彼/彼女らが学級・部活動などへの所属を介して取り結ぶ子どもたち同士の関係性の世界である。

しばしば子どもたちはその世界を、自分たちの自律的な世界であるとみなし、その構成員以外の介入を嫌う。……いじめを行う者はしばしば、いじめられている者がそのことを教師など大人たちに告げることを「チクリ」という言葉を使って非難し制止しようとする。……いじめられている者もいじめる側と同様に、いじめ—いじめられの問題は自分たちの世界の問題であり大人に漏らすのは卑怯なことだと、自分自身で思い込んでしまっている……こうした事情もあって、教師・大人にとって、子どもたちの間のいじめの発見はそう容易ではないことが通常である。

子どもたちの仲間集団は、「ムラの恥を外にさらすな」という「ムラ」「イエ」「内集団」の「掟」を守り、「教師ムラ（イエ）」、「大人ムラ（イエ）」などの他の「ムラ」・「イエ」の介入を許さずに、自分たちの仲間集団の自律性を守ろうとしているのである（「1.イエとムラ（6）世間」参照）。このことが、いじめの発見を困難にさせる。たとえ、教師がいじめを発見しても、教師集団は、「ムラの恥を外にさらすな」という「掟」を守り、学校ぐるみ、あるいは、教育委員会ぐるみで、いじめを隠蔽しようとする。

(4) いじめられても仲間集団を離脱できない理由

森口朗氏は『いじめの構造』（P.49-50）で、次のように述べている。

スクールカーストが上位の子どもほどグループ間を容易に移動できるので、いじめのターゲットになりにくく、結果的にスクールカーストの高いグループ内ではいじめは発生しにくくなります。これに対し、スクールカーストの低い子どもは容易にグループを移動できません。移動先が彼を受け容れてくれないからです。それゆえ、スクールカーストの低いグループ内ほどいじめが発生しやすくなります。しかし、子どもの視線からは、いじめられてもそのグループを離脱しないいじめられっ子は「自業自得」に映ります。……いじめられたら群れから離れて孤独に耐えるというのが、子ども達が描く「あるべきいじめ被害者の姿＝作法」なのです。

いじめられて仲間集団を離脱し、一人孤独になるというのは、「コミュニケーション能力」が最低であるという証になり、スクールカーストが最下位になってしまうので、仲間集団から離脱しようとしなないということであるが、私は、そのような原因よりも、人間が持っている集団への依存本能の影響の方が大きいと考える。

人類が、「バンド」と呼ばれる小集団に属して狩猟採取生活を送っていた時代には、自分が生まれついた「バンド」が生存の拠り所であり、「バンド」を離れることは死を意味した。また、「バンド」内で生活するために必要な行動様式や技能は、バンド内の子ども集団の仲間から学んでいたため、子ども集団から追放されることは、生存のために必要な技能を身につけられなくなることを意味した。この結果、人類は、その進化の過程で、

自分の属する「内集団」に依存する本能を身につけたと考えられる。ジュディス・リッチ・ハリスは『子育ての大誤解』で、次のように指摘している。

私たちの祖先が狩猟採取民であった頃……年齢に幅がある子ども集団では、年長の子どもたちが年少の子どもたちの面倒を引き受け、年少の子どもたちは年長の子どもたちを観察することで適切な行動を学習した。……幼い少年たちは年長のお兄ちゃんから荒い扱いを受けても、お兄ちゃんと一緒にいることを好む。(P.224)

この「内集団」への依存本能によって、仲間集団内でいじめられても、その仲間集団にしがみつ、離れられないという現象が起きる。理性的に考えれば、その仲間集団を離れても生きていくことができるのに、人類が狩猟採取生活を送っていた時代に形成された本能が、その仲間集団を離れては生きていくことができないという感情を起こさせ、「今、このグループでうまくいかないと、自分はもう終わりだ」(土井隆義著『友だち地獄』P.17)と思わせるのである。人間が「内集団」や子ども集団を離れても生きていけるようになったのは、近代化・産業化により、市場経済が「内集団」に代わって生産を行い、学校が子ども集団に代わって教育を行うようになってからであり、遺伝子に変化するには不十分な時間しか経過していないのである。

(5) 仲良しごっこを強制することの愚かしさ

菅野仁氏は『友だち幻想』(P.66-67)で、次のように述べている。

どの学校でも……「いじめゼロ」を目指しています。そのためのプランを伺うと、「それにはみんなで一つになって」とか……「みんなで心を通い合わせるような、そんな豊かなクラスを作っていきたいと思っています」と熱く語られます。でも、私は……「……そういうスローガンだけでは、逆に子供たちを追い詰めることにならないかな」と……思ってしまうのです。「……一人でいないで、みんなの輪に入りなさい」という言葉にかえって圧力のようなものを感じる子供や、みんなと一緒に成れないということを気にするあまり「僕はダメなんじゃないか」と思う子どもも少なくありません。また理屈を超えて「こいつとはどうしても合わない」というクラスメートだっているはず。大人になってからは、みんな誰もがそういう体験をしているはずなのに、「……子どものころはどんな子どうしでも仲良く一緒に成れるはず」というのは、子どもの世界にあまりにも透明で無垢なイメージを持ちすぎなのではないでしょうか。

「(2)イエシステムが誘発するいじめ」と「(3)共感演技システムにおけるいじめ」で述べたように、好きでもない相手と「仲良しごっこ」を演じさせられることがいじめの原因になっているのに、いじめをなくすために、「みんなで一つになって」「みんなで心を通い

合わせる」とか言って、「心情的一体感を得ることがコミュニケーションだ。そのためのコミュニケーション能力が重要だ」というイデオロギーを押し付けて、「仲良しごっこ」を強要することは、逆に、いじめを増やすだけであり、何の解決策にもならない。

いじめをなくすためには、学級を、「嫌悪を感じる者との間に距離をとる権利（あるいは生々しいつきあいを拒絶する権利）が保障される」（内藤朝雄著『いじめの社会理論』P.265）場にし、子どもたちに「気に入らない相手とも、お互い傷つけあわない形で、ともに時間と空間をとりあえず共有できる作法」（菅野仁著『友だち幻想』P.70）を身につけさせることが必要である。好きでもない相手とは、「記号的権威システム」や「契約システム」に律せられた「他人行儀で冷たい人間関係」を持つことによって、憎悪の感情の増幅を抑え、攻撃を抑制することができる。嫌いな相手とは必要最小限の儀礼的な付き合いをすることがお互いのためになる。「家族的で暖かい人間関係」は、気の合った少人数の友だちとの間だけで持てれば十分であり、そのような人間関係の形成に、学校は干渉すべきではない。また、学校は、孤高に生きる自由を侵害してはならない。

9. 平等への三つの道

人間の生産能力や戦闘能力には個人差があるために、「権威への依存」と成果（結果）重視の「互惠性」に基づいて集団を組織すると、必ず、集団内に、影響力と財力における上下関係が生じ、不平等になってしまう。能力が高い人を「模倣」する（能力が高い人から学ぶ、能力が高い人の指揮に服するなど）ことが、自分の能力を高め、それが、集団全体の生産力や戦闘力を高めることにつながるのだから、能力が高い人は、多数の追随者を得て、その影響力を強める（「人的権威」をおびる）。また、生産能力が高い人は、生産物の分配という「贈与」を行うことで、他者からの服従という「返礼」を買うことができるからである。

「第8回 能力の個人差 13. 才能の差異を増幅する本能」で述べたように、狩猟採取民の小集団である「バンド」では、狩猟採取した物の分配において「互惠性」を意識することを禁じる「規範」を作ることによって、バンド内に上下関係が生じることを防ぎ、そのような「規範」を作ることによって生じる生産力の低下を「自分の得意なことが好きになり、見返りを期待しないで、その好きなことをする本能」で防いでいた。

このような原始共産制を支えるためには、集団の構成員が得意で好きなことが、集団の生存に必要なことにバランス良く割り振られていることが必要である。この「得意で好きなこと」の分布は、狩猟採取生活に適したものなので、農業社会、工業社会、情報社会には適しない。農業社会、工業社会、情報社会では、「自分の得意なことが好きになり、見返りを期待しないで、その好きなことをする本能」に頼ってはいけず、十分な生産力を確保できないので、生産物を多く作った人に賞賛やお返しを与えたり、生産物の所有権を与えたりすることによって、努力を促すことが必要になってくる。その結果、集団内に上下関係が生まれ、不平等になる。

欧米社会では、影響力における不平等を減らすために、「唯一の神」という「絶対的権威」を信仰することによって、「人的権威」の力を相対的に弱め、「神の下の平等」という理念を作り上げ、その後、「唯一の神」の代わりに、「法」という「記号的権威」を作り出し、「法の下での平等」という理念を作り上げた。さらに、科学的方法、民主主義などの「方法的権威」を發明して、「人的権威」を平等化しようとした。民主主義は、政治的な影響力を平等化しようとする思想である。

また、財力における不平等を減らすために、共産主義、慈善活動、社会福祉という制度を發明した。共産主義は「互惠性」に反したために、生産力の低下を招き、失敗したが、慈善活動と社会福祉は、神との「贈与交換」という信仰を作り出すことによって、成功した。慈善活動は、現世で善行を積むという形で「唯一の神」に対する「贈与」であるから、慈善活動を行えば、「唯一の神」からの恩寵（来世での幸せ）という「返礼」が受けられるという信仰を作り出すことによって、慈善活動や社会福祉は一方的な「贈与」だから、「互惠性」に反し、許されないことであるという考えが生じることを防いでいるのである。

日本は、欧米社会とは全く違う方法で、集団内での平等性を維持しようとした。影響力における不平等が生じることを防ぐために、集団内での「人的権威」の存在を認めず、「多数派への同調」による学習を強制するシステムを作り出した。ただし、これでは、能力が高い人から学ぶことができず、生産能力や戦闘能力の低下を招いてしまうので、「世間」の外に「権威」を求め、その「権威」から技術を学ぶという方法、つまり、優れた技術を持っている国から学ぶという方法を使った。しかし、この方法は、外国には日本より優れた技術があるということを前提にしているので、外国に追い付くことはできても、追い越すことはできない。また、独創的な技術を作り出すことができない。こう言うと、日本にも独自の技術があるではないかという批判があると思うが、日本独自の技術とされているものは、外国から輸入された技術を、その技術の延長線上で改良したに過ぎないものがほとんどであり、真に独創的な技術は少ない。日本では、性能向上、低価格化、小型化、省資源のように目標が明確であり、外国から学んだ技術体系の延長線上で行える改良（改善する、何かを付け足す、何かを省くなど）を、みんなで協力してアイデアを出し合い（一種の「多数派への同調」）、地道に努力して行っている（「努力主義」）だけである（「第 5 回 教育と経済成長 6.イノベーションによる経済発展」参照）。

また、能力の個人差によって財力における不平等が生じることを防ぐために、「努力した人ほど多く得るのが望ましい」というのが「互惠性」を満たすことであり、「実績をあげた人ほど多く得る」というのは「互惠性」に反するという「マコト主義」と「努力主義」のイデオロギーを作り出した。しかし、努力すれば何とかなるのは、生産に要する技術のレベルが低い段階であり、技術が高度化してくると、努力よりも能力が重要になってくる。

以上に述べたように、日本の社会を平等化してきた「イエシステム」、「ムラシステム」、「マコト主義」、「努力主義」は、その機能を発揮できなくなってきたおり、格差の拡大

を招いている。そればかりか、「イエシステム」、「ムラシステム」、「マコト主義」、「努力主義」は、「グローバル経済化」、「知識社会化」への対応を妨害し、日本経済を低迷に陥れている。山田昌弘氏は『希望格差社会』(P.201-203)で次のように指摘している。

日本社会において、希望がなくなる、つまり、努力が報われる見通しを人々がもてなくなりはじめたのが、1998年だと私は判断している。……1997年までは、二万二千人前後で推移していた自殺者数が、1998年に、約一万人増えて三万二千人となり、それ以降、景気の変動に関わりなく、三万人台で高止まりしている。……「リストラ」という言葉が定着し、それが企業の再構築という本来の意味より、業績悪化を理由とした正社員の大量「解雇」「退職勧奨」という意味として一般に知られるようになる。……同じころ中小零細企業の倒産が増加した。……リストラされた人、倒産した中小零細企業経営者に絶望感が広がったのが、自殺が増えた原因だと考えている。彼らは、いままで行ってきた努力(会社に尽くす、自営で頑張る)が無駄になったと感じたのだ。

企業に「誠」を尽くして働いても、企業から裏切られることがある、顧客に「誠」を尽くして商売しても、顧客にそっぽを向かれることがある、結局、努力しても無駄になるのだという経験をすることによって、「マコト主義」と「努力主義」は幻想に過ぎず、「イエシステム」や「ムラシステム」は自分たちを守ってくれないということに気が始めたのである。

<引用・参考文献>

- 阿部謹也『近代化と世間 私が見たヨーロッパと日本』朝日新書、2006年
阿部謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年
阿部謹也ほか『いま「ヨーロッパ」が崩壊する』光文社、1994年
荒井一博『学歴社会の法則 教育を経済学から見直す』光文社新書、2007年
池上知子・遠藤由美『グラフィック社会心理学』サイエンス社、1998年
井沢元彦『言霊(ことだま) なぜ日本に、本当の自由はないのか』(文庫版)祥伝社、1995年
犬飼裕一「にせユダヤ人が語る「日本」の物語 —山本七平と日本人論の知識社会学—」『北海学園大学学園論集』第117号、pp.1-20、2003年
<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/1074>
内田樹『下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち』講談社文庫、2009年
太田肇『選別主義を超えて 「個の時代」への組織革命』中公新書、2003年
金山宣夫『国際感覚と日本人』NHKブックス、1989年
亀田達也・村田光二『複雑さに挑む社会心理学 適応エージェントとしての人間』有斐閣、

2000年

- 河合隼雄『母性社会日本の病理』講談社+α文庫、1997年
- 川上和久『情報操作のトリック その歴史と方法』講談社現代新書、1994年
- 菅野覚明『神道の逆襲』講談社現代新書、2001年
- 菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書、2004年
- 菅野仁『友だち幻想 人と人の<つながり>を考える』ちくまプライマリー新書、2008年
- きだみのる『につぼん部落』岩波新書、1967年
- 公文俊平『情報文明論』NTT出版、1994年
- 鴻上尚史『「空気」と「世間」』講談社現代新書、2009年
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『いじめ追跡調査 2004-2006 いじめ Q&A』、
2009年
<http://www.nier.go.jp/shido/shienshiryou/index.html>
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『いじめ追跡調査 2007-2009 いじめ Q&A』、
2010年
<http://www.nier.go.jp/shido/shienshiryou/index.html>
- 坂井克之『心の脳科学 「わたし」は脳から生まれる』中公新書、2008年
- 相良亨『日本人の心』東京大学出版会、1984年
- 柴田義松編『新・教育原理〔改訂版〕』有斐閣、2003年
- 島藺進編『救いと徳 新宗教信仰者の生活と思想』弘文堂、1992年
- ジュディス・リッチ・ハリス『子育ての大誤解 子どもの性格を決定するものは何か』石
田理恵訳、早川書房、2000年
- 祖父江孝男『文化人類学入門 増補改訂版』中公新書、1990年
- 諏訪哲二『プロ教師の見た教育改革』ちくま新書、2003年
「中央公論」編集部編『論争・中流崩壊』中公新書ラクレ、2001年
- 対馬路人、西山茂、島藺進、白水寛子「新宗教における生命主義的救済観」『思想』665号、
pp.92-115、1979年
- デイヴィッド・リースマン『孤独な群衆』加藤秀俊訳、みすず書房、1964年
- 土井隆義『キャラ化する / される子どもたち 排除型社会における新たな人間像』岩波書
店、2009年
- 土井隆義『友だち地獄 - 「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書、2008年
- 鳥越皓之『家と村の社会学 増補版』世界思想社、1993年
- 内藤朝雄『いじめの社会理論 その生態学的秩序の生成と解体』柏書房、2001年
- 中谷彪『教育風土学 - 牧畜肉食文化と稲作農耕文化の教育問題』晃洋書房、2005年
- 中根千枝『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』講談社現代新書、1967年
- 中根千枝『タテ社会の力学』講談社学術文庫、2009年
- 中根千枝『適応の条件 日本の連続の思考』講談社現代新書、1972年

ニコラス・ハンフリー『内なる目 意識の進化論』垂水雄二訳、紀伊國屋書店、1993年
西田晃一「記記におけるケガレ観念の構造と両義性」『先端倫理研究：熊本大学倫理学研究室紀要』第3巻、pp.24-41、2008年

<http://hdl.handle.net/2298/10670>

長谷川裕「いじめ現象はどのように構成されるか」『社会科論集 2008：高嶋伸欣教授退職記念』琉球大学、pp.53-63、2008年

<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/8547>

原田曜平『近頃の若者はなぜダメなのか 携帯世代と「新村社会」』光文社新書、2010年
広田照幸『教育には何ができないか 教育神話の解体と再生の試み』春秋社、2003年
福井秀夫・戸田忠雄・浅見泰司編著『教育の失敗 法と経済学で考える教育改革』日本評論社、2010年

ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳、NTT出版、1997年

丸山眞男『忠誠と反逆 一転形期日本の精神的位相一』筑摩書房、1992年

森口朗『いじめの構造』新潮新書、2007年

森谷正規『文明の技術史観 アジア発展の可能性』中公新書、1998年

文部科学省告示『中学校学習指導要領』

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm

柳治男『<学級>の歴史学 自明視された空間を疑う』講談社、2005年

矢野眞和『教育社会の設計』東京大学出版会、2001年

山岸俊男『日本の「安心」はなぜ、消えたのか 社会心理学から見た現代日本の問題点』集英社インターナショナル、2008年

山田昌弘『希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房、2004年

山中一英「「学級集団と友人関係」をめぐる諸問題への社会心理学的接近」『兵庫教育大学研究紀要』第34巻、pp.23-34、2009年

<http://hdl.handle.net/10132/2552>

山本七平『「空気」の研究』文春文庫、1983年

山本七平『日本人と組織』角川書店、2007年

山脇由貴子『教室の悪魔 見えない「いじめ」を解決するために』ポプラ文庫、2009年

(2011年9月30日初出、2012年8月9日改訂、2012年10月19日再改訂)

<福田光宏のホームページ> <http://fukuda.mond.jp/>